

「漱石文庫関係文献目録」は、夏目漱石旧蔵書(本学「漱石文庫」を含む)について言及している文献を収集したもので、該当部分の記事を抜粋して収録しています。

・収録データ数:300件(2003年10月31日現在)

<凡例>

著者名 ◆タイトル  
◇書名/巻号・編著者/出版者/出版年月/ページ  
>抜粋

V・H・ヴィリエルモ ◆メレディスと漱石：心理小説についての一考察

◇「塔」/1(5)/羽田書房/1949.05/p30-33

>メレディスの死(一九〇九年五月十八日)の翌日に於ける漱石の談話は、彼の受けた影響についての秤量を示してゐる。漱石は即座に、メレディスの小説は大抵讀んだ、と言つてをり、又、本の餘白の書き入れを一瞥すれば、「リチャード・フェヴェレルの試練」(The Ordeal of Richard Feverel)「ローダ・フレミング」(Rhoda Fleming)「クロエ物語」(The Tale of Chloe)「ヴィットリア」(Vittoria)「ビーチャムの生涯」(Beauchamp's Career)「悲劇的喜劇役者」(The Tragic Comedians)「驚くべき結婚」(The Amazing Marriage)「サンドラ・ベロニ」(Sandra Belloni)を入念に讀んだことが分る。彼は絶讃の口吻を抑へることが出来なかつた。

荒 このみ ◆ディクソンの辞書

◇「英語青年」/125(7)/研究社出版/1979.10/p299-300

>「すばらしいものが見つかったんだよ。ほら」と言いながら、愛用の茶の皮がばんから分厚いゼロックスの写しを取り出した父は、にこにこと実に嬉しそうな顔をしていた。東北大学の図書館で、夏目漱石の蔵書を調べていて発見したディクソンの辞書(共益商社刊、1887年)には、余白にびっしり漱石の手になる書込みがあり、ほとんど全般にわたっている。漱石の年表改訂に力を注いでいたこの数年であるが、最近では、英語教師として、英文学者としての漱石の軌跡をたどろうとしていた。荒正人の遺志をついで、私どもは現在、この辞書を完成させる作業を進めている。

荒 正人 ◆英文学者としての夏目漱石

◇「英文学誌」/4/法政大学英文学会/1961.03/p33-55

>福原麟太郎が漱石とイギリス文学の関係にふれ、たとえば、『三四郎』の終りに出てくる「迷羊(ストレイ・シープ)」という一句をあげ、この出典が判らぬと述べていた。『聖書』にはこれに近い用法があるが、そのままでない。漱石が讀んだ本をしらみつぶしに調べるほかないかもしれぬ。数年前、東北大学の図書館の一隅にある漱石文庫を訪ねたことがある。英訳の『聖書』もむろんあった。漱石は、ロンドンの下宿で、朝から晩まで読みつづけた。蠅の頭のような小さい字でノートを取りつづけた。イギリス文学を勉強する者として一層気になる。夏目漱石の英文学者としての仕事を、年譜から拾い出してみたい。

荒 正人 ◆漱石とイギリス(1)：「巴里ヲ発シ倫敦ニ至ル」

◇「英語青年」/121(10)/研究社出版/1976.01/p464-465

>夏目漱石は、明治三十三年十月二十八日(日)の「日記」(小宮豊隆編集)に、こう書いている。「巴里ヲ発シ倫敦ニ至ル船中風多シテ苦シ晩ニ倫敦ニ著ス」このほかに一字もない。Parisまで同行し、「万国博覧会」をともに見物したのは、芳賀矢一、藤代禎輔(素人)、稲垣乙丙、戸塚機知であった。芳賀矢一の一行は、Berlinに向つたが、漱石は一人で、Londonに出発した。漱石の「日記」を、三つに分けてみよう。(a)「巴里ヲ発シ倫敦ニ至ル」(b)「船中風多シテ苦シ」(c)「晩ニ倫敦ニ著ス」それにしても、漱石は、ParisからLondonまで、どんな道筋を通つたものであろうか。依然として霧に閉ざされている。

荒 正人 ◆倫敦への道(1)

◇「法政大学文学部紀要」/24/法政大学文学部/1979.03/p47-81

>九月十二日(水)は、横浜港を出帆して、五日めである。夏目金之助(漱石)の日記(小宮豊隆校訂)は急に詳しく、出帆以来四日の分の二倍を超える。逆に、芳賀矢一の日記は、前日の四分の一以下に減る。夏目金之助(漱石)は「夢覚メテ既ニ故郷ノ山ヲ見ズ四顧渺茫タリ乙鳥一羽波上ヲ飛ブヲ見ル船頗ル動揺食卓ニワクラ着ケテ顛墜ヲ防グ。」と書き、芳賀矢一は、「暁起四海波際なくして山影を見ず波間時に飛魚の澆刺たるを見る甲板上下人等種々の遊戯を試む」と書いている。両者ともに、甲板に出たものと推定される。前者は、燕を認め、後者は飛魚を認めたのである。

安藤 久美子 ◆『三四郎』：「ハイドリオタヒア」訳からみた三四郎

◇「国文学解釈と鑑賞」/66(3)/至文堂/2001.03/p95-101

>三四郎の「ハイドリオタヒア」の訳を原書において検討する。三四郎は、「水壺による骨の埋葬」を論じたこの書に、<葬>ではなく、死における再生、<復活>の萌しを掴んでいるというのが結論である。漱石の所有する「ハイドリオタヒア」(和書名「壺葬論」)は、ロンドン版『ブラウン著作集』三巻の一卷にある。『漱石文庫目録』(東北大学附属図書館 昭46・10・1)に拠れば、書き入れ傍線の記入はない。筆者の管見したのは、漱石と同じロンドン版“The Works of Sir Thomas Browne”三巻の第三巻である。この中で、三四郎が目留め翻訳するのは三箇所、三四郎の翻訳部分を検討しよう。

池田 美紀子 ◆漱石とポオ

◇「比較文学研究」/33/朝日出版社/1978.05/p138-158

>漱石がスウィフトに感じたのと同じような親近感を覚えた作家がいたとしたら、それはおそらくエドガー・ポオであったろう。漱石の東北大学所蔵の蔵書に残っている作品集は、詩集、Poems of Edgar Allan Poe with a Biographical Sketch by N.H. Dole (G. Routledge & Sons, 1897)と短篇集Tales of Mystery and Imagination (Routledge & Sons, 1897)の計二冊である。二冊とも明治三十年年にロンドンで発行されたものであるが、漱石はこれを大阪の丸善から買っている。推察するに、漱石は、五高の図書館かどこかで、まず他の版でポオを読み、興味を覚えて、ただちにとり寄せたのではないだろうか。

池田 美紀子

◆漱石と世紀末の女性たち：ヒロインの肖像

◇「比較文学研究」/57/朝日出版社/1990.06/p97-118

>スウィンバーンはD・G・ロセッティやバーン・ジョーンズが絵画に描いたテーマを劇詩にとりあげた(一八六〇)。高慢で無慈悲な美女を、漱石がどう読んだかは「クレイグ先生」からは、うかがい知ることにはできないが、クレイグ宅に本を持って行き感想をもとめたところから考えると、漱石自身はすでに読み興味はいただいていたのではない。現在、漱石所蔵の文庫に残されている『ロザモンド』には傍線も書き込みもないが、『カリドンのアタランタ』(一八六五)は一八九九年版が残っており(Atalanta in Calydon, Lond, Chatto & Windus, 1899)、高雅な調べで有名なコーラスのひとつ全体に傍線がひいてある。

石垣 久四郎

◆漱石文庫目録の改訂更新リスト

◇「東北大学附属図書館研究年報」/31・32/東北大学附属図書館/1999.12/p195-316

>昭和四十六年十月一日に編集発行した「漱石文庫目録」は、当初から多くの研究者・利用者から利活用され、時系列的に原資料との書誌不整合が若干見られ、訂正の指摘を受けるようになってきた。これらの指摘にたいし、長い間情報サービス課参考調査掛でレファレンスサービスを担当していた故高木氏は、数年前より自発的に日常業務の合間を利用して書誌調査とその修正作業に力を注いできた。しかし、彼は大凡完了際に体調を崩された。本研究年報では、本学附属図書館参考業務の開拓・図書館学などでご活躍なされた故高木氏を偲ぶために、ここでは、漱石文庫目録改訂リストを報告することとした。

石垣 久四郎

◆漱石文庫「身辺資料及び漱石関係収蔵資料」目録リスト

◇「東北大学附属図書館研究年報」/33/東北大学附属図書館/2000.12/p45-83

>漱石自筆日記・草稿や句稿資料及び身辺資料等の詳細な整理・目録作業は近年まで進められてきていたが、平成一〇年三月仙台市文学館開館にともなう漱石文庫マイクロ化事業によりほぼ完了した。また、漱石文庫はデータベースとして仙台市文学館開館に合わせてインターネットのウェブ上で公開し、さらに平成十一年末には、身辺自筆資料目録をイメージ画像データベースとしてウェブに公開した。ここでは、本誌三〇・三一合併号「漱石文庫目録の改訂更新リスト」で割愛した、漱石文庫の「身辺自筆資料及び漱石関係収蔵資料」目録リストをその続編として、報告することにする。

石崎 等

◆『虞美人草』の周辺：漱石とズーデルマン

◇「跡見学園短期大学紀要」/11/跡見学園短期大学/1975.03/p55-65

>漱石の所蔵していたズーデルマンの著者は六冊で、しかも『雅歌』がドイツ語の原書であるほかは、すべて英訳本である。『雅歌』をのぞきすべてに書き込みがある。おそらく漱石のドイツ語の語学力が増すのは、小宮豊隆とアンドレーエフの『七死刑囚物語』の独訳を読む明治四二年三月から四月以降のことと考えると、『雅歌』の購入もそれ以後のことに属すると判断してよいだろう。漱石の関心の最も強く寄せられているのは、『消えぬ過去』と『レギーナ』の二著である。そこには女主人公の創造に対する漱石の異様な関心の程がうかがえ、小説構成技術の巧みさに対する惜しみない賛嘆のことが示されているのである。

石崎 等

◆虚構と時間：『虞美人草』について

◇「評言と構想」/2/浅川書店/1975.07/p39-51

>漱石自身の京都旅行の体験を入れることは最初からあったにしても、プランと実作品とはかなりの相違点が見受けられるのである。明治四十年・四十一年頃の「断片」として残されているプランについて、いま焦点を絞って最初の四章にかぎって検討してみよう。《一 叡山。死、D、F／二 保津川 童、女／三 E、I／四 F、G、H、》人物関係図から推定すると、Dは甲野、Eは藤尾、Fは宗近、Gは井上孤堂、Hはその娘小夜子、Iは小野ということになる。つまり最初のプランを考えるかぎり、京都を舞台にした章は一、二、四の三章で、五章以降は東京において小説は展開する予定であった。

石崎 等

◆『三四郎』の方法：小説のすべての内的な筋は、時間の力に対する闘争にほかならない…：ルカーチ『小説の理論』

◇「跡見学園短期大学紀要」/12/跡見学園短期大学/1976.03/p51-64

>「漱石山房蔵書目録」によると、漱石はイプセンの英訳書はかなり所蔵していたことが判る。そこには九冊がみえ、イプセンの主要作品をほぼ網羅しているのが知れる。「短評並に雑感」として書き込まれたものから推測すると、ズーデルマンに対するような熱っぽい鑑賞や積極的な批評は見受けられず、漱石のイプセンへの反応は冷淡なものがあつた。小説から多くのものを学び取るうとしていた漱石にとってそれらが戯曲であつたことも作用していた。『三四郎』における漱石のイプセンに対する関心はほぼひとつに要約される。明治末期の青年男女に顕著になり始めた自我覚醒の問題をどのようにとらえるかである。

石丸 久

◆『虞美人草』について：夏目漱石とG・メレディス(覚書)

◇「比較文学研究 1」/日本比較文学会編/矢島書房/1954.10/p177-195

>メレディスに対する漱石の関心とその傾向とは、その蔵するところのメレディスの著書(概ねこのメレディシアンが祖国に向って帰途についた一九〇二年までのLondon: Constable版)に対する書入等に看ることができる。所蔵本への書入をみても、例えばThe Ordeal of Richard Feverel (London: Constable & Co. 1902. Colonial Library)の二〇五頁第一行以下に「此辺ノhumour頗る佳なり」とあり、The Amazing Marriage (London: Constable & Co. 1902)の三五頁第四章に「メレディスの書中ニハ必ずドココニコンナ篇ガアル。情中ニ景ヲ写シ景中ニ情ヲ描ク頗る詩趣アリ」などと記している。

和泉 一

◆メレディスと漱石(一): 受容と変質

◇「近代」/35/神戸大学「近代」発行会/1964.02/p91-117

> 漱石の語っている如く、メレディスは彼の最も親しんだ英国作家の一人であった。彼の蔵書目録を一つの基準として、作品、資料のよく集められている英国小説家を挙げれば、オースティン、スコット、ジョージ・エリオット、ステューヴンソン、キプリング等と、メレディスであり、就中、詩集に至る迄の、作品全集の揃えられているのは、メレディスのみであることによっても裏付けられるであろう。漱石の蔵書中の彼の小説の大部分は、ロンドン滞在中に蒐集されたもので、英国より帰国の行季の底にあった、これら作品の多くは、既に読み了えられていたと考えてよからう。

井田 好治

◆『漱石のおセロ』について

◇「英学史研究」/7/日本英文学会/1974.09/p147-161

> 「漱石山房蔵書目録」ならびに『漱石文庫目録』(東北大学附属図書館, 昭和46年刊)について、Othello関係書目を点検してみると一巻本の沙翁全集The Leopold Shakespeare, With an Introduction by F.J.Furnivall, London: Cassell & Co. 1882(明治15年)をはじめ、The Works of William Shakespeareは、C. Knight編集の10巻本および7巻本(Pictorial Edition), Sir H. Irving & F. A. Marshall編の14巻本があり、もちろんこのなかにはOthelloが収められている。またMacmillan社出版のいわゆるDeighton本は22巻が現存し、1893年(明治25年)版のOthelloが残されている。

稲垣 瑞穂

◆漱石文庫(東北大学附属図書館)

◇『夏目漱石と倫敦留学』/稲垣瑞穂著/吾妻書房/1990.11/p233-235

> 東北大学附属図書館には周知のように漱石所蔵本が五高前後のものから多数ある。この中、日本に持ち帰った多数の書物と蔵書の目録(東北大学附属図書館蔵「Catalogue of Books From November 1901」)について角野喜六氏が言及しておられるが、その中に、「この西洋紙の所在はわからない。」と記されといる。近年私が調査したところ、同館「漱石文庫」に、この西洋紙等が存在していることを知った。同館のご好意により、三度にわたって閲覧と撮影複写、および本書への転載引用が許されたので、明らかに留学中のものと見られるもののリストを掲げる。

井上 ひさし

◆仙台駅頭の老夫婦への言付け

◇『夏目漱石展: 「漱石文庫」の光彩』/仙台文学館編/仙台文学館/1999.03/p4-6

> 文学者たちを地域という言葉で縛ってはまちがう。魯迅は中国の文学者だが、彼の医学から文学への転身の決意が仙台医学専門学校の細菌学教室でなされたことは周知のこと、藤村は東北学院図書館のストーブのそばで『若菜集』に収められる詩篇と続々と案じ出し、太宰治は河北新報の一室で長篇『惜別』の細部材料をこつこつと集め…。となると、わが仙台文学館が夏目漱石展でその記念すべき開館を飾ることは、彼の愛蔵書が地元の東北大学附属図書館に安らかに保管されているという機縁とも合わせて考えると、まことに時宜を得た企画だったのではないのでしょうか。

井上 ひさし

◆2001年のシェイクスピアと漱石

◇「國文學: 解釈と教材の研究」/46(1)/学燈社/2001.01/p6-7

> 漱石がシェイクスピアの専門家であったことは、「漱石山房蔵書目録」を見れば、よくわかる。彼はさまざまな版のシェイクスピア全集を持っていた。だいたい、留学先のロンドンで真っ先に教えを受けた例のクレイグ先生がシェイクスピアの研究者で、かつ全集の監修者でもあったから、その成果は、帰国後の東京帝国大学でのシェイクスピア講義にはつきりあらわれた。こんど全集を駆け足でめくってみて気がついたが、漱石はいたるところでシェイクスピアを引き合いにだしている。漱石は詩をつくる技術さえも、シェイクスピアから受け継いだのかもしれない。

井上 百合子

◆夏目漱石と外国文学

◇「英語研究」/61(8)/研究社出版/1972.10/p14-18

> ドウデエの『サフォ』(Sapho, Trans. By G.F.Mankschoold, London: Greening & Co., 1905)の見返しに、漱石は書き付けている。明治41年7月1日の高浜虚子宛書簡に「ドーデのサッフオーと云う奴を一寸御読みにならん事を希望致候 名作に御座候。」と書いているので、この書き込みをしたのがいつごろかは、ほぼ推定できる。(フローベルやモーパッサンへの書き込みも、ほぼこの前年かこの年と推定。)漱石は明治41年11月6日、内田魯庵から、訳した『復活』を贈られ、ただちに礼状を書いている。「小生実は英訳の『復活』を読まず」と書いてあるから、魯庵から貰ってはじめて読んだと推定される。

井内 雄四郎

◆夏目漱石とジェイン・オースティン: その会話をめぐって

◇「英文学」/68/早稲田大学英文学会/1992.02/p27-37

> これは、この夏集中的に二人の作家を読み比べているうちに、自ずと私の心に浮かんできた両者の会話の類似性に関する断想、ないしは両者の共通性についてのヒントの如きものである。漱石の蔵書目録を収めた第十六巻『別冊』(昭和四二年)中の洋書目録には、オースティンの小説として『自負と偏見』(Pride and Prejudice)、『分別と多感』(Sense and Sensibility)、『エマ』(Emma)、『マンズフィールド・パーク』(Mansfield Park)の四つが収められており、このうち最初の三作には漱石の読後感を記したこまかい書込みがしてあって、彼が身を入れてオースティンと取組んだ跡が如実にうかがえる。



猪俣 浩

◆漱石とシェイクスピアの《雲》：主に『三四郎』と『ハムレット』について

◇「学習院大学文学部研究年報」/20/学習院大学文学部/1974.03/p249-266

>『ハムレット』には漱石が若い頃から興味を持っていた事実があるが、明治三十七・八年頃の断片に『ハムレット』を論じているものがあり、またテキストの余白の書きこみも極立って頻繁であることから、このことは伺える。断片に残した漱石のハムレット性格論には、時代の嗜好の影響が見られる。'Get thee to a nunnery'の句について、漱石はダウデン編のテキストに「此句無量ノ感慨ナリ 此句ヲ繰り返す所尤も姿致アリ」と書きこんでいる。とりわけ『ハムレット』が色濃く影を落として私に思われるものは、『三四郎』である。私の小論の眼目は、ごく細かい点であるが、漱石とシェイクスピアの雲のイメージに関してである。

伊村 君江

◆夏目漱石とオスカー・ワイルド：日本に於ける『獄中記』の波動 その二

◇「鶴見女子大学紀要」/5/鶴見女子大学/1968.03/p73-99

>『草枕』のなかの最後より2つ目にあたる12章のところに、オスカー・ワイルドの名が見られる。わが国において文学作品のなかにワイルドの名前が出てくるものとしては、これが最も早いものである。漱石の蔵書目録を開けてみると、ワイルドの著書は『獄中記』のほかには『ドリアン・グレイの肖像』と『サロメ』の二冊のみである。思うにワイルドの三冊は帰朝後に取り寄せたと推定される。The Picture of Dorian Gray はめずらしいことに、ドイツの Leipzig Tauchnitz 版(1908)を持っており、Salome はロンドンの John Lane 版(1906)である。『ドリアン・グレイの肖像』を開くと、その扉に相当長い読後の感想が記されている。

伊村 元道

◆卵のフライ：漱石の青春(6)

◇「英語教育」/27(6)/大修館書店/1978.09/p71

>金之助が高等中学校で英語を習った先生の中で、たったひとり名前が分かっているのが、James Murdoch (1856-1921)である。この外人教師の面影は「博士問題とマードック先生と余」に活写されていて、それはまた英学生夏目金之助を知るための絶好の資料でもある。高等中学校時代の金之助の書いた英作文が1篇だけ全集に収められている。それはマードックの編集していた雑誌『みゆーぜあむ』の他の級友たちのものと共に載せられた課題作文'Japan and England in the Sixteenth Century'で、内容は序論だけで尻切れトンボに終わっているが、マードックの評価は高い。

伊村 元道

◆そのころ彼が読んだ本：漱石の青春(7)

◇「英語教育」/27(8)/大修館書店/1978.10/p35

>金之助が高等中学時代に読んだことが分かっている英書が何冊かある。いずれも当時評判だった本である。Shakespeare's Tragedy of Julius Caesar. Ed. With Notes by W.J.Rolfe. New York: Harper & Brothers. 1887. (English Classics)「読至此齣始沙翁筆端有神矣」というような漢文の書込みが'No man but Shakespeare could have written this scene.'という英文に添えられていることから、小宮豊隆が明治22年前後と推定したもの。第4幕第3場の「ブルータスのテントの中」である。坪内逍遙による翻訳『自由太刀余波鋭鋒』がすでに5年前に出ているが、それを彼は読んでいたかどうか。

上坂 信男

◆『源氏物語』と夏目漱石：「宿世」と「偶然」をめぐる

◇「共立女子大学文芸学部紀要」/43/共立女子大学文芸学部/1997.01/p1-28

>『源氏物語』は世界的にも有名な作品だから、少なくとも部分的には読んでいないに違いない。漱石山房の蔵書目録にも、『源氏物語』二十九冊と載っている。一応、所蔵してはいたが、全篇を読破していないと推測させることを、漱石自身が述べている。「徒にだらだらした『源氏物語』、みだりに調子のある馬琴、」「近松もの、さては上田秋成の雨月物語なども好まない。」とも、はっきり言っている。「余が文章に裨益せし書籍」にもかかわらず、叙述方法、思惟内容に『源氏』と漱石作品と両者共通するものがあるのは、興味深い。『源氏物語』における「宿世」と同じ効果を与える言葉として、漱石が「偶然」を用いている。

江藤 淳

◆マロリーと漱石

◇『漱石とアーサー王傳説：『薙露行』の比較文學的研究』/江藤淳著/東京大学出版会/1975.09/p106-144

>漱石の蔵書に三種類のマロリーが含まれていることについては、すでに述べた。そのうちで、特に重要なのは、書入れと傍線の附せられている一九〇〇年(明治三十三年)のマクミラン版二巻本である。全二巻のうち、第一巻は、キャクストン版のマロリー『アーサーの死』第一巻から第九巻までを含み、第二巻は、同じ第十巻から第二十一巻までを含んでいる。四ヶ所に和紙の細片がはさんである部分がある。マクミラン版第二巻の二三八頁と二三九頁のあいだにはさんである紙片には「明治大學分校」と毛筆で記した文字が書かれ、朱印が捺してある。

江藤 淳

◆漱石とその時代：第三部(四)

◇「新潮」/88(4)/新潮社/1991.04/p349-359

>漱石はオーデン神話について、ロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジで二ヶ月間講義を聴いた、ウイリアム・ペイトン・ケアから知識を得たに相違ない。漱石の蔵書のなかには、ケアのEpic and Romance: Essays on Medieval Literature (叙事詩と物語・中世文学論集・一八九七・明治三十年)とThe Dark Ages (暗黒時代・一九〇四・明治三十七年)の二点の著書が含まれている。問題は西洋の叙事詩にあっては過去形で語られるべき物語の時制が、『幻影の盾』では大胆不敵にも、ほとんど残りなく現在形に変換されているという、恐らくこの一点に掛っているのである。

江藤 淳

◆漱石とその時代：第五部(九)

◇「新潮」/94(12)/新潮社/1997.12/p330-340

> 自装本となった『心』の装幀で最も注目すべき点は、表紙に貼り付けられている「心」という文字とその字解にほかならない。これは漢字の字典の字解をそのまま採ったものと覚しく、笥子解蔽篇の文字が、墨の罫のなかに記されているというもので、「心」の字解は八行にわたっている。これはおそらく、『康熙字典』から採ったものに違いない。「漱石山房蔵書目録」によれば、漱石は安永九年(一七八〇)京都風月堂刊の四十一冊本の『康熙字典』を所持していて、江戸中期版のこの字典を日頃愛用していたものと思われるためである。

海老池 俊治

◆漱石と英文学：『虞美人草』と『三四郎』の場合

◇「言語文化」/2/一橋大学語学研究室/1965.11/p89-98

> 現在東北大学図書館に蔵されている旧漱石蔵書中に、James Oliphantという著者のVictorian Novelistsという書物がある。そのなかに、漱石自身の書き込みがあることはすでに知られているが、恐らく未発表と思われる、簡単な、しかし、重要な、個所を見逃すべきではあるまい。書き込みは、彼がMeredithの、とくにThe Egoistの特徴を確認したことを示している。で、それに加えて、The Egoistの顕著な観念“ego”を前面に押し出してみると、それらがそっくりそのまま『虞美人草』の骨組みをなしていることは、疑いの余地がないように見える。

海老池 俊治

◆メレデスとオーステン

◇「英語青年」/112(7)/研究社出版/1966.07/p448-449

> 誰かが「則天去私」を具現した作品の例はときくと、漱石はThe Vicar of Wakefield や Pride and Prejudice をあげたという。『文学論』中に、この小説の第1章をほとんど全部引用して、その写実的手法を称えている。漱石旧蔵のPride and Prejudiceには、すでに知られているように、見返しに著者の平明な客観的態度を指摘している。ところで、興味深いことに、本文につけられた最初のしるしは、21頁の俚諺に対する下線とその右欄外の斜線であり、第二のしるしは、41頁のElizabeth Bennetの機智に富んだ言葉の右欄外に引かれた縦線なのである。このような奇妙な矛盾(?)はいったい何を意味するのであろうか。

海老池 俊治

◆「則天去私」と英文学：ひとつの試論

◇「英語青年」/113(9)/研究社出版/1967.09/p564-565,571

> 「則天去私」と最も関係の深い英文学史上の作品は、Pride and Prejudiceらしい。が、そのほかに文学史的な順列からいえば、それよりも半世紀以前のThe Vicar of Wakefieldがかかわり合っているようである。漱石は「自然」という観念をどう理解していたのであろうか。彼がVicarを読んだ読後感が記録されていれば——が、残念ながら、その資料がない。東北大学図書館の旧漱石蔵書はVicarのテキストを三部含んでいる。そして、そのひとつに、細かい書きこみがある。が、恐らく、彼が青年時代に書き記したらしいそのかすかな文字は、いま、ほとんど判読できない。

大久保 純一郎

◆漱石の『低徊趣味』と英米文学

◇「英語と英文学：研究社月報」/28/研究社出版/1968.02/p6-9

> 漱石は明治22年12月31日付の子規への手紙にMatthew ArnoldのLiterature and Dogma(1873)から受けた感銘を書き送った。これは中村是公が漱石の求めに応じて買ってくれたというアーノルドの論文ではなかろうか。「漱石山房蔵書目録」にはアーノルドの論文集は三種記載されている。その中『全集』が余白書き込みを収録したのはLiterature and Dogmaの1883年の第二版普及版のみである。漱石は意識の連続の問題を論じて、しばしばJamesの名をあげた。おそらくPrinciplesの「意識の流れ」(the Stream of Thought)の章を検討したのであろう。

大久保 純一郎

◆漱石とベルグソン(一)：晩年の作品における時間の問題

◇「心」/23(3)/生成会/1970.03/p14-22

> いつ頃から漱石がベルグソンの著作を読み始めたのだろうか、どんなきっかけからだったのだろうか、そしてそれはどんな影響を漱石に及ぼしているのだろうか。結論をさきに云えば、漱石は明治四十四年、ベルグソンの第一の名著である、Essai sur les donnees immediates de la conscience(1889)「意識に直接与えられたものについての試論」が英訳されるや直ちに読み出し、これに共鳴した。「漱石山房蔵書目録」には、英訳本、Bergson: Time and Free Will. Trans. By F. L. Pogson. London: S. Sonnenschein & Co. 1910.がのっており、また同書に書きこまれた漱石の賞讃の言葉は全集に収録されている。

大久保 純一郎

◆漱石とベルグソン(二)：晩年の作品における時間の問題

◇「心」/23(4)/生成会/1970.04/p14-19

> 漱石は、かねてウィリアム・ジェイムズを通じてベルグソン哲学の現代的意義を認識していたから、明治四十三年出版の『時間と自由意志』を、翌年の初夏に読んだ。漱石は『アセニウム』誌(Athenaeum)の新刊紹介欄などで、英訳出版を知ったのであろう。同誌を彼は一九一〇年(明治四十三年)から購読したからである。第三章の終わりの一節、「自我の二つの様相」(The two aspects of the self)に説かれる「質的時間」(time as quality)と「量的時間」(time as quantity)というベルグソンの術語に、アンダーラインを引いている。この二つの理念が、漱石の小説技法に、どのような影響を及ぼしたであろうか。

大久保 純一郎

◆漱石とベルグソン(完)：晩年の作品における時間の問題

◇「心」/23(5)/生成会/1970.05/p69-77

>ベルグソンは回想を「利得」(gain)であると考え、また、それがわれわれの「自由意志」(volonte libre)の根源の役目をしてくれると述べている(「時間と自由意志」第三章)。しかしそれは「硝子戸の中」のような純粹持続の回想である。それは「道草」の過去の場合とまったく異なる。「道草」の過去は経過してしまっ、もはや現在に残らぬ量的時間である。漱石は英訳書の百五十四頁の欄外に、「余ハ常ニシカ考エイタリ……」と書き込んでいる。そのベルグソンの時間論への共鳴を、「道草」の制作まで、漱石は三四年間抱きつづけたのである。

大久保 純一郎

◆まえがき

◇『漱石とその思想』/大久保純一郎著/荒竹出版/1974.12/piii-iv

>本書の内容をなすものは、部分的に「朝日新聞」、「英語青年」、「心」、「英語文学世界」などに掲載された。その間私は、機会をとらえて、主題と細部を再検討することができた。研究の機会とは、東北大学付属図書館の漱石文庫である。その蔵書には漱石の書き入れがある。さらに、漱石文庫のメモ帳を繰ってゆくと、そこには、丹念な細字の記入事項が、惜し気もなく赤ペンでもって抹殺され、つづいて一気に、達筆でかかれた書き直しが現われる。そのような内容の漱石文庫に親しむことによって、私は漱石の物事の考え方と言いやらわし方をおのづから会得することができたように思う。

大久保 純一郎

◆漱石の則天去私と The Vicar of wakefield

◇「英語青年」/121(6)/研究社出版/1975.09/p242-245

>GoldsmithのThe Vicar of Wakefield (1766)(以下Vicarと略)が西欧の近代小説の中で漱石が最も好きな小説であったことは、一般にあまり知られていない。漱石文庫には現在Vicarのテキストが2種保存されている。一つはVicar, Edinburg, William P. Nimmo, 1874, 208pp.である。もう一つのテキストは仏英対訳のものである。Le Vicaire / De Wakefield / Par Oliver Goldsmith / Traduction Nouvelle / Accompagnee Du Texte Anglais / Paris / Garnier Freres. 399pp.(以下Vicaireと略)。研究者の参考のためにVicaireの中の下線や書き入れのいくつかを紹介しよう。思う。

大久保 純一郎

◆漱石とドストエフスキーの小説：晩年の作品系列の側面

◇「心」/29(1)/生成会/1976.01/p81-95

>「思い出す事など」第二十回及び第二十一回には、ドストエフスキーの人と芸術とが、どのようにとらえられているのか。そのようなインフォメーションを漱石はいったいどこから得たのであろうか。たとえばロシア文学の研究書とか参考書であるが、東北大学付属図書館の漱石文庫目録には、この種の文献が二、三点掲載されている。その中で大患期の漱石が読んだものに、ベアリングの『ロシア文学の巨匠たち』がある。Kaurice Baring: Landmarks in Russian Literature. London. Methuen.1910. 299p.である。ロシア文学研究のための新刊書を漱石が購入したのである。

大久保 純一郎

◆漱石とドストエフスキーの小説(二)：晩年の作品系列の側面

◇「心」/29(8)/生成会/1976.08/p94-100

>「思い出す事など」の二十一で、ドストエフスキーもまた自分と同じように「死の門口まで引きずられながら、辛うじてあと戻りすることのできた幸福な人である」。この叙述にも、彼はベアリングの著書の中の「ドストエフスキーの生涯」を利用した。東北大学付属図書館の好意によって、必要な資料を提供されたので、改めてここで、上述しておきたい。同じ文庫所蔵のメレジュコフスキーの『トルストイとドストエフスキー』の書き入れをも、私は参照することができた。Dmitri Merejkowski, Tolstoi As Man and Artist/With An Essay On Dostoiewski / Westminster / Archbanld Constable / 1902である

大久保 純一郎

◆漱石とドストエフスキーの小説(三)

◇「心」/30(1)/生成会/1977.01/p79-90

>ドストエフスキーのライフを語ったベアリングは、残された百頁をドストエフスキーの小説の紹介にあてる。研究書の三分の二が小説の概観にあてられたのである。当時のイギリスの読書界の要求にこたえたのである。同じ事が明治四十年代のわが国の読書界にも云われうるのであって、たとえば当面の漱石であるが、彼はドストエフスキーの主要小説の内容紹介を丹念に読んで、アンダーラインした。参考のために、その下線の部分の若干を訳出しておこう。次に、キリーロフの自殺を契機として、私はここで、『心』の自殺の問題を考えてみたい。

大久保 純一郎

◆漱石とドストエフスキーの小説(四)：『トルストイとドストエフスキー』再読

◇「心」/30(2)/生成会/1977.02/p80-89

>漱石文庫所蔵のメレジュコフスキーの著作、『トルストイとドストエフスキー』の書き入れを東北大学付属図書館で一見したのは、一九七五年の秋であるが、その時衝撃を受けた感銘を私は忘れがたい。そこには始めから終りにいたる三百十頁の全巻にわたり、赤鉛筆でアンダーラインや傍線が施されている上に、黒鉛筆の書き入れも所どころに散見される。それは本書を漱石が再読した事実を物語っていると私は考えた。試みに、図書館の係官の所見をただしてみると、私と同じ意見であった。同一の文学書を漱石が再読するという事実は、彼の場合、極めて珍しいケースである。



- 大久保 純一郎 ◆漱石とドストエフスキーの小説(五): イギリス小説とロシア小説  
 ◇「心」/30(6)/生成会/1977.06/p81-100  
 >コンラッドの「ナーシサス」評価を要約して漱石は、人情小説にせず、むしろ「自然情小説」への徹底すべきだったという。船長以下の他の船員たち、特に水夫たちの描写に彼は注目している。それは漱石文庫本に残された書き入れによって知られる。「What is a Gentleman (p. 46)の書き入れであるが、文庫の初版本『ナーシサス』の第四十六頁は第二章の始めに該当する。私はツルゲーネフの英訳本の出版に眼を転じて、ツルゲーネフの小説がコンラッドの展開を促進したのではないか、という私見を提供する。漱石文庫にもガーネット訳の『ツルゲーネフ全集』十五巻が所蔵されている。
- 大久保 純一郎 ◆Jane Austen を読む漱石: 漱石文庫探訪ノート(1)  
 ◇「英語青年」/123(8)/研究社出版/1977.11/p340-341  
 >文庫と私とのつながりは古い。この文庫寄贈の第一回分かが図書館へ搬入された昭和10年代の半ばに、当時大学院生であった自分はさっそく案内されて、英文学書のページをひるがえし、漱石の東北大への定着をひそかに感じた。というのは岡崎義恵先生が、直弟子の阿部次郎・小宮豊隆に代って、学問的な研究を展開されていたからである。しかし間もなく仙台を去った私は、その集大成である先生の労作『漱石と則天去私』の出版も、また3千冊に及ぶ文庫の完全な搬入も知らなかった。正規の手続きをふんで私が始めて文庫へ出かけたのは、戦後も昭和40年代に入ってからだ。
- 大久保 純一郎 ◆Meredith を Carlyle にむすぶ漱石: 漱石文庫探訪ノート(2)  
 ◇「英語青年」/123(9)/研究社出版/1977.12/p414-416  
 >「野分」の対話の個処によく似た赤い小説本とは誰の作品なのか。目ぼしい英国の現代作家のすべての書き入れのコピーを順次にとってもらうように、文庫探訪の度ごとに図書館に依頼した。係官は、「アンダーラインまで取れというのは貴君が始めてだ」と言ったが、あえて自分は両一年も続けたらどうか。やがてそれと覚しき赤い全集の一冊が現れた。The Works of George Meredith. London, Constable. 12 vols. 1902. 16°。の中の、beauchamp's Career (1987) 527pp.である。そのぼぼまん中、267-273頁(29章)の7頁にわたり、各パラグラフごとに、あたかも強い共鳴を示すかのように、ペンで傍線が引かれている。
- 大久保 純一郎 ◆シェイクスピア劇と漱石の小説理論: 続 漱石探訪ノート  
 ◇「英語青年」/123(12)/研究社出版/1978.03/p568-570  
 >『全集』に散見する従来の資料を整理し、それによって『三四郎』にいたるまでの漱石の中短編小説とシェイクスピア劇との内面的関係をも明かにしておきたい。第三の資料は「作物の批評」(昭和40年1月1日「読売新聞」)の中の『オセロー』論である。『野分』と第三の資料の発表は、同じく明治40年1月である。それは如上の事情によって、「三統一を破って、しかも立派に出来ているシェイクスピア劇」の概観という序言がつく。この序言の背後には、その頃すでに四大悲劇やさきの史劇のみならず、他の多くの戯曲を、おそらく漱石文庫の書き入れ本15巻のすべてを読み終えていた実績が想定される。
- 大久保 純一郎 ◆ケーベル先生と漱石(二): 哲学と詩  
 ◇「心」/32(11)/心編集委員会/1979.11/p78-85  
 >ウィリアム・クーパー(一七三〇—一八〇〇)に関して一般の英文学史は、弁護士たらんとして挫折した厭世隱遁の詩人というように書き流すが、漱石はクーパーが危機を克服して詩作を敢行した点に注目し、この憂悶の子才の大量の詩作を珍重する。同憂の士としての共鳴である。今日漱石文庫にもその蒐集された資料の一部が残されている。その中で最も注目されるべきものは『クーパー書簡集選』(Selection from Cowper's Letters, edited by Webb, 1897)である。所収書簡の一通(ジョンソン出版店主宛一七九〇、七、三十一日付)の一部分が、「英国天地山川に対する観念」に引用されている。
- 大澤 吉博 ◆夏目漱石とイギリス文学  
 ◇『比較文学を学ぶ人のために』/松村昌家編/世界思想社/1995.12/p129-146  
 >まず、漱石がどのような本を読んだか、というレベルがあるであろう。それを知るためには、漱石がどのような本を持っていたかということを知ることが重要である。夏目漱石の蔵書は今日、東北大学が漱石文庫として所蔵している。その所蔵本の一覧表は現在、岩波書店発行の『漱石全集』に「漱石山房蔵書目録」として掲載されている。また、その蔵書に書き込まれた漱石のコメントは「蔵書の余白に記入された短評ならびに雑感」として全集に収められ、容易に読むことができる。それを丹念に追うことで、漱石がどのような本を読み、どのような感想を抱いたかを知ることができるのである。
- 大島 正 ◆セルバンテス  
 ◇『欧米作家と日本近代文学. 3 ロシア・北欧・南欧篇』(比較文学シリーズ)/福田光治, 剣持武彦, 小玉晃一編/教育出版センター/1976.01/p337-361  
 >夏目漱石のドン・キホーテ観にも注目したい。漱石は『文学論』の中、第二章 文学的内容の基本成分 のおわりのほうで、ドン・キホーテについて述べている。そして次に数例を挙げているが、「若い牝牛を提供されたら、きつとなぎ綱が傍にくっついている」といった調子のもので、全部で八例を数える。漱石はドン・キホーテを英訳で読んだらしいことは、その蔵書などによって明らかであるが、彼が『文学論』で引用している例はスペイン語の原本と対比してみると、ほとんどが合致しない。いわゆる“また聞き”に類するものもあるのではないかと思えるほどである。

大島 正

◆芥川龍之介と夏目漱石：モーパッサンの評価をめぐる

◇「比較文学研究」/33/朝日出版社/1978.05/p159-183

> 明治二十年代にはじめてその名がわが国に知られ、日本近代文学に大きな影響を与えたフランスの作家としてモーパッサン(Guy de Maupassant, 1850-93)の存在は大きい。「漱石山房蔵書目録」には、英訳三冊、フランス語の原書二冊、計五冊のモーパッサンがある。漱石は学生時代に不十分なまま終わったフランス語を勉強したいという気持ちを一生持ち続けていたが、結局はあまりものにならずに終わったようであるから、原書二冊は、買いはしたものの恐らく実際には読まなかったのではないかと思う。実際、漱石の書き込みの残っているのは、最初の三冊の英訳本だけである。

大村 喜吉

◆明治作家と英学：夏目漱石

◇「東京教育大学文学部紀要 西洋文学研究」/5/東京教育大学文学部/1956.02/p17-27

> 漱石の蔵書目録を見れば、漱石はDixonの著作8冊を有している。吾々は工部大学に於けるDixonの斎藤秀三郎への影響を過大評価してはならぬと同じように、文科大学に於けるDixonの夏目漱石への影響を過少評価してはならぬ。兎に角Dixonの下で漱石が、後年英文学(殊に散文文学)を驚く可き程の正確さをもつて味読することを得せしめた、その英語の実力を鋭意養っていたことは否定することは出来ない。漱石の作家の言葉づかいや文体に対する異常なる興味と関心は彼生来の特徴であることは勿論であるが、同時にその師たる英語学者Dixonによつて触発されること大であった。

大村 喜吉

◆ロンドンの夏目漱石：英学史的方法

◇「Athenaeum」/4/アシニアム・ソサイエティ/1960.04/p82-88

> 漱石が乗り込んだドイツ船プロイセン(Preussen)号は明治33(1900)9月8日横浜港を出帆した。この航海のことは、漱石の日記及断片や、妻鏡子そのほかの者に宛てた書簡の中に詳細に語られている。上海から乗船した英米の宣教師の一人が、漱石を見込んで熱心に伝道を試みたが、漱石はこれに対して、神の存在と言うような問題で、哲学的見地から対手をやりこめている。このことは「日記及断片」に書かれている漱石の英文の感想になって表われている。漱石の宗教観を伺う上だけではなくして、漱石の英語に対するalmost perfect commandを知る上にも貴重な文献である。

大村 喜吉

◆「倫敦塔」の構成

◇「Athenaeum」/6/アシニアム・ソサイエティ/1963.06/p79-88

> エインズワースの「ロンドン塔」のことは、漱石が「あとがき」の中で述べている通りで、現に漱石の蔵書のThe Tower of London (London: Cassell & Co. 1903)の中で断頭吏が歌を歌って斧を磨ぐ371頁には漱石はちゃんと横線を引いている。しかし、私のこの小論の目的は、作品以外に一箇の資料を必要としたという事実である。東北大学附属図書館所蔵の漱石文庫の中の一冊であるBaedeker's London(1898年版、11th Edition)の8. The Towerの記事で漱石によってunderlineされている箇所を中心として、「倫敦塔」の大体それに対応して書かれたと判断される部分との比較である。

大村 喜吉

◆漱石の作品における Polarity

◇「東京工業大学学報」/29/東京工業大学/1965.03/p1-9

> ここに一冊の本がある。それはGeorge BrandesのMain Currents In Nineteenth Century Literature II The Romantic School In Germany (London: William Heineman)である。漱石全集に記載され(これは漱石山房蔵書目録に載っているだけでなく、漱石書込の短評と感想が全集の中に記されている)ている本は1902版であり、さらに漱石はロンドン留学から帰って来て、帝国大学において行ったその最初の講義である「英文学形式論」(1903)において本書から引用してノヴァリス(Novalis)とティーク(Tick)の言葉を用いている。

大村 喜吉

◆日本英学史上における夏目漱石

◇「日本英学史研究会研究報告」/51/日本英学史研究会/1966.06/p1-5

> 漱石はケンブリッジ大学に籍を置いて勉強することを断念して、下宿籠城主義を取り、食事を切りつめて、出来る限りの資力を傾けて英文学に関する書籍を購入して帰国せんとしたのであります。これはたしかに留学生としてはあるいはもっとも悪い典型の一つであるかもしれませんが。そのころの日本における英語・英文学の研究体制はまだきわめて幼稚な段階でありました。このような時代背景から見ますれば、漱石のロンドン留学時における態度はそれほど異常なものとはいえません。漱石がどのような本を持ち帰ったかは今日東北大学附属図書館の所蔵の“漱石文庫”を見ますれば、ほぼ想像ができます。

大村 喜吉

◆漱石の「神経衰弱」について

◇「Heron」/16/埼玉大学ヘロン編輯室/1982.03/p5-16

> ここに興味あることは、漱石が自己の蔵書の中に、神経衰弱に関する2冊の書物を持っていたことである。『神経衰弱の予防法』(狩野病院長 狩野謙吾著 明治39年 新橋堂)と『神経衰弱自療法』(狩野病院長 狩野謙吾著 明治43年 新橋堂) —これらはどの漱石全集の別冊(漱石山房蔵書目録)にも記載されている。このことから漱石自身、「自分は神経衰弱にやられている」とは思っていたことは分る。しかしその「神経衰弱」を「狂気」と判断した人々に対しては、すくなからざる憤りを覚えていたにちがいない。この不平と不満の捌け口が「猫」や「坊っちゃん」になってあふれたことはきわめて興味がある。



大森 一彦

◆『漱石文庫目録』の記述について：寅彦が贈った本の点検

◇「書誌索引展望」/7(2)/日本索引家協会/1983.05/p33-35

>『漱石文庫目録』は、特殊文庫目録にふさわしい独創的な工夫がみられる。この中の「I. 洋書—4. 科学」部門には、門下の寺田寅彦が献呈したものと推定される本がいくつか含まれている。寅彦書誌に関する既知の知識をもってそれらの記述をみると、若干の疑問点もあり、かねてより一見し確かめてみたいと思っていた。昭和57年8月13日、それらを実見し、目録と対照する機会を得た。その結果、記述にあたって省略された、目録上からは窺い知れない書誌データが判明し、また記述を補足し、あるいは訂正を要する諸点も見出した。調査の一端を記し参考に供することとしたい。

大森 一彦

◆漱石の「カーライル蔵書目録」考

◇「書誌索引展望」/14(4)/日本索引家協会/1990.11/p1-7

>『漱石全集』第16巻「別冊」(岩波書店1967.4)には、ふたつの蔵書目録が収められている。ひとつは「漱石山房蔵書目録」であり、いまひとつは「カーライル博物館所蔵カーライル蔵書目録」である。「カーライル蔵書目録」は極めて特異な位置を占めているものといえるが、本稿はこれに照明をあて受容の経過を整理し、2・3の知見を提供しようとするものである。Carlyle's House(「漱石文庫目録」no.1077)のCatalogueと「カーライル蔵書目録」との具体的な対応関係を精査し、典拠資料であることを実証することが出来た。さらに内容構成の一面を明らかにすることが出来た。

岡 三郎

◆漱石の夢想とルソーの『夢想』：『硝子戸の中』へのひとつの視点

◇「現代思想」/2(7)/青土社/1974.07/p59-63

>偉大な文学者の書きのこした作品群のなかに、ときおり、その評価が定まるのが著しく遅れる重要作品があるものである。例えばルソーの場合なら『孤独な散歩者の夢想』、ワーズワスの場合なら『序曲』がそれであった。夏目漱石の場合、『硝子戸の中』という作品がとりのこされているように思われてならない。最後の節の文章の中に注目されるのは、ヨーロッパにおける告白文の系譜に対する漱石の自己の作品の位置づけである。漱石山房蔵書目録にはアウグスチヌスは見当らず、英訳のルソーの『告白』とドクインシーの『告白』が入っている。ルソーの著作はほかに『エミール』が所蔵されているが『夢想』はない。

岡 三郎

◆夏目漱石の「カーライル博物館」の解明：その事実と夢想について

◇「青山学院大学文学部紀要」/16/青山学院大学文学部/1975.03/p25-46

>現在、東北大学附属図書館所蔵の漱石文庫のなかには一冊だけカーライルの家に關する案内記様のもの>が存在している。それは1900年The Carlyle's House Memorial Trustが発行者になっているCarlyle's House: Illustrated Descriptive Catalogue of Books Manuscripts Pictures and Furniture Exhibited Thereinと題された118頁ほどの小冊子である。漱石はすでに1905年(明治38年)2月15日号の『学燈』に「カーライル博物館所蔵カーライル所蔵目録」を寄稿しているが、じつはこれらの目録は、この小冊子に記録されているカタログをそっくりそのまま同じ順序に引き写したものである。

岡 三郎

◆夏目漱石におけるヨーロッパ中世文学：「幻影の盾」の材源研究〈その一〉

◇「青山学院大学文学部紀要」/17/青山学院大学文学部/1976.03/p1-21

>ヨーロッパ中世的素材のうえに成り立っている漱石の作品の研究の場合、とくに必要なのがその材源の検討と、同一の主題ないし材源で創作された別の、とりわけヨーロッパの作家の作品との比較対照といった作業であろう。研究者のあいだに様々な推測がなされたり、すっきりしない説明が苦しまぎれになされるのも、「幻影の盾」において漱石が利用した確実な典拠が現在まで判明していなかったからにほかならない。結論をさきに言えば、それはまずJohn RutherfordのThe Troubadours (London, 1873)である。これは漱石文庫の一冊として所蔵されていた文献でもある。

岡 三郎

◆Aylwin 批評にみられる留学以前の漱石のイギリスへの関心：熊本時代の漱石〔I〕

◇「論集」/19/青山学院大学一般教育会/1978.11/p61-69

>漱石は、すでに学生時代に外国の雑誌にたえず注目するという知的習慣を身につけたのではないと思われる。今日、漱石文庫にはThe Athenaeumは欠号が多くなっているが、1910年3月12日から1916年9月まで保存されている。漱石のThe Athenaeumの精読ぶりが注目される。しかも、相当長期にわたって購読していることが明らかである。The Athenaeumの購読と精読を仮定すると、「小説」エイルキンの批評のなかで述べている詳細で、かつ的確な叙述の謎がとけるように思われるのである。Aylwin批評のうちの、作品の外側から検討をすすめている部分の解析を試みることにしてみる。

岡 三郎

◆Tomas De Quincey と夏目漱石：とくに文体と意識の問題に関連して

◇「英文学思潮」/51/青山学院大学英文学会/1978.12/p109-135

>1909[明治42]年8月6日の『国民新聞』に掲載された「テニソンに就て」と題した談話のなかで、De Quinceyの文章を、英文学の散文のうちで、<調子>つまり広いリズムまたは文体の面白味が自分にもよくわかるものうちに教えている。漱石はDe Quinceyの文章を、かなり若い時期から読んでいたようである。今日、東北大学付属図書館に保存されている漱石文庫のなかには、五点のDe Quincey文献がある。去る1974年夏に、これらの文献における漱石の書き入れ、傍線・下線のひき方などを調査した。その後、どのような本を買って読んでいたかという問題を、その資料の一部について述べておきたい。

- 岡 三郎 ◆漱石の漢詩「古別離」と「雜興」の比較文学的研究:とくに『文選』との関連において  
 [熊本時代の漱石 2]  
 ◇「青山学院大学文学部紀要」/20/青山学院大学文学部/1979.03/p1-27  
 >「古別離」と従来「失題」として知られていた一作品が、「古別離」と「雜興」として、夏目漱石の署名で、この『龍南會雜誌』の第七十七号(明治三十三年二月二十八日発行)の「文苑」欄(一〇四頁)に掲載されている。この二首について、注目すべき点は『文選』との関係である。こんにち、東北大学付属図書館に所蔵されている「漱石文庫」には、『文選』は三点がある。すでに熊本時代に少なくとも二点は自分で買い求めていた『文選』の、より完全な板本を、大正元年に入手している事実は、漱石の『文選』に対する関心の深さとその持続性を物語っているようにおもわれる。
- 岡 三郎 ◆ロンドン留学期の漱石の思索と体験についての若干の調査研究  
 ◇「青山学院大学文学部紀要」/21/青山学院大学文学部/1980.03/p9-37, 図版  
 >「漱石は<Monoconscious Theory>の項のノートを中心に心理学の書物を中心に書きすすめながら、しきりに禅僧の体験を連想しているのが特徴的である。漱石文庫のなかには、5点の白隠関係の文献が収蔵されている。／漱石文庫のなかにはSainte-Beuveの文献が二点ある。ひとつはWilliam Sharpが編集した三巻本のThe Essay of Sainte-Beuveで、もう一点はThe Scott Libraryのなかの一冊で、Elizabeth Leeが序論をつけて訳出したものである。／Robert Burnsのインスピレーション体験の挿話を、English Men of LettersシリーズのなかのPrincipal Shairp of the Robert Burnsによって知ったことが明らかである。
- 岡 三郎 ◆夏目漱石の 'monoconscious theory'(純一意識理論)の比較思想的解明  
 ◇「比較思想研究」/7/日本比較思想学会/1980.12/p28-37  
 >ここでは'Monoconscious Theory'の項目の比較思想的視点からの解明の一部を次に述べてみたい。この項目において漱石が依拠している文献は1.Th. Ribot: The Psychology of the Emotions, 2. J.M.Guyau: Education and Heredity, 3. E. W. Scripture: The New Psychology, 4. C. L. Morgan: An Introduction to Comparative Psychology, 5.Casare Lombroso: The Man of Genius, 6. William James: The Varieties of Religious Experience,これら六点のうち最初のリボアの書物が失われているだけで、他はすべて今日もなお東北大学付属図書館の漱石文庫のなかに所蔵されている。
- 岡 三郎 ◆東京大学教養学部図書館に発見された夏目漱石の書き入れ本:『文学論ノート』研究(3)  
 ◇「青山学院大学文学部紀要」/22/青山学院大学文学部/1981.01/p1-26, 図版  
 >漱石がノートの作成のために直接参看した文献は約60点である。このうち4点を除いて、東北大学附属図書館に「漱石文庫」として特別に保存されている。1. H. R. Marshall: Pain, Pleasure and Aesthetics, London, 1894. 2. Th. Ribot: The Psychology of the Emotions, London, 1897. 3. Bayard Tuckerman: A History of English Prose Fiction, New York & London, 1899. 4. C.T. Winchester: Some Principles of Literary Criticism, New York, 1902. Tuckermanの著書は、現在も東京大学教養学部図書館に収蔵されている。さらにWinchesterの著書も同じく現存することが確認されたのである。
- 岡 三郎 ◆イギリス留学前半の漱石のこころの明暗  
 ◇『意識と材源』(夏目漱石研究; 第1巻)/岡三郎著/国文社/1981.11/p123-227  
 >漱石は留学の目的の一つに書籍を買って帰国することを最初から考えていた。ロンドンにおける漱石は、大学に在籍する費用はもとより、<衣食を節して書物丈でも買へる文買はん>という意気込みであったから、書物を買えれば<愉快>であり、買えなければ<不快>であり<不満>であったのである。「漱石文庫」の資料のひとつである「留学中のノート・断片」のなかの九枚におよぶ留学前期の図書購入メモによると、一八〇点のうち、まず二十一番から三十二番までの十二点について、一九〇〇年十一月二十日の日付がメモしてある。
- 岡 三郎 ◆新資料・自筆「蔵書目録」からみる漱石の英国留学: Malory 購入時期などの確定  
 ◇「英文学思潮」/59/青山学院大学英文学会/1986.12/p1-19  
 >「漱石文庫」のなかには、日記・ノート断片などのほかに、漱石自筆の蔵書目録がある。この目録は、購入順に記されているという点で、きわめて貴重な資料的な意味をもつものである。表題 Catalogue of Books / From November 1901. / K. Natsume'. 目録の通し番号は180から始まり1170で終る。ところでこの目録によると、二巻本のマクミラン社版のMarolyのLe Morte D'Arthur購入日が次のように明記されている。三十六年十月十日。力点をおこなった「帰国後海外発注した可能性」の方が明治36年10月10日購入という事実として確定したことになる。
- 岡田 晃忠 ◆夏目漱石とチョーサー作『公爵夫人の書』  
 ◇「日本大学理工学部一般教育教室集報」/31/日本大学理工学部一般教育教室/1982.03/p29-32  
 >現在東北大学図書館に収められている漱石山房蔵書の目録は岩波版「漱石全集」に載っている。その中で、英文学史関係を除いて、チョーサーの作品、およびチョーサーに関する本8点のうち、筆者が書き入れの有無を調査したものは、4点である。今問題になるのはPaton版である。理由は、『公爵夫人の書』The Book of the Duchessを漱石が読んだのはこの版によってであろうということ、またこれがおそらく漱石がチョーサーの作品で読んだ最初のものではなかったろうかと考えられるからである。漱石がこの本を購入したのは明治24年9月11日であることは漱石自身の署名によって判明している。

岡田 晃忠

◆漱石が『カンタベリー物語』を読んだ時期について

◇「日本大学理工学部一般教育教室彙報」/33/日本大学理工学部一般教育教室/1983.03/p45-49  
 >『文学論』におけるチョーサーへの言及は八回ある。その中で特に問題にしたいのは『カンタベリー物語』中にある『学僧の話』The Clerkes Taleへの言及である。漱石がこの話を読んだのはSkeat版(The Student's Chaucer)によってであることは、同書にある書き入れ、行頭行末にある付線および下線がここに引用されている個所と一致することから明らかである。Skeat版を購入した時期はイギリス留学中の明治34年9月30日であることは漱石自身が残している図書購入メモから判明している事実である。漱石がチョーサーを読み終えた時期を明治37年以前と推定するのである。

小木曾 雅文

◆漱石とショー

◇「実践英米文学」/31/実践英米文学会/2001.03/p102-77

>「漱石文庫」のなかには、日記・ノート断片などのほかに、漱石自筆の蔵書目録がある。この目録は、購入順に記されているという点で、きわめて貴重な資料的な意味をもつものである。表題'Catalogue of Books / From November 1901. / K. Natsume'. 目録の通し番号は180から始まり1170で終る。ところでこの目録によると、二巻本のマクミラン社版のMarolyのLe Morte D'Arthur購入日が次のように明記されている。三十六年十月十日。力点をおかなかった「帰国後海外発注した可能性」の方が明治36年10月10日購入という事実として確定したことになる。

奥野 政元

◆W・ジェイムズ著“The Varieties of Religious Experience”への漱石の書き込み

◇「活水日文」/19/活水学院日本文学会/1989.03/p50-87

>夏目漱石の蔵書は、現在東北大学付属図書館に所蔵されているが、今回そのなかのW・ジェイムズ関係の三点の著書を読覧調査する機会を与えられたので、その内容につき、報告したい。三点の資料とは、1.The Principles of Psychology, 2.The Varieties of Religious Experience, 3.A Pluralistic Universe, である。最も多くの書き込みがみられたのは、第二の著書である。書き込み量の大小によって、その著書からの影響を云々することはできないが、少なくとも漱石の文芸と思想を考える上での基礎的な資料となることは、否定できないであろう。

奥野 政元

◆日本における Wordsworth (6) : 夏目漱石の場合

◇「活水論文集. 日本文学科編」/32/活水女子大学・短期大学/1989.03/p79-97

>先に私は、漱石蔵書中のW. ジェイムズ著“The Varieties of Religious Experience”に認められる書き込みについて、調査報告をしたが、引続きここでは同じジェイムズの他の著書“A Pluralistic Universe”中の書き込みにつき報告したい。報告の要領は、前回に倣うが、今回の著書には、傍線以外には書き込みがないので、書き込みの種類は二種類である。また漱石の使用したテキストのページ数は、時間的余裕がなかったため、ここでは示し得なかった。書き込みは、すべて赤鉛筆によるものであった。また漱石の棒線書き込みは、単語、文節、文章など、任意なものが多い。

小倉 脩三

◆漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について：「坑夫」の周辺をめぐって

◇「日本文学」/32(1)/日本文学協会/1983.01/p11-20

>本稿は、明治40年から41年にかけて、つまり講演「創作家の態度」前後の漱石の内面的動きを明らかにする一環として、むしろ「創作家の態度」時においても『心理学原理』がその歩みに重要にかかわっていたことを証するために、作品「坑夫」と『心理学原理』の関連の深さを、改めて論証しようとするものである。この時期の内面的動向全体を解明する鍵が、遺されている漱石の「明治40・41年断片」にあると考え、その断片中の、特に蔵書の原文参照を示すメモの当該箇所を、実際の漱石蔵書に当て調査した。きわめて重要な意義を持つと思われるのは、ジェームズに関するメモである。

小倉 脩三

◆漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について(二)：「意識の選択作用」の説をめぐって

◇「日本文学」/32(6)/日本文学協会/1983.06/p10-21

>漱石は「愛読せる外国の小説戯曲」で、現今の戯曲が、失われた詩趣的装飾を償うために、人間の意識の奥へ奥へと割り込むようになり、その典型がイブセンであるというメーテルリンクの説を紹介している。このメーテルリンクの「戯曲論」というのは、漱石蔵書として現存する『二つの庭』(The Double Garden 1904)と題するエッセイ集中の、「近代劇」(The modern Drama)という文章で、本文は、いわば近代劇がその個有の主題を求めての、模索史というべき文章(おそらく講演録)である。蔵書には多くの個所に傍線が引いてあって、漱石が熱心に読み込んだことがうかがえる。

小倉 脩三

◆美禰子の愛：『三四郎』論 その三

◇「国文学ノート」/25/成城短期大学日文学研究室/1988.03/p45-70

>『三四郎』という作品の手法で特徴的なのは、多くのところで、三四郎の想像や推理が重要な役割を果たしていることである。引用するのは、漱石が『三四郎』執筆の模索期にあったと思われる明治40・41年ごろの「断片」に、Conclusion James Vol. I. P260というメモが記されており、東北大学所蔵の漱石蔵書に、その該当の二六〇ページをたどったものである。この部分には、漱石の手で脇線が付されている。『心理学原理』上巻の第九章「意識の流れ」(The Stream of Thought)の中の「意識の流れ」の「結論」(conclusion)に関する部分である。



- 小倉 脩三 ◆序にかえて：漱石とウィリアム・ジェームズ  
 ◇『夏目漱石：ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』/小倉脩三著/有精堂出版/1989.02/p1-21  
 >漱石文庫として東北大学に所蔵されている漱石蔵書に、ジェームズの著書で所蔵されているのは、『心理学原理』(The Principles of Psychology. Vol. I. II London ; Macmillan& Co. 1901 注—初版発行は1890)、『宗教的経験の諸相』(The Varieties of Religious Experience. London ; Longmans, Green& Co. 1902)、『多元的宇宙』(A Pluralistic Universe. London ; Longmans, Green& Co. 1909)の三冊である。漱石文庫の中に、イギリス留学から帰国後の購入図書に関して、漱石自身、逐次、書籍名を価格と共に記したノートがのこされている。
- 小倉 脩三 ◆Monoconscious Theory と『文学論』：ロイド・モーガン『比較心理学』の影響(一)  
 ◇『国文学ノート』/30/成城短期大学日本文学研究室/1993.03/p85-103  
 >『文学論』は、冒頭において、(F+f)の「意識の波」をもってすべての現象を解釈するという方法が示される。それに関して、初期の漱石の心理学書渉猟の跡を示すのではないか、と思われるのが「Monoconscious Theory」として収められている。漱石によって英国時代から書きつがれたノートである。「意識の波」の説明に援用されている、ルロイド・モーガン『比較心理学序説』(An Introduction to Comparative Psychology 1894)から取り上げたいと思う。この書は心理学書として現在ほとんどかえり見られない。私が調べた限り、日本の大学、公共図書館等にも所蔵本はなく、東北大学の漱石所蔵本によった。
- 小倉 脩三 ◆東北大学所蔵『文学論』関係資料について  
 ◇『漱石研究』/3/翰林書房/1994.11/p205-209  
 >『漱石資料——文学論ノート』に収められているメモ類は、現在、東北大学蔵「漱石文庫」に「英国留学時代ノート」及び「ノート断片3」「ノート断片4」として整理されている。メモは多くノートをバラして、継ぎ目のところで切り取った用紙に書かれ、特定の見出しのもとに、糊で貼り足されている。そこには漱石が各項目ごとに分類整理してノートを取ろうとしたあとがうかがえるのであるが、現状のメモの残され方は、きわめて多様、雑多である。編集に当たって関係諸氏がそれへの対応に苦慮されたであろうことが想像される。今回の調査で、『ノート』に関し、留意しなければならない問題がいくつか浮かんできた。
- 桶谷 秀昭 ◆漱石とドストエフスキ：病理・文明・小説  
 ◇『文學界』/36(1)/文芸春秋/1982.01/p270-293  
 >森田草平の回想によれば、漱石がロシア文学を含めて大陸文学を英語訳で読むやうになつたのは、朝日新聞入社の前後からである。「漱石山房蔵書目録」にはロシア文学では、アンドレエフ、メレジュコフスキイ、ゴオリキイ、チェホフ、トルストイ、ツルゲエネフがあるが、面白いことにドストエフスキイは一冊も持つてゐない。これは森田草平から借りて読んだせみであらう。『煤煙』を書いてからかなり後の頃、ガアネット訳の『白痴』をまづはじめに森田草平は漱石に貸したといふ。森田草平は、漱石が『『白痴』から始めて、三四冊読破したと書いてゐるが、『白痴』以外はドストエフスキイの何を読んだのかわからない。
- 小田 忠雄 ◆「漱石文庫」の資料群  
 ◇『夏目漱石展：「漱石文庫」の光彩』/仙台文学館編/仙台文学館/1999.03/p96-97  
 >今後に残された課題としては、まず、「漱石文庫」に含まれる内容の公開性を高めることである。これまでの点検作業の結果判明したところでは、『漱石全集』に収録されている書き入れは、全体の三分の二にすぎない。断片資料についても、紹介は部分的にあるいは個別な範囲にとどまっている。次に、保存の問題がある。「漱石文庫」の三分の二を占める洋書の殆どは、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて出版されたものであり、酸性紙が使用されている。今のところボロボロに劣化したものはないが、現物そのものを良好な状態でいかに長く保存していくかが今後の大きな課題である。
- 小田 忠雄 ◆漱石文庫：漱石研究の新たな手がかりとなる貴重な資料  
 ◇『日本の文学館百五十選』/淡交社編集局編/淡交社/1999.10/p26  
 >東北大学附属図書館が所蔵する「漱石文庫」は、文豪夏目漱石の旧蔵書を中心とした夏目漱石関連資料の一大コレクションです。これらの「漱石文庫」資料は、それぞれが新たな漱石研究の手がかりとなり得る資料であり、本学では資料の保全を第一と考える立場から、文庫全体を貴重図書扱いとして、一般公開は行っておりません。但し、文庫の内容そのものは、ほぼ全てをマイクロフィルムまたはフォトCDに収録し、本学附属図書館本館および仙台文学館で研究者の閲覧に供しています。また、インターネットによる公開もはじめており、漱石文庫目録や資料の一部をホームページに掲載しています。
- 小田切 進 ◆漱石文庫(東北大学図書館)  
 ◇『文庫へのみち：郷土の文学記念館。続』/小田切進著/東京新聞出版局/1981.12/p30-33  
 >東北大学の図書館には漱石の文庫がある。今度わたしは、昭和二十五年に第四回人間賞を受賞した小説「炎の日——一九四六年八月六日」の作者で古い友人の広中俊雄法学部教授に保証人になってもらい、はじめてこれを見せてもらった。地下一階の丁度真ん中辺りに貴重書庫(1)があって、漱石文庫が収蔵されている。湯本一義書庫係長の案内で嚴重に鍵のかかった書庫に入ると、二十三平方メートルの部屋全部が漱石コレクションになっている。貴重書の閲覧室で漱石の日記と手帖をゆっくり見せてもらう。生まの日記・手帖は強い迫力でせまってくるものがある。

小田切 進

◆夏目漱石の滞英日記：明治三十年代

◇「群像」/40(11)/講談社/1985.11/p272-282

> 先年、東北大学図書館で、これらの日記及断片を手にとりて見せてもらったが、無造作に書きとめられたのを実際みても、漱石は日記をそのまま公表する積りなどなかったのではないかと感じた。横浜出港の日から、日記は淡々としている。滞英中の日記は、翌明治三十四年一月一日から再び始まって八月初め頃まで、ほとんどが一日一行ないし二行にすぎないが、まず欠けることが少く続いている。しかし次第に空白の日が多くなっていて、ついに十一月十三日を最後にブツリと切れ、帰国まで、断片のそのカケラのようなものさえない。〈不愉快〉から〈クダラヌ事〉が気にかかって、もう日記をつける気持がなくなった、と考えるのが自然だろう。

越智 悦子

◆漱石にとっての神：『吾輩は猫である』を緒に

◇「岡山商大論叢」/36(2)/岡山商科大学学会/2000.10/p332-317

> 最後に資料の訂正をしておきたい。村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』(岩波書店)は、漱石研究者にとって全集を補う第一次資料として非常に貴重な労作である。数年前から東北大学附属図書館で「漱石文庫」を閲覧する機会に恵まれ、漱石の癖のあるくずし字を誤読したために生じたと思われる翻刻ミスをいくつか見出した。この稿と関係の深い箇所では、第二九頁、十七行目「三味一体ト云異ナルヲカツギ出シテ」とある「異」は、「愚」の文字がくずされていることから来た翻刻の誤りで、「愚ナル」と読むべきと思われるので、この場を借りて訂正しておきたい。

越智 悦子

◆漱石文庫から見えてくるもの：身辺自筆資料「日記」を中心に

◇「岡山商大論叢」/37(3)/岡山商科大学学会/2002.02/p348-323

> 東北大学附属図書館の漱石文庫は、数ある文庫の中でも整備の行き届いた、つとに有名なものである。その憧憬の的である漱石文庫を一九八八年四月から九月までの半年間にわたって、東北大学内地研修員として閲覧調査する幸運に恵まれた。文庫の中心はA夏目漱石蔵書であり、これはI洋書、II和漢書、III附属—身辺自筆資料の三種に分類され、このように分類されているもののうち、今までに手にとることのできたものはAのIII附属—身辺自筆資料を中心としてIIの一部とIの極めて僅少な部分にすぎない。この論稿ではIIIを中心に閲覧調査を通して得た興味深い諸点について、まとめておきたい。

景山 直治

◆「ベーコンの二十三頁」：漱石のいたずらについて

◇「解釈」/2(5)/解釈学会/1956.05/p20-22

> 『三四郎』の第一章で、主人公三四郎が、名古屋から東京へ来る汽車の中で、ベーコン論文集の二十三頁を開いて読もうとするところがある。漱石山房蔵書目録によると、ベーコン論文集が二部ある。一つは、一八九二、マクミラン刊、Selby編のBacons Essaysであり、一つは、一八七二年、マクミラン刊Wright編のBacons Essays and Colours of God and Evilである。漱石山房蔵書は現在、東北大学に保管されているので、同大学教授佐藤昌介氏を煩わして、上記二書について、それぞれの二十三頁を書写して頂いた。漱石の読んだselby編、二十三頁を開いて見ない限り、謎を解くことが出来ない。

柏木 隆雄

◆漱石とメリメ：美禰子の肖像をめぐる

◇「英語青年」/121(10)/研究社出版/1977.01/p482-484

> この小論は『三四郎』の池の出会いの場面が、実はMerimeeのCarmen (1845)から得られたものであることを証明しようとするものである。当時の漱石のMerimeeに対する関心は、『吾輩は猫である』第十一で独仙に語らせたCordovaの女の水浴の話、『野分』の中野青年が恋人に語るVenusの怪談など、それぞれ数頁を割いてCarmenやLa Venus d' Ille(1837)の部分を用いていることから明らかである。Carmenを引用するに当たっては、漱石の書き込みのある東北大学図書館蔵書のC. G. Ives訳French Little Masterpieces (1903)中のそれに拠った。

柏木 秀夫

◆『薙露行』の比較文学的考察

◇「外国語・外国文学研究」/24/北海道大学文学部/1978.03/p33-81

> 『薙露行』をギネヴィア擁護の書とした場合に重要な意味を持つてくるのがウイリアム・モリスの“The Defence of Guenevere”(一八五八年)である。漱石がこの作品を読んだ確証はない。しかし、次にあげる幾つかの事柄は、漱石がその作品について知っていたという推断を許す傍証となるのではないだろうか。英国留学中の明治三十四年の七月九日にクレーグの許で教えを受けたその足でスウィンバーンの作品と一緒にモリスの作品を買っていること。「漱石山房蔵書」にはモリスに関してはThe Earthly Paradiseの一点しかないが、残された蔵書のリストだけから漱石の読書範囲を限定することは危険である。

片野 孝保

◆『漱石文庫』をマイクロ化・フォトCD化

◇「木道子：東北大学附属図書館報」/22(4)/東北大学附属図書館/1998.03/p6

> 平成10年2月、貴重書資料の劣化・保存対策の一環として、「漱石文庫」のマイクロ・フィルム化と自筆資料のフォトCD化が完了した。現在の情報メディアの形態等も考慮し、約1600枚に及ぶ自筆資料等についてデジタル化(フォトCD化)も行った。仙台市が平成11年3月開館を予定している文学館の資料収集の一環として、東北大学蔵で日本にとっても貴重である「漱石文庫」を広く市民に公開したいとの意向もあり本学に協力・要請があったものである。東京都在住の漱石のご遺族である長男夏目純一氏(孫の夏目房之助氏同席)宅を訪問し、マイクロ化の趣旨、状況等について報告し、賛同を得ている。

加藤 二郎

◆漱石と『禪林句集』

◇「外国文学」/29/宇都宮大学外国文学研究会/1981.03/p1-16

>現在の「漱石文庫」(東北大学図書館)の中にある『禪林句集』は、『増補頭書 禪林句集』という題簽を持ち、明治二十二年名古屋の文光堂の翻刻にかかる。乾・坤の二冊本である。そしてその翻刻の底本は、貞享戊辰正月齋日 洛橋巽偶山阜己十子謹識の識語を持つ貞享五年(一六八八年)の版本である。併し漱石がこの本をいつどこで手に入れたものかは全く分からない。又漱石は所謂蔵書家愛蔵家であった訳ではないので、上の『禪林句集』が終始漱石の下にあった唯一の『禪林句集』であったか否かも断定はし得ない。或いは一・二度の出入りはあったかも知れない。

角野 喜六

◆留学中に購入した書物

◇『漱石のロンドン』/角野喜六著/荒竹出版/1982.05/p223-229

>漱石が留学中に購入した書物を書き留めた帳面が現在、東北大学図書館に保存されている。その表紙には“Catalogue of Books From November 1901”と記されていて、第一頁はNo.180から始まっている。一号ヨリ179号迄ハ別ノ西洋紙ニアリ。帳面ニアラズ。洋行以前ノ書物ノ目録ハ作ラズ」と記されている。帳面の350号の右横に12/7/03つまり一九〇三年七月十二日の日付けがあるから、漱石がロンドンで購入した書物は、349号以内であったことになる。但し192号は重複しているので正しくは350号以内である。シリーズ物の巻数を計算したら冊数は遥かに多くなる。帳面の複写を東北大学図書館の了解を得て掲載する。

加納 孝代

◆漱石のキリスト教観：『イミタチオ・クリスティ(キリストにならいて)』を漱石はどう読んだか

◇『夏目漱石』(作家の世界)/平川祐弘編/番町書房/1977.11/p206-213

>夏目漱石とキリスト教というテーマはどこかひとつの興味をそそのものをもっている。漱石のロンドン時代は注目に値すると思われる。さてロンドン時代のキリスト教への関心のあり方を知る手がかりの一つはトマス・ア・ケンピスの『イミタチア・クリスティ』の英訳本OF THE IMITATION OF CHRISTである。というのはこの小型の本のあちこちに漱石が読みながら英語で、時には日本語で合計四十個あまりの感想を書きつけたり、傍線や下線を施したりしているからである。この本を漱石が手に入れたのはロンドンに着いて約二ヶ月目の一九〇一年一月二日である。

嘉部 嘉隆

◆漱石とトルストイ私見

◇「解釈」/15(3)/教育出版センター/1969.03/p47-48

>漱石の蔵書目録を検すると、英訳本のトルストイの作品がいくつか見られる。『アンナ・カレーニナ』『戦争と平和』はもとより、『コサック』『クロイツツェル・ソナタ』『セヴァストーポリ』その他があり、また『芸術とは何か』には相当の短評・雑感を書き込まれている。しかし、これらはシェイクスピア作品の蔵書数、書き込みの量に劣ること言うまでもない。蔵書数および短評雑感はずし他の漱石が関心を抱いていた諸作家にまさるとは言えないのである。特に短評雑感の書き込みのあるのが『芸術とは何か』であることは注意すべきであろう。漱石はトルストイの文学をそれほど高く評価していなかったとも思われるからである。

加茂 章

◆イプセン号上の漱石

◇「日本文学」/30(7)/日本文学協会/1981.07/p68-85

>明治三十年十月の漱石の英語断片は英国留学途上のプロイセン号で書いたものだが、そこに漱石の思想形成上の二つの重要な端緒を見ることが出来る。一つは、ある種の禪的エクスタシーをしばし体験したことであり。もう一つは上海で乗船した宣教師と長崎で乗船したノット夫人から受けたキリスト教的思想である。それらの出来事が起きた日ないし、記録した日を推定してみる必要がある。東北大学の漱石文庫にある現物の手帖は次のようになっている。B六判を少し小さくした十四行罫横長の手帖。開いた右頁は縦書で俳句九句。一部は明治三十二年十二月十一日高浜清宛書簡にある句。左頁から断片が始まる。

川田 周雄

◆漱石と Pater : 『夢十夜』と The Renaissance 及び Appreciations

◇「大阪医科大学紀要人文研究」/9/大阪医科大学/1978.03/p1-17

>漱石が東京大学で講義し、後に全集に収録されたものを年代順にあげれば、『英文学形式論』それに続く『文学論』及び『18世紀英文学』の三編であり、18世紀の英文学者Addison, Steele, Swift, Pope, Defoeには各々数十ページ以上を宛てて論じられているのに比べれば、Paterについてはごく僅かしか書かれていない。漱石の蔵書目録を見ても、Paterについてはごく僅かしか書かれていない。漱石の蔵書目録を見ても、Paterの作品はThe RenaissanceとAppreciations(共に1901年のMacmillan版)だけであるから、それほど彼に打込んではいなかったと云えるかも知れないが、私にはそうは思えないのである。

川並 秀雄

◆漱石とマルクスの「資本論」

◇「大阪商業大学論集」/25/大阪商業大学商経学会/1967.06/p77-90

>夏目漱石の蔵書のなかに、Karl Marx の「資本論」の英訳があることは、あまり知られていない。漱石所持の「資本論」は Sonnenschein 版1902年3月出版だから、第八版で、Half Guinea International である。しかし、いざ手にとって、この「資本論」を見ると、何一つ書き入れもなければ、アンダーライン一つ引いてもいなかった。私の期待した興味は、すっかり消えてしまったのである。漱石が、如何なる程度に、「資本論」を読んだか、ということは、結局判明しない。仮りに読んだとしても、その影響を適確に認めるところは見あたらない。しよせん漱石は、マルクスの「資本論」という、高い山を仰ぎみただけで、残念ながら、登頂はできなかった。



河村 民部

◆漱石『ころ』とアンドレーエフ『ゲダンケ』との比較文学的研究

◇「文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集」/9(2)/近畿大学文芸学部/1998.03/p282-259

> 漱石が『それから』を朝日新聞に連載したのは明治四十二年六月から十月にかけてであるから、その頃までには少なくとも『七死刑囚物語』は読んでいたし、『ゲダンケ』もよんでいたと思われる。東北大学付属図書館の漱石文庫の中に、英訳で、Leonidas Andreiyeff, A Dilemma, A Story of Mental Perplexity ; tr. By J.Cournos, Philadelphia, Brown Brothers, 1908 (Modern Author's Series)というのがあり、筆者がこの(1997)6月に同図書館で調べた結果、これがなんと問題の『ゲダンケ』、つまりロシア語原書『ムイスリ』の英訳であることが判明した。

河村 民部

◆漱石『行人』のソースをめぐって

◇「文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集」/10(1)/近畿大学文芸学部/1998.12/p208-177

> 女の貞節を試す古典的な物語といえばセルバンテス『ドン・キホーテ』の挿話であろう。漱石が『ドン・キホーテ』を読んだであろうことは、彼の文学論その他でのこの物語への言及からして明らかである。また東北大学付属図書館にある漱石文庫には、『ドン・キホーテ』の二つのヴァージョンがあるが、そのうちの一つ、Cervantes (M. de.) The history and adventures of the renowned Don Quixote; tr. W. the author's life by T. Smollett (Edinb. Hill, 1815. 4 v.) には、上述の挿話の章題に色鉛筆でアンダーラインが施されている。『行人』におけるお直の貞節試しのソースの一つになっているのは間違いないと見てよい。

神田 圭一  
鈴木 誠

◆漱石の庭園観に関する研究

◇「ランドスケープ研究：日本造園学会誌」/65(5)/日本造園学会/2002.03/p389-392

> 漱石の庭に対する関心については、「漱石山房」の蔵書目録の中に『文談花談』(明治40年)、『園藝文庫(1~12巻、別巻)』(明治36、37年)などがあり、漱石自身の草花に対する興味をうかがわせる。また略年譜に記した「イギリスの園藝」では、「全体イギリスの土地は多く石灰質の貝殻交じりである。」「イギリスの庭には全く苔がない、無いばかりならそれほど怪しむに足らぬのであるが、有れば掻き落して仕舞ふという御挨拶には聊か驚き入らざるを得ない。」と述べる。これからも漱石はイギリスの地質自体が悪いという理由があったにせよ、日本の苔や石という自然になじむ庭の情緒を好んでいたといえよう。

菅野 孝彦

◆漱石とニーチェ：近代知識人のニーチェ受容の一断面

◇「東海大学文明研究所紀要」/20/東海大学文明研究所/2000.03/p17-28

> 夏目漱石という一人の近代日本を代表する知識人において、ニーチェ思想がいかに受け入れられ、批判されたのかを明らかにしたいと思う。漱石は、ニーチェの『ツァラトストラ』を読み、さまざまな感想を書き記している。そのとき漱石が手にしたのは、ドイツの原本ではなく『ツァラトストラ』の英訳本 Thus Spoke Zarathustra, translated by A. Tille, London: T. Fisher Unwin, 1899. であつたが、漱石は、その感想を英語で書いている。漱石が、この明治32年に出版された『ツァラトストラ』の英訳本を入手した時期や読んだ日時を特定することはできないが、おおよそ明治38年から明治39年頃ではないかと思われる。

菊田 茂男

◆漱石の蔵書

◇「英語青年」/112(7)/研究社出版/1966.07/p494-496

> 漱石研究は、これまで多くの場合、あまりにも印刷された資料によりかかりすぎではなかったか。漱石芸術の成立と本質を、その根底において深く掘りおこし正しく理解するためには、やはりその形成の内的要因としての蔵書の徹底的な調査をとおして、じかに彼の間味に触れ、その読書傾向・読書法・関心事の所在などを明らかにし、外国文化にたいする共感と反撥の具体相を見究めることによって創作活動の複雑な契機を探りだすことが要求される。特に比較文学的研究にとって、「漱石文庫」の検証は絶対不可欠の前提であるときええよう。

菊田 茂男

◆漱石の身辺自筆資料：東北大学附属図書館所蔵「漱石文庫」の日記・断片・蔵書書き入れ・草稿等を中心として

◇『図説漱石大観』/吉田精一, 荒正人, 北山正迪監修/角川書店/1981.05/p286-294

> 漱石関係資料を、東京から仙台へ移送する作業は、資材不足、運輸事情悪化の時期と重なっていたこともあって、数回に分割して行われた。受け入れ登記が完全に終了したのは、昭和十九年二月二十五日のことである。二冊の欠巻を補った「日記」とともに、「蔵書目録」や雑件資料などが一括して購入登記されたのは、昭和二十五年十月二十三日のことである。その後も、小宮豊隆・林原耕三両家に所蔵されていた漱石自筆原稿や句稿・画軸などに加えて、初版本の類をも別途に受け入れ、再三にわたって「漱石文庫」の補充が行われた。

菊田 茂男

◆「漱石文庫」の深層

◇『夏目漱石展：「漱石文庫」の光彩』/仙台文学館編/仙台文学館/1999.03/p93-95

> 夏目漱石の文学は、古今東西の文明・文化所産の多彩な織糸の数々による〈引用〉の織物をもとにして、自らの身の丈にあわせて精巧に計算され尽くした着衣の世界である。漱石の脳は、日本人(男子)の平均より七十五グラム重く、特に右の前頭葉の発達が著しい「天才的脳髓」の典型であると伝えられる。漱石的〈引用〉の織物による生産工程の秘奥に迫ることは、不可能に近いというべきだろう。しかしながら、われわれは、漱石の〈引用〉の織物の秘法の世界から、完全に冷たく疎外されてしまったわけではない。「漱石文庫」という有効な回路が、逡巡するわれわれを誘い導いてくれるにちがいないからである。

北住 敏夫

◆東北大学附属図書館の漱石文庫

◇「日本古書通信」/31(12)/日本古書通信社/1966.12/p1

>東北大学附属図書館には、狩野文庫を初めとして誇るべき特殊文庫が多いが、漱石文庫もその一つである。多くの本に書込みがあるのは、漱石研究の資料としてすぶる貴重である。見返しや巻末には全体的な批評の言葉が見える。W. B. Worthfoldの“The Principles of Criticism”の二百二頁で、「若し日本人が此想ヲアラハス時ニハ十中八九共散文ノ形ヲ採ムベシ。吾人ノ詩ト云フ觀念ト西洋人トハ根本ニ於テ余程違フナリ。未ダ此辺ヲ充分ニ論ジタル者ナキハ遺憾ナリ」と記され、日本人と西洋人の考へ方の違ひに思ひをいたしてゐたことがうかがはれる。

北住 敏夫

◆漱石の「人生論覚え書」

◇「文化」/30(4)/東北大学文学部/1967.03/p119-125

>「漱石文庫」には、漱石の蔵書の外、日記や覚え書などの「断片」が含まれてゐる。「断片」は既刊の『漱石全集』にも収録されてゐるが、公表されないまま今日に至つたものも少なくない。そのうちの比較的まとまつた長文のもので一篇をここに紹介する。内容の上から仮に「人生論覚え書」といふ題をつけ、三節に分れてゐると見られるので、順次[一][二][三]の番号を附した。人生のいかなるものであるかといふこと、いかに生くべきかといふことが、漱石にとっては極めて重大な問題であつた。それについての見解を、正面からかなり秩序立つた形で表明したものとて、この覚え書は注目に値するのである。

木村 毅

◆ツルゲェネフと日本文壇

◇「新潮」/32(5)/新潮社/1935.05/p116-123

>夏目漱石は、えらい讀書家であつたが、只、眼だけで読んでゐる。ハートを以て、魂を以ては、本を讀んだ事のない人だ。それが『ルーゼン』をガーネットの英譯で讀んでかう書きこんでゐる。○此二三頁ヲ讀ンデ余ノ『虞美人草』ガココカラアル hint ヲ得タ様ニ思フ人ガアルカモ知レト感ジタ。驚イタ。『虞美人草』ヲ書クマヘニ Rudin ヲ讀メバヨクツタ。コンナ嫌疑ノ起ラヌ様ニカイタモノヲ。『虞美人草』ガメレディスの大模倣であり、サンドラ・ペロニの縦冊であることは棚に上げて、『ルーゼン』の模倣と見られはしないかと云う事のみ氣にしてゐるのは、一寸面白い。

久野 真吉

◆漱石と「ハムレット」

◇「宮城学院女子大學研究論文集」/4/宮城学院女子大学/1953.12/p1-23

>漱石がいかに『ハムレット』を讀み、いかにそれを彼の作品に應用したかを調べるのが本稿の目的である。『ハムレット』に關する知識思想が、彼の搜創作に暗々裡の中に現はれることになる。漱石は『ハムレット』については研究論文はなく、僅かにアーデン・シェイクスピア全集の『ハムレット』に書き入れられた「書き込み」と「ハムレットの性格」なる「断片」があるのみである。然し、以上の二つの資料で、漱石が『ハムレット』をいかに讀んだかは大體見當をつけることが出来るように思ふ。これから「書き込み」の中の問題とし得る個所と、『ハムレットの性格』とを取り上げて少し検討して見る。

久野 真吉

◆漱石文庫のメレディスを見て

◇「英語青年」/100(8)/研究社出版/1954.08/p420-421

>漱石文庫のメレディスの「書き入れ」を調べ、漱石がいかにメレディスを讀んだかを考えて見たいと思つてゐた。漱石は「見返し」に短評覚え書を書く癖がある。インクの色は褪せうすれて漱石の蔵書の「書き入れ」を完全に調べるには急を要するように痛感された。漱石の蔵書には「書き入れ」以外に下線傍線が到る所にほどこされてゐる。そしてそれ等の部分は漱石の讀書法を探る鍵であるとも考えられる。又下線や傍線を引いたりした個所の行外の余白に短評を更に加えたところもある。印と×印とはその間に意味の差があるとは思われない。又下線と傍線との間にも差があるとも思われない。

久野 真吉

◆漱石と『マクベス』: 文學の超自然的要素について

◇「宮城学院女子大學研究論文集」/7/宮城学院女子大学/1955.06/p1-21

>漱石の所謂「狂氣」を説明し、「狂氣」が彼自身にどのように働いてきたかを検討したが、漱石が『マクベス』をいかに解釋したか、そしてその解釋が漱石の創作にどのように應用されたかを考へて見たい。漱石がいつ始めて『マクベス』を讀んだかは正確に知る由もないが、「書入れ」のある彼の蔵書『マクベス』は、マクミラン社の英國古典叢書中の一八九五年版である。一八九五年といへば明治二十八年だが、二十九年には漱石は第五高等學校でシェイクスピアの課外講義をしてゐる。但し、「書入れ」は明治三十六年九月二十九日にはじまる大學における購讀の時、準備のためになされたとするのが、妥當であらう。

久野 真吉

◆漱石書入れ本の撮影

◇「日本比較文学会会報」/4/日本比較文学会/1956.01/p1-2

>漱石のメレディスへの「書入れ」、下線、傍線等を調べて総合的に結果を出す必要があるため、東北大學圖書館にお願いして問題の頁を全部寫眞に撮つた。「書入れ」の種類を分類する目やすとなるものに、『ローダ・フレンジ』目次の下に書かれた規準“S style”, “M manner”, “Ph phrase”, “V view of life”がある。この讀書法は漱石の他のメレディス作品を讀んだ場合にも應用されている。調べて見ないとハッキリ分からぬが、この方式はメレディス以外の作品にも用いられていると想像できる。こうした讀書法は創作家が他人の作品を讀む讀書法であり、漱石が創作を始めたとき彼に大いに役立つたと思われる。

久野 真吉

◆Soseki Natsume and George Meredith : How Soseki has read Meredith

◇「比較文学」/4/日本比較文学会/1961.09/pxx-xxxii

> Fortunately those books Soseki read and collected are perfectly preserved as the Soseki Library at the Tohoku University Library in Sendai, Japan. My intention in this thesis is to examine Soseki's readings of George Meredith referring to the Soseki Library. In Soseki's novels, especially "Gubijinsō", we find not a few of the same characteristics as in Meredith's novels — the use of wit or humour, psychological description and philosophical point of view (or artistic point of view). For the study of these fields, Soseki's entries into Meredith are, I believe, most effectively available.

久保 忠夫

◆英文科学生時代

◇「英語青年」/112(7)/研究社出版/1966.07/p483

> 漱石は、明治23年9月、数え年24歳で東大英文科に入学、26年7月に卒業した。その研鑽の一大成果が「英国詩人の天地山川に対する観念」(明26.3-6「哲学雑誌」)である。本稿においては、この論文と参考文献の2,3のもの(いずれも論文中に名の見える)との関係を考えてみたい。(1)H. M. Posnett, Comparative Literature (1886) 漱石文庫に蔵されている。(2) Sir Leslie Stephen, History of English Thought in the Eighteenth Century (1876) 2巻本(漱石文庫にはない)。(3) Mrs. Oliphant, Literary History of England 1790-1825 (1886)「明治26年正月ウード先生年玉に下さる 夏目金之助」と筆で謹書してある。

久保 忠夫

◆漱石の中のパスカル

◇「東北学院大学論集. 一般教育」/78/東北学院大学文経法学会/1966.07/p119-116

> 『吾輩は猫である』の「四」に鈴木藤十郎君と苦沙弥先生とのい間にやりとりがある。いま、東北大学にある“漱石文庫”に保存されている、パスカルの著書は、The thoughts of Blaise Paise Pascal; tr. By C. Kegan Paul. London: G. Bell & Sons. 1905一冊だけである。一九〇五年は明治三十八年に当るから、在英中に手に入れたのではなく、帰国後もとめたものと思われる。この場合にはむしろ、これも“漱石文庫”にあるギュイヨールGuyau, M. (1854-1888)の『教育と遺伝』(英訳Education and Heredity)に主としてよったと考えるべきであろう。

熊坂 敦子

◆日記に見る漱石の一面：厭世主義

◇「國文學：解釈と教材の研究」/9(10)/学燈社/1964.08/p46-51

> 漱石の日記は明治三十九年九月八日より書きおこされた、大正五年七月二十七日まで書かれるが、その間断続が見られる。この日記の切れ目と、日記を書きおこす漱石の意識に、どのような断続があったのであろうか。書かれた日記の中で漱石が精神的真実の極点を究め尽くすのは、修善寺の大患においてである。大正年間の書簡や断片にはこぞって死への讃美と、生への暗い調べがこめられている。大患以後の日記について、これは今までの体裁から云うと、「断片」に書かれてあったことを日記の中にもち込んだことで、実際に「日記及断片」となり、両者の見境がつかなくなっている。

熊坂 敦子

◆漱石とベルグソン

◇「國文學：解釈と教材の研究」/16(12)/学燈社/1971.09/p143-150

> 「思ひ出す事など」においてベルグソンの著書の第一巻が“Time and Free Will”(時と自由意志)としてゾンネシャインから出版されたことを記している。夏目漱石文庫に収められているこの『時間と自由意志』を調べてみると、その他十六箇所の漱石のアンダーラインが発見された。『時間と自由意志』を読んだ時より二年経て、夏目漱石文庫を調べることによって、漱石は“Creative Evolution”(Macmillan and co, Limited St. Martin's street, London 1911)と“Laughter”(macmillan and co, Limited St. martin's street London)に短い力強いアンダーラインを施し、精読したあとが伺えたのである。

熊坂 敦子

◆三四郎：西洋絵画との関連で

◇「國文學：解釈と教材の研究」/28(14)/学燈社/1983.11/p90-97

> 漱石文庫には、漱石がロンドンで購入したと思われるミラーの「ウオーレンスクレクションの画」(Lond. Pearson. 1902)という解説書がある。この一頁ずつを占めて「無邪気」と「悲しみ」というグルーズの描いた女の画が、掲載されている。「無邪気」は、肩から半裸の胸がロココ調の衣裳をわずかにまとい、大きく見開かれた深いまなざしは、前方をながめながら愛らしさの蔭に、もの憂く媚びるように輝いている。しかも一匹の小羊を、横抱きにしてゐる。三四郎が美学の教師から見せて貰ったのは、漱石が解説書中でも眼にして印象的に映ったグルーズの代表作「無邪気」であったかもしれない。

剣持 武彦

◆『神曲』地獄篇と漱石文学

◇「比較文学」/14/日本比較文学会/1971.10/p1-9

> 夏目漱石の蔵書中に袖珍版のダンテ『神曲』三冊がある。これはThe Temple Classicsという叢書本で、「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」に分かれ、イタリア語の原文と英語の散文訳とを対訳にしてある。このなかで「地獄篇」Infernoは、漱石が特によく読んだらしく、『漾虚集』に収められているこの時代の漱石の脳裡には、英国史や英国文学との関連において、『神曲』地獄篇が去来していたようである。敢えて徴兵忌避をしてしまったという恐怖感と、罪悪感、そして文明批評意識による戦争という「悪」に対する深い厭悪感(「趣味の遺伝」や「草枕」の底流をなしていたことは既述したとおりである)。



剣持 武彦

◆夏目漱石『それから』とダヌンツィオ『死の勝利』

◇「イタリア学会誌」/20/イタリア学会/1971.12/p20-32

> 草平の『煤煙』に於ては朋子との恋の仲介が二冊のダヌンツィオの英訳本、The Triumph of DeathとThe Child of Pleasureによって行われている。漱石は『煤煙』の連載される直前の明治四十一年から、明治四十二年にかけて、ダヌンツィオの『死の勝利』を読んだであろうことが推定される。漱石の蔵書及び蔵書への書き込みを全集によって調べると、まず蔵書の方では、ダヌンツィオの本が四冊あり、すべて英訳本で、The Child of Pleasure, The Triumph of Death, The Flame of Life, The Daughter of Jorio、であり『死の勝利』と『快樂児』には読了後の書き込みが、前者は日本語で、後者には英文でなされている。

剣持 武彦

◆夏目漱石「こころ」と上田敏訳アンドレイエフ「心」

◇「道」/11(1)/世代群評社/1981.01/p85-97

> 上田敏訳アンドレイエフ「心」が刊行された明治四十二年六月より三ヶ月まえの同年三月七日から四月九日にかけて漱石は小宮豊隆とのドイツ語の勉強のテキストにドイツ語訳、アンドレーエフ「七刑人」を読んでいる。三月七日の日記に「Die Geschichte von den sieben Gehenkten」とある。上田敏の「心」については、小宮豊隆が漱石に話したに違いないし、木曜会の話になったであろうことも想像される。漱石に贈られた書物は一切、蔵書目録に記載されていないのでわからないが、上田敏が「心」を贈ったであろうことも当然考えられる。漱石と敏とはその著書を寄贈しあうという関係はあったと思う。

剣持 武彦

◆漱石文學と『ドン・キホーテ』

◇「二松學舎大學東洋學研究所集刊」/12/二松学舎大学東洋学研究所/1982.03/p65-80

> 漱石がセルバンテスの『ドン・キホーテ』を読んだのはロンドン留學中であつた。明治三十四年二月五日の日記に『ドン・キホーテ』を購入したことが記されている。現在、東北大學圖書館に蔵されている『ドン・キホーテ』は英譯本の各四冊で二種類あり、一七三三年に刊行されたものと、トビアス・スモーレット譯(一七五五)の一八一五年版である。一七三三年譯の方は多人數譯(Translated by Several Hands)でオゼルという人の校訂とあるが、漱石はこちらの方の四冊本にはほとんど手をつけずに、もっぱらスモーレットの英譯の方で讀んだらしい。多人數譯の方には全くアンダーラインもサイドラインも無い。

小泉 信三

◆理論家漱石

◇「思想」/162/岩波書店/1935.11/p629-638

> 夏目さんは、倫敦留學中その思考力を更に鍛へ、蒐集された豊富なる材料の上に縦横に之を働かして作つたノオトが「文學論」及び「文學評論」兩著述の基礎になつてゐるのであらう。それにしても自ら顧みて羨ましく思ふのは、留學中の夏目さんの勉強である。高價な書籍を買ふ爲め、又讀書の時間を惜しむ爲め、社交を避け、極端に衣食を節して下宿に立て籠つたことなどは、これは夏目さん一人の事ではない。たゞ夏目さんの如く、腑に落ちぬ西洋學者の言説に根本的に疑を介み、既定のコオスを履まず、自ら新たに問題を提起して、全く獨力で自家の文學論を打ち立てようと試みたといふやうな例は珍しい。

小玉 晃一

◆夏目漱石とアメリカ文學

◇「日本英學史研究会研究報告」/51/日本英學史研究会/1966.06/p1-5

> 「漱石山房蔵書目録」によると、文學関係書640点中アメリカ文學関係のものがわずかに26点ということは非常に少ないが、それでも主な作家のものは讀まれていたことがわかり、漱石が英文學ほどでは勿論ないにしても、アメリカ文學を無視してゐたのではないことを知ることができる。H・ジェームズのThe Golden Bowlまた、エマンソンのRepresentative menなど書き込みなどあるところを見ると、何冊かはかなり精讀してゐたようだ。作品中最も多く引用されている名前は、W・ジェームズで、ホイットマン、ポーという工合で、この二人の文學者については、それぞれ独立した文章を書いている。

小玉 晃一

◆スティーヴンソン

◇「英語青年」/112(7)/研究社出版/1966.07/p450-451

> 漱石が初めてスティーヴンソンを讀んだのは高等学校時代と推察され、本格的に英小説と意識して讀んだのは、ロンドン留學した翌年の明治34年の前半であつことが日記でわかる。『英文學形式論』ではスティーヴンソンの特徴の極端に現われているのはThe Master of Ballantrae だとして、彼の文体の特質を整理している。漱石が詳しくスティーヴンソンを讀んだことは、蔵書への書き込みによつても知られる。『漱石全集』第32巻にあるThe Dynamiter, Kidnapped, Catriona, The Black Arrow, The Master of Ballantrae, The Wrecker, Prince Otto などへの書き込みは、漱石の英文學理解を示すよい資料である。

小宮 豊隆

◆漱石三十三回忌

◇『漱石 寅彦 三重吉』/小宮豊隆著/岩波書店/1942.01/p144-151

> 先生の書齋と蔵書とをどうして保存するかといふ事が、談合される例になつてゐた。然し今年はその問題は出なかつた。私もそれを出さなかつた。その問題が當分解決される見込みがつかないのなら、せめて蔵書だけでも先にどうにかしたいといふ問題も起り得る。現在の家は、家番を置いて閉め切つてあるために、風通しが悪く、鼠が暴れ、本が痛んでしやうがないからである。然し是を今、例へば何所かの圖書館に寄附し、一纏めに漱石文庫として、人人が讀めるやうにしてもらふ事が出来るとしても、さうして蔵書を取り去つたら、先生の書齋は齒の抜けたやうなものになつてしまふだらう。

小宮 豊隆

◆漱石先生とドイツ語

◇「図書」/20/岩波書店/1951.05/p11-15

> 漱石先生にドイツ語を教へたことがある。当時私は東新君からアンドレイエフの短篇のドイツ語を紹介され、それにひどく感動してゐた時だつた。私が先生の爲の教科書として選んだのもアンドレイエフだつた。その時丁度丸善に『七刑人物語』が来てゐた。先生の日記を見ると、三月七日日曜日の項に「Die Geschichte von den sieben Gehenkten」とだけ書いてある。先生が亡くなつてから、先生の書棚の下の戸棚から、思ひも掛けず先生の大學時代の試験の答案が出て来た。調べて見ると、それには先生のドイツ語の答案もまじつてゐて。それが悉く九十點だの九十五點だのといふ優秀な評點がついてゐるので、ちよつと驚ろかされた。

小宮 豊隆

◆漱石文庫

◇『人のこと自分のこと』/小宮豊隆著/角川書店/1955.05/p18-22

> 漱石の蔵書がほんの僅かの篤志家だけに使用されるのでは勿體ない。寄附するとすれば、本郷の大學は漱石とも深い縁故があるし、第一東京なら恐らく利用率が一番高い。それで東京大學にその話をして見たが、しかし本郷の圖書館では、どの本もばらばらにほごしてそれぞれの部門に列べる方針なのだそうで、漱石の蔵書でも例へば漱石文庫なら漱石文庫として一纏めに別置するわけには行かないといふのである。いろいろ考へた末、丁度私が仙臺の大學の圖書館長をしてゐた關係上、漱石の蔵書を思ひ切つて仙臺へ寄贈してもらふことにした。

小宮 豊隆

◆未發表の漱石日記について

◇「世界」/116/岩波書店/1955.08/p225-227

> これまで『漱石全集』に採録されなかつた漱石の「日記」と「断片」とを、今度ここで發表することにした。今度發表するにつき、更に長田君を煩はして、東北大學の圖書館に行き、原本を借り出してもらひ、改めて原稿と校合した。漱石の蔵書、漱石の日記、ノート、その他漱石の書齋に置いてあつたすべての文書は、仙臺の大學圖書館に所蔵され保管されてゐるのである。当時私がなぜ發表しなかつたかといふと、最も大きな理由の一つは、そこに皇室に關する記事があつたからである。

小森 陽一

◆金之助と漱石

◇『夏目漱石をよむ』(岩波ブックレット ; No.325)/小森陽一著/岩波書店/1993.12/p11-29

> これまでの伝記研究の成果によれば、金之助がはじめて「漱石」という号を使用したのは、一八八九年五月二五日頃だとされている。親友正岡子規の、友人むけの自筆回覧文集『七艸集』(東北大學「漱石文庫」所蔵)の巻末余白に、九首の七言絶句の評を書いた後、金之助は「漱石」と書名した。その直前の五月九日に、子規は結核で咯血している。金之助は五月一三日に子規を見舞ひ、帰宅後慰めの手紙を書く。末尾には、「帰らふと泣かずに笑へ時鳥」「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」という俳句がそえられ、「金之助」という署名が付されている。本名と号の間に、青年時代の屈折した思いが浮かびあがってくる。

小森 陽一

◆ロンドンに立つ漱石

富山 太佳夫

◇「文學」/4(3)/岩波書店/1993.07/p103-117

> [小森] ロンドンでいわば英語の研修と英文学の勉強を始めた夏目金之助の英文学についての水準は、ある意味で言うと、本人自身が日記の中で軽蔑している同時代の女子供のレベルを大きく出していないということは大変よくわかつたのですが(笑)、[富山] 漱石の英語力からして、端的に言うと読める本はそんなに多くはない。哲学とか心理学の当時の最先端のすぐれた研究をフォローしているひまは絶対なかつたはずで。例えばハベロック・エリスが編集した「コンテンポラリー・サイエンス・シリーズ」というシリーズがありますが、四十数冊のうち、漱石は半分以上を持っている。その二十冊ほどのうち十冊近くは心理学の入門書です。

小山 貞夫

◆「『漱石文庫』マイクロ・フィルム版目録」刊行によせて

◇『漱石文庫マイクロフィルム目録』/東北大学附属図書館編/仙台市/1997.--/p2

> 「漱石文庫目録」が、特殊文庫目録シリーズの第一集として昭和46(1971)年10月1日に発行され、利用に供されてきたが、その後追加修正するべきことも多くなつてきた。中でも、これまで明らかにされていなかった蔵書中の約120枚の挿入紙片等を含む約1,600枚に及ぶ自筆資料が新たに目録化されたことは特筆すべきであろう。内外の研究者にとって大きな関心でもあり本学にとっては長年の課題でもあつた漱石文庫の自筆資料の整理は、このマイクロ・フィルム化事業を契機として、奇しくも一応の完成をみたといつてよいであろう。この目録が広く一般に活用され役立つことが唯一の望みである。

斎藤 恵子

◆夏目漱石のスイフト論について

◇「比較文学研究」/15/朝日出版社/1969.04/p55-92

> 漱石の蔵書には、スイフトの本が三冊ある。このうち二冊は詩集だが、漱石はスイフトの詩について全然論じていないし、読んだ形跡もない。詩と散文を両方含んだ作品選集には、何ヶ所にも漱石の書込があり、大部分は、岩波版全集に収録されている。その作品集は、The Works of Jonathan Swift. D.D. Ed. By D.L. Purves Edinburgh ; W.P. Nimmo, Hay & Mitchel 1897である。この本は、現在、東北大学附属図書館の漱石文庫に収められている。このパーヴィーズ編のスイフト集は東大附属図書館、本郷の書庫に、出版年次が一八七六年になっているが内容は漱石所有の一八九七年版と同じものがある。

相良 英明

◆夏目漱石とジョゼフ・コンラッド：『タイフーン』と『二百十日』

◇「詩と散文」/31/永田書房詩と散文の会/1976.12/p38-42

> 漱石はコンラッドの『ナーシサス号の黒人』(The Nigger of the 'Narcissus' 1897)や「闇の奥」('Heart of Darkness' 1899)、「青春」('Youth' 1898)、『タイフーン』(Typhoon 1902)等の作品をいくつか読んでおり、それについて彼自身、小論「コンラッドの描きたる自然に就いて」や「小説に用ふる天然」で触れている。ある一時期、ある一点において、この二作家は、かなりはっきりと軌跡を交えているように見える。『二百十日』(1906)がコンラッドの『タイフーン』(1902)の影響下に書かれたのではないか、という推測が可能に見えるのである。

相良 英明

◆漱石とコンラッド：作家としての二つの軌跡

◇「詩と散文」/32/永田書房詩と散文の会/1977.10/p45-55

> 漱石の蔵書『ナーシサス号の黒人』の見返しにある書きこみを見てみると、ここで漱石は、コンラッドの描いた自然とwillというものに注目しており、「willはitselfにおいて美なり」という書きこみは、若き日の漱石を髣髴とさせるものです。作家が作家論を書く場合、しばしばある面で鋭く核心をついているものですが、漱石のコンラッド評にもそれがいえましよう。その評者の作家としての資質が如実にあらわれてくるわけであります。とすると、漱石がコンラッドの小説を、自然情小説と捉え、そこにwillを見出したということは、実に興味深いことです。

相良 英明

◆夏目漱石とジョゼフ・コンラッド

◇「比較文学」/20/日本比較文学会/1977.12/p40-50

> 漱石にコンラッドの影響があったかどうかを、特に『二百十日』と『坑夫』をとりあげて検討し、更に、漱石とコンラッドを比較研究することの意味について考察してみたい。漱石はコンラッドの作品を読んでいた。それについては、「コンラッドの描きたる自然に就て」、あるいは「小説に用ふる天然」におけるコメントや、「断片」の記録や蔵書の書きこみ等によって証拠づけることができる。明治三十八年ごろから、翌年秋『二百十日』を書く前の夏ごろまでのノートに、漱石は、「闇の奥」や「颱風」等、幾篇かのコンラッド作品の読後感を記している。

佐古 純一郎

◆夏目漱石とキリスト教

◇「国文学解釈と鑑賞」/32(6)/至文堂/1967.05/p191-197

> 私も先年、東北大学の漱石文庫に入る機会を与えられ、高木氏が調べられた漱石愛用の聖書を見た。私はそれよりも、漱石の愛読書のひとつとしてトマス・ア・ケンピスの『イミタチオ・クリスティ』に対するゆたかな書きこみを重視する。そこにはじつに沢山の書きこみがなされていて、漱石がキリスト教の考えをどのように受けとっていたかが手にとるようにわかるのである。漱石が愛用したのは W. Scott の "Of the Imitation of Christ" であるが、「是從天明ノ意ナリ」とか、“So were Budha and Confrcius” というように、むしろ漱石自身の中にあつた東洋的な思想に翻訳して読みとつていることはれきぜんとしている。

佐々木 英昭

◆漱石と草平のアイロニー：「浪漫的アイロニー」と「俳味禪味」

◇「比較文学研究」/51/朝日出版社/1987.04/p52-71

> 「此洋語の意味がよく分らなかった」三四郎は浪漫的アイロニーを調べ、「獨逸のシュレーゲルが唱へ出した言葉で、何でも天才と云ふものは、目的も努力もなく、終日ぶらぶら付いて居なくつては駄目だと云ふ説だ」と知り「漸く安心」する…。彼が「此洋語」を仕入れた書物として、少くとも一つ立証可能なのはG・ブランデスのThe Romantic School in Germanyである(蔵書書き入れ、『文学論ノート』に拠る)。ブランデスがシュレーゲル派についていう“idleness”“purposelessness”に相当するわけだが、いうまでもなく、あくまでその論理的帰結の一つであるにすぎない。

佐々木 英昭

◆女という悪夢：漱石の読んだ女たち

◇「比較文学研究」/57/朝日出版社/1990.06/p128-143

> 『ツアラトウストラ』の余白に漱石は相当量の書き入れをしているのだが、そのうちにはニーチェが発した“innocence”の語にこだわって、本文の文脈とはほとんど無関係になされた、長い書き入れもある。漱石的「無邪氣」とは、「人口性(技巧)」の逆として考えられているものであって、その「技巧」を体現するもの第一として「女」があった。／今日ではほぼ完全に忘れ去られたドイツの作家、ズーダーマンに大漱石が与えた不釣合に高い評価は、人も知るところである。英訳The Undying Pastの見返しに書きつけられた絶讃は、見事にはずれたといつてよい。

佐々木 英昭

◆人間の普遍性について：小谷野敦の「部屋」と漱石的「自己本位」

◇「比較文学研究」/72/恒文社/1998.07/p97-113

> 『ノート』や蔵書の余白に頻出する自問の呟きが、「日本人ニワカルカ」(H.Blair, Lectures on Rhetoric and Belles Letters, 1824,ほかへの書き入れ)、「日本人ハ日本人トシテ此等ノ詩ヲ読マザルベカラズ」(W.B.Worsfold, The Principles of Criticism, 1897,への書き入れ)等々と、しばしば「余」ではなく「日本人」を主体としていることにも、その意識は歴然としている。ここではそれを敷衍すべく、『ノート』の漱石が普遍性を論じる場合に最もよく引き合いに出すイギリスの文芸批評家にして、詩人、W・G・コータプにご登場を願うことにする。



佐々木 満子

◆日本における Wordsworth (5) : 夏目漱石の場合

◇「學苑」/605/昭和女子大学近代文化研究所/1990.04/p1-11

>「英国詩人の天地山川に対する観念」についてはこれまでしばしば論じられて来た。筆者は東北大学附属図書館所蔵の旧蔵書「漱石文庫」の書き込みを手掛りに、上記の論文や『文学論』その他に見られる彼の Wordsworth 観を探ってみたいと思う。ところで漱石はこの論文を書くまでに Wordsworth のどんな詩を読んでいたのだろうか。まず「漱石文庫」の中から Wordsworth 関係の書物を拾ってみよう。ここではこの「英国詩人」が当時の大学生の論文としてはまことにすぐれたものであり、Wordsworth をはじめ「漱石の近代英詩観のいわば原点」として重要なものであることを述べておく。

佐々木 靖章

◆漱石蔵書の書き入れ

佐々木 浩

◇「文藝研究」/54/日本文芸研究会/1966.11/p50-60

針生 和子

>「漱石文庫」について、書き入れ本の調査を進めて来たが、『漱石全集』(岩波書店発行、決定版第十八巻・新書版第三十二巻)に採録されていない書き入れの多く含まれているものうち、M. NordauのDegenerationとG. BrandesのMain Currents in Nineteenth Century Literatureを取り上げ、施線の箇所を除く書き入れのすべてを紹介することにした。この両書は、近代ヨーロッパの文明や文芸思潮を理解するのに役立つもので、漱石も精読したことがうかがわれる。なお全集にはMain Currents in Nineteenth Century Literature第二巻への書き入れが採録されているが、同巻は現在「漱石文庫」に見当たらない。

佐藤 和代

◆漱石とジェイン・オースティン：自由間接話法をめぐって

◇「人文科学研究」/88/新潟大学人文学部/1995.07/p97-133

>東北大学附属図書館蔵の漱石文庫中のオースティンの作品は『分別と多感』『自負と偏見』『エマ』『マンスフィールド・パーク』の四冊であるが、その中で『自負と偏見』の傷みが著しい。これが漱石の愛読書の一つであったことは周知の事実であり、別に不思議ではない。ここで注目したいのは、綴じ糸の切れている部分がかつてに見てきた自由間接話法と非常に関係が深いという点である。内的独白から自由間接話法への移行段階ともいえる引用符つき自由間接話法はオースティン以外にはあまり用例もなく、オースティンと漱石の手法上の関連を強く示唆するものである。

佐藤 和代

◆夏目漱石とウィリアム・ジェームズ：「意識の流れ」から「視点」へ

◇「人文科学研究」/111/新潟大学人文学部/2003.03/p23-47

>ウィリアム・ジェームズ William James は『吾輩は猫である』に、ゼームス教授として登場して以来、漱石の作品に何度も現れ、断片や日記でもしばしば言及され、蔵書に書き込みや下線等も多い。また、思想面での影響や、「意識の流れ」という小説技法との関連で漱石のジェームズに対する関心・共感を探った研究も数多くある。本論では、ジェームズを読み直したと思われる頃(明治40-41年)に書かれた「断片」でジェームズに言及している三カ所と、『心理学原理』に残されたかすかな手がかり(第一、第二各巻一カ所ずつの頁隅の折り目と第二巻の紙片を挟んだ二カ所)をもとに、この時期の意識の問題に関する漱石の関心の在処を探る。

佐渡谷 重信

◆あとがき

◇『漱石と世紀末芸術』/佐渡谷重信著/美術公論社/1982.02/p351-352

>私が本書で追跡した問題は漱石とヨーロッパ世紀末芸術との相互交渉という問題である。本書を上梓するにあたり、私は漱石文庫の所蔵してある東北大学図書館に赴き、そこで漱石が所蔵した美術館関係書すべて、および「ステューディオ」を全部閲覧させていただき、漱石の書き込みを見落しなく拝見することができた。それは漱石の美術への関心の深浅を知るうえで比較的重要な仕事であった。その結果、漱石がロンドン留学中に文学と美術の相互交渉に強い関心を抱き、その結果として作品の中で西洋美術への言及を数多く行ったのである。

重松 泰雄

◆漱石晩年の思想(上)：ジェームズその他の学説を手がかりとして

◇「文學」/46(9)/岩波書店/1978.09/p1117-1128

>フェヒナー Gustav Theodor Fechner(1801-1887) については、ジェームズはわざわざ第四講全部を割いて、彼の思想の持つ独創的意義を力説する。このような『多元的宇宙』の一節が、「思ひ出す事など」十七章に見える、漱石のフェヒナー論の原拠であることは疑いを容れぬだろう。ちなみに、漱石旧蔵書中にはフェヒナーの著作は一冊も見当たらない。だがそれならば、なぜ自ら読みもせず、また、論証もきわめて粗雑でしかないフェヒナーの説を、漱石はわざわざ取り上げるのだろうか。この疑惑を解く鍵の一つは、やはり『多元的宇宙』第四講の一節にあると言って良い。

重松 泰雄

◆漱石晩年の思想(中)：ジェームズその他の学説を手がかりとして

◇「文學」/46(12)/岩波書店/1978.12/p1493-1504

>「心(こころ)」の先生の「過去」と「生命」と、さらには「記憶」にかかわる指摘は、たしかに頷かれるものが多い。しかもそれらが、ベルグソンとの関連において論じられるとき、その指摘はいつそう確でまた貴重である。彼が示唆を得たベルグソンの著書は、『物質と記憶』Matiere et memire (1896) には限らぬようである。漱石が触れている程度の記憶説についてだけなら、彼が確実に読んだベルグソンの他書からも、摂取できぬわけではないのである。現存の漱石手沢本中には、三書があり、いずれもアンダーライン(時には書き込み)が施されていて、漱石の閲読を裏づけるが、この中から「記憶」についての知識を得ることは不可能ではない。

- 重松 泰雄 ◆漱石晩年の思想(下): ジェームズその他の学説を手がかりとして  
 ◇「文學」/47(2)/岩波書店/1979.02/p78-90  
 >わたしは、最晩年の漱石思想をそれほど超論理的、超俗的な大悟徹底風の世界観と見ることができない。とくに老荘思想については、関係書が手沢本中に一冊も見当たらず、晩年の再読を裏づける証拠がない。その点、「神ではなくて生活が、より多くの生命、より大きい、より豊かな、より満足を与えてくれる生命が、結局は、宗教の目的なのだ」(漱石手沢本には、この部分全体にアンダー・ラインがある)と述べたリューバ (James Henri Leuba 1868-1946) の言にさえ同意を表明し、「有限の神」について説いた、ジェームズのプラグマティックな〈学説〉の方が、はるかに漱石の意に叶うものだったと思われるのである。
- 島田 謹二 ◆夏目漱石と英語英文学  
 ◇「英語研究」/42(4)/研究社出版/1953.04/p17-16  
 >一八八七年版ニュー・ヨーク出版のロルフ註「ジェーリアス・シーザー」に「読至此齣始知沙翁筆端有神矣」とか、「一句出意外妙也」借「カシアス」問使読者知「ブルタス」所以憤老手老手「ポーシア」一句妙不可言不覺俯頭低地」とか書きこませ、またそのころはやつたウォルター・スコットのラウトレッヂ版「ウェーヴァレー」に「叙田舎光景纖巧如目賭」と評しカッセル版のリットン卿「如読韓非説難」と比較し、一すべて当時の漱石の「英文学」のよみ方をそれとなく語っている。漢籍を読み、かつ評する独特の角度がここには「英文学」の上に轉置されているように感じても、むりではなからう。
- 清水 一嘉 ◆「Ruskin ノ遺墨ヲ見ル」: 漱石のロンドン日記から  
 ◇「學鏡」/94(3)/丸善/1997.03/p14-17  
 >漱石がピトロクリを訪れたのは明治三五(一九〇二)年秋のことで、なぜ漱石はピトロクリに行ったのかという点についてはいまもってわからない。その答えのヒントになるのがラスキンの絵だというのがわたしの考えである。漱石はラスキンの「キリクランキーの山道にて」をサウス・ロンドン・ギャラリーで見ているのである。そして「キリクランキー」をいう名前は漱石の脳裏に深く刻み込まれたのである。それを裏づけるような資料をわれわれは漱石の残した「断片」のなかに見出すことができる。そこには横に一行、「ホメル」「Contrast」「カイドリ」「父」などのことばとともに「キリクランキー」という文字が何の脈絡もなく置かれている。
- 清水 一嘉 ◆漱石とロンドンの古本屋: 承前  
 ◇「學鏡」/95(10)/丸善/1998.10/p32-35  
 >私はさきに、漱石がロンドン日記に記した古本屋の所在を確かめたことがある。具体的には「ロチェ書店」(ニュー・オックスフォード・ストリート)、「パンパス書店」(オックスフォード・ストリート)、エレファント・アンド・カースルの手押し車の古本屋などであるが、いまだ不明のものや推量の域を出ないものがあった。最近ロンドン在住の愛書家竹之内成坦氏からつぎのような本の存在を教えられた。The Book's Directory of Booksellers, Publishers, and Authors (London: Hodder and Stoughton, 1893)これはそれまで不明だったことを一挙に解決してくれる得がたい本であった。
- 清水 一嘉 ◆漱石とイギリスのことわざ  
 ◇「図書」/597/岩波書店/1999.01/p6-10  
 >漱石がイギリスのことわざに関心を持ったことは、ロンドン時代の日記(一九〇一年三月一〇日)を見ればわかる。Red sky at night Is the shepherd's delight. Red sky in the morning Is the shepherd's warning. Morning red and evening gray Send the traveller on his way. Morning gray and evening red Send the rain on his head. 前半の二連四行と後半の二連四行ではいっていることが矛盾しているのである。これはオリジナル日記からの転写ミスではないかと思ひ、東北大学図書館所蔵の日記帳(といってもただのポケット手帳だが)に当たってみたが、やはり漱石の間違いであることが判明した。漱石の間違いはそれだけではない。
- 清水 一嘉 ◆「小便所ニ入ル」: 漱石ロンドン日記の疑問  
 ◇「図書」/608/岩波書店/1999.12/p24-29  
 >漱石のロンドン日記を読んでいて、疑問点はいくつかあるが、私が最も疑問に思う個所のひとつが明治三四年五月十六日のつぎの記述である。小便所ニ入ル… 私はこの疑問を晴らすために、東北大学図書館所蔵の日記に当たってみることにした。もともと私はロンドン日記の原本をいちど見ておきたいと思っていたので、学会をいい機会に仙台まで足を運んだのである。当の日記を目の前にした私の最初の感想はといえば、エエッ、これが日記帳?というものだった。というのは、それはごく小さなポケット手帳であり、およそ日記帳というにはほど遠いものだったからである。
- 清水 茂 ◆漱石に於けるジェーン・オースティン: 「明暗」研究のための一覚書  
 ◇「比較文学年誌」/20/早稲田大学比較文学研究室/1984.03/p178-190  
 >漱石がジェーン・オースティンの文学と出会ったのはいつ、いかようになるのか。「漱石山房蔵書目録」中には、英文学関係のうち、一八九八、九年にMacmillan's Illustrated Standard NovelsとしていずれもロンドンのMacmillan & co.から刊行された『Pride and Prejudice』、『Sense and Sencibility』、『Emma』、『Mansfield Park』の四冊が記録されているが、このうちすくなくとも『良識と感受性』、『エマ』は明治三十四年一月中に通読しており、読了の日付は書き入れていない『高慢と偏見』も、おそらくほぼこの前後に通読したものと推察できるのではないかと思う。

清水 茂

◆漱石「明暗雙雙」と、そのベルグソン、ポアンカレへの関聯について：「明暗」第二回の位相の

◇「比較文学年誌」/26/早稲田大学比較文学研究室/1990.03/p66-89

＞漱石が読んだボグソン訳の英訳本『Time and Free Will』は、こんにち東北大学附属図書館に漱石旧蔵書として保管されている。筆者の調査によると、漱石書き入れは、岩波版『全集』の「短評並に雑感」の提出する二短文のほかに、漱石自身によると推定される同じ赤鉛筆で書き入れられたアンダーライン、赤丸じるし、及び赤はりがみが、かなり多くの箇所には施されているのが認められた。比較的長く漱石によってアンダーラインを施された数箇所を、うち三箇所はボグソン訳漱石蔵本の原文とあわせ、他は竹内芳郎訳本の該当部分のみを、引用しておく。

清水 孝純

◆「草枕」の問題：特に「ラオコーン」との関連において

◇「文学論輯」/21/九州大学教養部文学研究会/1974.03/p51-76

＞漱石は英訳「ラオコーン」の書き込みの中で、クライマックスを写すことは、造形美術は避けるべきだというレッシングの見解を再三問題にしている。漱石は、一面その見解に賛成しつつも、一面疑問を提出している。その当否はとにかく、それらの書き込みから見ても、現実の再現という問題について、漱石はレッシングの理論に刺激され、暗示を受けたことは容易に推察されるのである。「絵ニナルガ故ニ必ズシモ善詩ナラズ絵ニナラヌカラトテ悪詩ニモアラズ」とか記されていることからみても、レッシングの理論は絵になるかならないかという点での省察の一契機になりえたであろう。

寿岳 文章

◆漱石の英国的思考

◇「英語青年」/107(5)/研究社出版/1961.05/p246-247

＞明治38年から39年に書いた断片の中には、『天下に英国人程高慢なる国民なし。』とか『英国風ヲ鼓吹スル者アリ。氣ノ毒ナコトナリ。』とかの感想がある。広義の英文学との接触が最も緊密であった時期とみてよい。漱石は本音を吐いているのである。これらの本音から、漱石における英国的思考が引き出されてくるように思う。漱石がArnoldのCulture and Anarchyを読んだのはいつだか知らぬが、Literature and Dogmaは明治22年の歳末に読んでいる。“To enliven morality with wit, and temper wit with morality”を特色とする初期の漱石文学にも、AddisonやSteele以上に、19世紀の反骨英文学の性格のあることを、見のがしてはなるまい。

杉山 和雄

◆ウィリアム・ジェームズの漱石への影響

◇「比較文学」/3/日本比較文学学会/1960.09/p65-73

＞現在残っている漱石の蔵書の中、ウィリアムのもは「心理学原理」、「宗教的経験の諸相」それに「多元的宇宙」である。前二者について漱石が「文学論において、それぞれ六三頁、三九六頁に言及している所を見れば、彼が熱心にそれらを読んだことが分る。「日記及断片」の明治四十年頃の部に、数頁の英文がある。そしてそれは彼が同じ年東京美術学校で行った「文芸の哲学的基礎」という講演と内容的に一致している。漱石が使用したと思われるジェームズの'Principles of Psychology' N. Y. Holt, 1890からこの講演中の部分と内容的に類似していると思われるものを抜き出して、両者を比較対照してみよう。

杉山 和雄

◆漱石に及ぼした英文学の本質

◇「主流」/25/同志社大学英文学会/1964.01/p148-158

＞漱石が「余が一家の読書法」で語ったAristotleもArnoldも、W. Jamesとともに彼の「文芸の哲学的基礎」の根拠となった人々であると私は信ずる。まずアリストテレスから述べることにしよう。漱石の蔵書の中でAristotleの書は、The Ethics of Aristotle, (The Nicomachean Ethics) Trans. By D. P. Chase, newly revised; ed. With Introductory Essay by G. H. Leaves, London: W. Scott. (Scott Library)の一冊だけである。博学の漱石のことであるから、かれはこの哲人の他の書も読んでいたに違いないが、ここでArnoldと比較しているのは確かにこの本によったもののように思われる。

杉山 和雄

◆William Jamesの心理学と漱石文学

◇「現代英語教育」/7(11)/研究社出版/1971.02/p48-49

＞Jamesは、当時、ハーヴァード大学教授で、ちょうど漱石のロンドン留学中の1901年から1902年にわたって渡英し、エディンバラ大学で「宗教経験の諸相」という題で講演をして、好評を博していた。その講演は、当時、学会の寵児であった心理学を扱ったものであったから、心理学を研究していた漱石が、これに関心をもったことは当然であった。この講演は、単行本として1902年ロンドンで出版された。漱石が、その前年同所で発行された教授の『心理学原理』とともに、さっそく購入して熱心に読んだことは、現在残っているこれらの書物の中の彼の書き込みから推量できる。

杉山 和雄

◆「則天去私」についての私見

◇「比較文学」/15/日本比較文学学会/1972.10/p54-62

＞漱石は、修善寺の大患を境として、ウィリアム・ジェームズの人生観からベルグソンの人生観へ徐々に移っていったのである。ジェームズの推奨している英訳書を早速註文して読んだらしく、彼の蔵書の'Time and Free Will'の中に書き込みしているのを見てもベルグソンへの共鳴の程度がわかる。彼の蔵書の中にベルグソンのものとしては、外に英訳書'Creative Evolution'と'Laughter'の二冊がある。けれども後者は後年出版されたものであるからこの場合影響はない。ベルグソンがこれら二書の中で漱石に大きな影響を与えたと思われる部分を要約してみよう。



鈴木 善三

◆漱石のポーブ論

◇「文藝研究」/65/日本文芸研究会/1970.10/p34-43

>『文学評論』の第五編「アレキサンダー、ポーブと所謂人工派の詩」を取り上げ若干の考察を試みたいと思う。私は漱石のポーブ論を先ず今日のポーブ研究の実情に照らして考え、次に漱石がポーブ論を執筆するにあたって参照したと思われる文献を「漱石文庫」によって確かめ、最後にその批判的鑑賞の特徴にも及びたいと思う。ここでは「漱石文庫」に収められている中で『文学評論』以前に出版されている本を中心として、その書き込みなどを手掛りとして論を進めていきたい。「漱石文庫」の中で、十八世紀英文学を論じた本は数多くある。主にアンダーラインや書き込みによって漱石が実際に読んだと思われるものに限っていることを断っておきたい。

鈴木 善三

◆漱石のポーブ像

◇「比較文学」/21/日本比較文学会/1978.12/p11-21

>漱石がアディソンとポーブの伝記を明治三十四年一月二日購入のアーサー・マーフィー (Arthur Murphy) 編の『サムエル・ジョンソン著作集』(The Works of Samuel Johnson) で読んでいることがわかる。同年一月二日の日記に「JohnsonのBritish Poets 75 vols.及びRestoration Drama 14 vols.等ヲ買フTottenham Court Road Rocheニテ」と記している。東北大学漱石文庫所蔵のマーフィー編の『サムエル・ジョンソン著作集』の見返しに「Jan. 2, 1901」と書かれているところから、漱石がこの本をジョンソンの『英国詩人選集』と一緒に買ったことは確かである。

鈴木 保昭

◆夏目漱石とホイットマン

◇「専修商学論集」/14/専修大学学会/1973.03/p99-130

>「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』Walt Whitmanの詩について」と題する論文の末尾のところで、この一文から、漱石がいかにかにホイットマンの詩を心から熟望し、熟読したい欲求に駆られていたかが窺えるのである。「漱石山房蔵書目録」の中のWhitmanの項の中に、The Poems of Walt Whitman (selected) With an Introduction by E. Rhys. London: W. Scott 1886 (Canterbury Poets)と記されていることから、漱石は、「ホイットマン論」の中で引用していないが、このE. Rhys.編集の「ホイットマン詩集」を読んだことは明らかである。

関谷 由美子

◆『倫敦塔』: ジェーン・グレイの目

◇「国文学解釈と鑑賞」/66(3)/至文堂/2001.03/p54-62

>『倫敦塔』の文学史的受容の方向性を考える場合、ゴシック・ロマンスの流れからはややそれるが、ゴーテの『ボンベイ夜話』は、形式・内容共に逸し難い。蔵書「Little French Masterpiece 1903」の見返しに、「現代日本の小説家は概して短篇作家なり 去れども未だ一人も此著者の如き程度に達せるものなし」。また「Arria Marcella」(『ボンベイ夜話』の原題)の末尾余白に感嘆している。漱石がこれをいつ読んだかは特定し難いのだが、『吾輩は猫である(一)』『倫敦塔』『カーライル博物館』と、たて続けに創作の興がのっていたこの時期のものと考えられる根拠がある。

瀬藤 芳房

◆漱石と Conrad: 「普遍的血縁」の感覚 (3)

◇「徳島大学教養部紀要. 人文・社会科学」/13/徳島大学教養部/1978.03/p1-36

>漱石はConradの作品をいくつ読んでいるであろうか。それは『断片』に読後感想の記されているTyphoon, Tomorrow, Youth, Heart of Darkness, The End of the Tetherと、他に書物自身に感想の書き込みのあるThe Nigger of the “Narcissus”の6つの作品であるが、更に読んだかも知れないが、それを証明する読後感想も書物への書き込みもない、現在The Nigger of the “Narcissus”とともに東北大学漱石文庫に保存せられているがThe Mirror of the Seaがある。ここでは『坑夫』との関係上、以上7つの作品のうちHeart of Darknessのみについて論ずることにしよう。

瀬藤 芳房

◆漱石と Conrad: 「普遍的血縁」の感覚 (5)

◇「徳島大学教養部紀要. 人文・社会科学」/15/徳島大学教養部/1980.03/p119-196

>漱石所有のThe Nigger of the the “Narcissus”はHeinemannは1898年新版 (new impression) のものであるが、書物の見返しに、THE MARUZEN KABUSHIKI KAISHA/(Z.P.Maruya & Co. Ltd)/BOOKSELLERS & ATATIONERS/TOKYO & OSAKAというシールが貼られていることから、漱石が帰国 (1903年1月)後に購入されていることになる。漱石は『二百十日』、『野分』以前にThe Nigger of the the “Narcissus”を読んでいることになる。このような詮索をしなければならないのは、影響が問題になる場合、いかなる版本を、いかなる時期に、いかに読んでいるかが、決定的な要素になるからである。

瀬藤 芳房

◆「偉大なる暗闇」の系譜: 漱石とコンラッドの共鳴

◇「比較文学」/32/日本比較文学会/1990.03/p7-19

>漱石が『闇の奥』を読んだ時期は、明治三十九年三月頃から七月十七日の間であった。コンラッドは、漱石が作家へと転換する内的葛藤の最も激しい時期に集中的に読まれている。「断片」に感想文のある五作品の外、『ナーシッサス号の黒奴』(The Nigger of the “Narcissus”一八九七年。漱石所有のものは一八九八年版で、東北大学漱石文庫にある)には漱石の書き入れがあり、更に一冊書き入れがない『海の鏡』(The Mirror of the Sea一九〇六年。漱石所有のものは一九〇七年版で、東北大学漱石文庫にある)がある。従って書き入れのない後者を除いて少くとも六作品が読まれていることになる。

- 高木 武之助 ◆漱石文庫とその環境：東北帝大図書館の一隅から  
 ◇「東北文学」/1(12)/河北新報社/1947.12/p22-26  
 >片平丁の通りから東北帝國大學の正門を入つて、通路の右側、法文學部の第一研究室と並んだ二階建コンクリート建物、図書館本屋と並んだ、鉄筋コンクリート五階建の書庫には、総数約三十五萬四千冊に及ぶ和洋書が收藏され、特殊文庫の二、三が食み出している状態である。日記や断簡を含む大小十四冊の手帳類と五十九枚の紙片は、近代日本文学史上燦然たる光芒を放つてゐる文豪漱石の貴重な肉筆原稿として、國寶として指定された「孝文本記第十」と「類聚國史卷二十五」に次いで、東北帝大付属図書館の誇る秘藏書(別置本)の一つとなつてゐるのである。
- 高木 武之助 ◆漱石文庫のこと  
 ◇「東北地区大学図書館協議會誌」/7/東北地区大学図書館協議會/1958.09/p1-2  
 >和漢書では画帖や拓本類が圧倒的に多く、此処で気の付くことは俳句俳文を除き、国文学の本が極めて少いことで、和歌国文共13点に過ぎません。漱石の文学が、当時極めてユニークなもので、日本文学の伝統といったものが殆ど認められないことを考えると、成程とうなずかれるものがあるように思います。これに反し俳句俳文の本が多いのは、漱石の文学の随所にあらわれて来る軽妙しゃ脱な警句や皮肉に通じるものがあります。漱石文庫にあらわれている集書傾向は、そのまま漱石文学のしゆく図を見るような思いがされるのであります。
- 高木 文雄 ◆漱石と聖書：復活への希求をめぐって  
 ◇「国文学解釈と鑑賞」/33(13)/至文堂/1968.11/p25-30  
 >現存する漱石所蔵の聖書は、一九〇〇年十月十日にプロイセン号上で、ノット夫人から与えられたものである。この聖書の小口の下半分には手垢が着き膨れが見られる。漱石が屢々開いた事は確かである。「漱石山房蔵書目録」によれば漱石は一九〇四年刊の(詰り「教師をしている時分」の)『旧新約聖書』(和文元訳聖書)を持っていた。この実物は失われてしまつてゐるので、何処に線を引き、どんな書込みをしたかが分からないが、英文学購読上の参考書とは言えない蔵書である。漱石の言葉上での否定があるにも拘らず、断片的な相当数の聖書の文句が摂取されていた事は確かである。
- 高木 文雄 ◆漱石・老舎・倫敦(一)  
 ◇「金城学院大学論集 国文学編」/33/金城学院大学/1991.03/p31-52  
 >ノット夫人が漱石に贈つた聖書は現在東北大學図書館漱石文庫に所蔵されてゐる。革表紙の、小口に金箔のついたA五判ぐらゐの大きさの聖書である。ノット夫人が自分で現在使つてゐる聖書を贈つたと考へるのは抵抗がある。誰かに贈る用意に重い聖書を旅行中持つて歩いたとも考へ難い。汽船の賣店で賣つてみたのであらうか。この聖書には何度も讀んだ痕跡が歴然と残つてゐる。小口の下半分は上半分の倍近く膨れてゐる。そこには指の觸れた蹟で黒ずんでゐる。歸國後『文學論』中の例文を捜した時なのかも知れない。しかし、手澤の度が甚だしい。職業上の必要だけからではなく、個人的な拘泥から繙いた證據と見て誤りあるまい。
- 高桑 法子 ◆二つの夜：クリンガーと漱石  
 ◇「漱石研究」/8/翰林書房/1997.05/p31-40  
 >漱石がロンドン滞在時から美術雑誌“The Studio”を購読していたことは東北大学附属図書館の蔵書によってよく知られてゐる。現在見ることで出来る漱石の収集は一九〇一年二巻から始まつているが、一九〇九年までを調査したかぎりではクリンガーの『死について、第一部』を掲載している号は見あたらなかった。しかしながら、“The Studio”は創刊号(一八九三年)でオーブリー・ピアズレーの特集を組み、第五巻(一八九六年?)でマックス・クリンガーの版画をとりあげている。さらに、一九〇二年に夏季特集号として“Modern Etching and Engraving”を出版しており、漱石はこの特集号を所蔵していた。
- 高橋 勤 ◆罪の三角関係：漱石『ころ』とホーソン「ロジャー・メルヴィンの埋葬」  
 ◇「英語英文学論叢」/43/九州大学英语英文学研究会/1993.02/p89-100  
 >漱石山房蔵書目録にはホーソンの『七破風の家』(The House of the Seven Gables)が含まれており、『それから』を含めて、『漱石全集』には五ヶ所ホーソンへの言及が見られる。その中には「ホーソン流の不可思議」という言葉も見られ、漱石がホーソンの作品を読み、その神秘的で象徴的な作風に興味を抱いていたことが窺える。この小論では、主人公の罪の意識とその人間関係のなかにパラレルを見出し、東西文学に見られる罪という普遍的なテーマを考察する。さらに、『ころ』において先生と妻静の関係、そして静の役割について、ホーソンの作品との比較を通して、新たな角度から考察したい。
- 高橋 美智子 ◆夏目漱石の『文学論』におけるリボーの『感情の心理学』  
 ◇「文藝研究」/54/日本文芸研究会/1966.11/p42-49  
 >リボーは、フランス現代心理学の祖といわれる学者で、『感情の心理学』La psychologie des sentiments, 1896・『感情の論理学』La logique des sentiments, 1905などの著書を出した。漱石が『文学論』に引用したのは『感情の心理学』で、これには The psychology of Emotions, 1897 と題された英訳があり、漱石はこの英訳本によつたものと思われる。ただし『漱石全集』所載の「漱石山房蔵書目録」に見えず、漱石文庫(東北大学附属図書館)にも現存しない。リボーの他の著書で Essay on the Creative Imagination, 1906 というのが残っており、『文学論』の原稿の完成前に出たものであるけれども、『文学論』中にはこれに言及した箇所はない。

高橋 美智子

◆漱石文庫所蔵 Tolstoy: What is Art? にみられる漱石の書き入れについて

◇「比較文学」/15/日本比較文学会/1972.10/p25-40

> 東北大学図書館の漱石文庫に、漱石が書き入れをしたトルストイの『芸術とは何か』の英訳本が収められている。漱石はこれを明治三十四年英国留学中に手に入れたらしく、見返しに“K. Natsume Jan. 2. 1901”と記されている。トルストイの近代芸術に対する批判は、その背後にそれらを生んだヨーロッパ社会への批判を基盤とすると思われる。人々は当代の生活は複雑だと考えているが、実はそれはごく詰らない三つの心得“the feeling of pride, the feeling of sexual desire, and the feeling of weariness of life”に帰着する、と述べている。これに漱石は“quite so!”と書く。

高宮 利行

◆漱石と三人の中世英文学者

◇「慶應義塾大学言語文化研究所紀要」/14/慶應義塾大学言語文化研究所/1982.12/p163-177

> 留学した二年間に、漱石が求めて逢いに出かけた数少ない英国人について、J. W. HalesとF. J. Furnivallの人物像を紹介し、併せてW. P. Kerについても再考するのが、本稿の目的である。漱石山房蔵書目録の中にみえるkerの著作は、よく知られた二点である。この他に目録中にあるEnglish Prose Selections, ed. By Sir Henry Craik, 5vols., London, 1893-96はkerとの関連で無視できない。漱石文庫の中には、Bohn's Standard Libraryに収められた普及版の編者Prichardによる序文では、HalesとFurnivallの仕事が高く評価されている。Halesの編著書としては、数点が山房蔵書中にみられる。

高宮 利行

◆ユニヴァーシティ学寮の講義と漱石

◇「英語青年」/129(5)/研究社出版/1983.08/p224-226

> 漱石が短期間ながら講筵に列した、W. P. Ker 教授の講義表を入手できないものか尋ねてみた。ケンブリッジ大学図書館に勤める書誌学者 David Mckitterick 氏が、University College, London: Calendar, Session MDCCC-MDCCCCI (1900) の該当部分について、コピーを送付してくれたのである。。漱石山房蔵書目録を調べてみると、講義要項に挙げられた諸作品のうち、Shelley, Chaucer, Lamb, More, Marlowe, Shakespeare, Browning の作品については、漱石は所有している。ところが、古英語・中英語のテキスト、文法書、あるいはゴート語の文法書などは、蔵書の中に見当たらない。

高宮 利行

◆「水の女」としての美禰子：『三四郎』におけるマーメイドを中心に

◇「國文學：解釈と教材の研究」/42(6)/学燈社/1997.05/p34-40

> 『三四郎』の第四章で、三四郎が縁側に腰掛けていると、「池の女」美禰子と印象的な出会いをもつ。ここに描写された絵が、イギリスの画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウスの油彩『マーメイド』ではないかと、初めて指摘したのは芳賀徹氏である。『ア・マーメイド』が完成したのは一九〇〇年、ようやく翌年の六月に始まる王立美術院の夏季展覧会に間に合った。漱石がロンドン留学中に各種の美術館を訪れた事実と、一九〇二年の王立美術院第一三四回夏季展覧会の目録が漱石文庫にあることから、出掛けた可能性なしとしない。

多久和 新爾

◆小説と悪：ホーソン、ヘンリィ・ジェイムズ、漱石の小説における共通性

◇「英文学論叢」/10/九州大学英語英文学研究会/1960.03/p57-62

> 漱石がジェイムズのある作品を読み、且つその数冊を所有していたことは、少くとも漱石がジェイムズをどのように評価していたかを示している。まず、1904年に初版が出た、ジェイムズの小説、「黄金の鉢」The Golden Bowl (London: Methuen & Co. 1905. “Colonial Library”)の余白に残された書き入れは、かの長々しい心理描写の文体を、漱石は嫌ったのであろう。もう一つの書き入れは、ジェイムズの「ゾラ」論Notes on Novelists (London: J. M. Dent & Sons. 1914)に対してである。これは、前者と違って、真向からの賛成の言葉が手短かに記入されている。

武田 勝彦

◆漱石と Pater

◇「白山英文学」/10/東洋大学英米文学会/1964.04/p39-49

> 資料的な正確さから漱石とPaterの接点を求めてみると、大体明治34年(1901年)以降明治36年(1903年)までにPaterのThe Renaissance and Appreciationsを読んだのではないかと思われる。なぜならば、「漱石山房蔵書目録」の中の“A Catalogue of Foreign Books”によれば、漱石の所蔵していたPaterの2巻の書はいずれも1901年版である。36年1月の下旬に帰朝し、4月に東京帝国大学英文学科の講義を開始するに至るとPaterが何回かその講義の中に顔を見せるようになる。本稿ではその断面図を描き、その中から、漱石の英文学観を形成する一資料をまとめ上げてみたい。

武田 勝彦

◆漱石の東京：「門」を中心に

◇「教養諸学研究」/91/早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会/1992.01/p67-94

> 宗助は当時の小川町に歩みを移す。つづいて、洋傘屋、西洋小間物店、呉服店、半襟屋を見て歩く。洋傘屋は十四番地の野邊辰五郎の天満屋であろう。小間物店は老舗の十二番地の美好堂で、この頃店主は細井ギンから細井富五郎に移っていた。明治四十二年の一月頃から六、七月頃までの「断片」には、「門」の背景や登場人物が書き付けられている。○洋傘屋の看板。ポスト、烟草屋の暖簾、勉強堂の看板。小包郵便車。電柱。風船玉。あか暖簾。半襟 また「断片」の他の個所で「甲州の反物屋」と書き込んでいるのも、坂井家と出逢った行人を思わせる。



武田 勝彦

◆漱石ロンドン生活の基底(五)

◇「比較文学年誌」/35/早稲田大学比較文学研究室/1999.03/p56-78

> エッジヒル夫人が漱石に福音書を読む契機を与えたことは重視すべきだ。二回目のエッジヒル家訪問に先立ち、文学、語学プロパーの学者にしては専門的なウィリアム・スミス卿(Sir William Smith)のA Dictionary of the Bible, comprising its antiquities, biography, geography and natural history. 3vol. London, 1860-63に基いて刊行された同名の一八九六年一挙三巻刊行を購入していることを指摘しておきたい。なお、オリジナル三巻本と漱石所持の三巻本では内容の相違はないが、後者のタイトル・ページと序文の組版が新しくなっている。

田中 英道

◆漱石、鴉外、天心とイタリア美術

◇「日本文化」/6/拓殖大学日本文化研究所/2001.10/p69-77

> 漱石は『夢十夜』(一九〇八年)で、『運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでる』のを見に行くところがある。この木に埋まっている眉や鼻という話は、漱石がサイモンズの『イタリア・ルネサンスの美術』(A. J. Symonds, The Renaissance, The fine arts, London, 1887)のミケランジェロの話を読んでヒントをえたものであろう。東北大学の漱石文庫の中に、英語のこの本が見出される。そこに彫刻とは「取りのぞくことによって造られる」ことが、ミケランジェロの言葉で語られている。サイモンズはヴァザリーの『ミケランジェロ伝』を典拠にしていたと考えられる。

田中 裕

◆漱石とヘッセ

◇「Dissonanz」/3/ディソナンツ会/1976.12/p46-62

> 漱石とヘッセ、この何等の関係もなさそうに思われる二人は、実は同時代人である。漱石山房蔵書目録によれば、漱石は雑誌「新展望」(Neue Rundschau)の一九一一年一月号から一九一四年十月号迄の四十六号を所蔵しているが、この雑誌の発行元フイッシャーはヘッセの「ペーター・カーメントイト」以来のなじみの出版社であり、当時ヘッセはこの雑誌に主要な作品を発表してはいなかったが、それに又漱石がこの雑誌すべてに目を通したこともまず考えられないが、あるいは広告等でヘッセの名前位には接していたかも知れないと推測される。

田鍋 幸信

◆ステューヴンソン

◇『欧米作家と日本近代文学. 1 英米篇 1』(比較文学シリーズ)/福田光治, 剣持武彦, 小玉晃一編/教育出版センター/1974.12/p227-250

> 漱石の小説の中でステューヴンソンの名前が出て来るのは『吾輩は猫である』と『彼岸過迄』である。『新亜刺比亜物語』は明治四十三年(一九一〇)、若月紫蘭、帆引徹巖によって、一冊の書物として始めて訳出されるが、もちろん漱石は原文で読んだもので、蔵書目録にも一九〇一年のものが、ステューヴンソンの他の作品十二冊とともに出ている。ステューヴンソンのものが「奇で面白い」とは「独歩氏の作に低徊趣味あり」でも指摘しており、漱石のステューヴンソン観の一面を示したものと言える。『彼岸過迄』において構成をステューヴンソン『新亜刺比亜物語』に学んだとの説を検討してみよう。

谷本 泰子

◆H. ジェイムズと夏目漱石：二作家の異質性

◇「英語青年」/121(9)/研究社出版/1975.12/p392-393

> 漱石の蔵書には H. ジェイムズの作品は少なく、小説は The Golden Bowl 一冊だけである。その他 French Poets and Novelists (1878)、Partial Portraits (1888)、Notes on Novelists (1914) の三冊があり、彼がジェイムズの作家論には関心を持たざるを得なかったことを示しているが、三冊の作家論は、当時の日本でも良く知られ、比較的入手し易かったものと想像される。The Golden Bowl に挑戦した漱石は、最後まで読み通したようだが、途中でその複雑さに驚き、あるいはいささか辟易したらしく、批判的な意見を漏らしている。漱石は、H. ジェイムズという小説家とは体質的に相容れないと感じたのではないだろうか？

谷本 泰子

◆H. ジェイムズと夏目漱石：二作家の異質性・再説

◇「英語青年」/122(10)/研究社出版/1977.01/p486-488

> 明治38-39年にかけての「断片」の該当箇所を紹介し、漱石の H. ジェイムズ評を窺ってみよう。毒舌家の漱石にしても、このような口調で英国人を批評している文章は他にあまり例がない。よほど虫の居どころが悪かったか、コンプレックスの裏がえしか、それとも彼自身の神経衰弱の兆候を示すのか、日頃親しんできた英文学者一般を指して「阿片に耽溺せる病人」と言っているのである。その典型的な例として H. ジェイムズの “minute analysis” をあげているのである。この記述は The Golden Bowl を読んだ時期とほぼ一致している。手帳に書きつけた「断片」の中に漱石の本心が正直に吐露されている。

塚本 利明

◆「文芸の哲学的基礎」の背景：「壮」の理想と「技巧」とを中心に

◇「専修人文論集」/14/専修大学学会/1974.12/p45-68

> ブレア Hugh Blair (1718-1800) の『修辞学講義』Lectures on Rhetoric and Belles Lettres (1783) はエディンバラ大学の初学年生を対象にした講義をまとめたもので、内容は包括的であるが初歩的であり、体系にも欠けている。漱石の蔵書には一八二四年版のものがあり、それには相当の書込みがあるばかりか「英文学形式論」にもブレアが引用されている。その中では「崇高」をかなり重視し、さらに崇高の一変種として「ヒロイズム」をあげているのだ。漱石の蔵書目録には、ロバーツ訳の崇高論 W. Rhys Roberts, Longinus on the Sublime (1899) がみられる。これは当時最新の版であり、また注解等の点で最も信頼し得るとされていたものである。

塚本 利明

◆ギニキアの「夢」について

◇「専修大学人文科学研究所月報」/57/専修大学人文科学研究所/1977.12/p9-18

> 漱石は、ギニキアがみた夢の中心にある蛇のイメージをなんらかの作品によって示唆されなかつただろうか。漱石がテニソンを読んでいいたとき、蛇のイメージにかなりの関心をもっていたことにまず注目するべきであろう。この場面からも多少の示唆を受けたと思われる。しかし、「蛇」のイメージを心に抱いたとき、連想の糸につながって出現するべき作品はなんであろうか。それはキーツ John Keats (1795-1821) の傑作『レイミア』*Lamia* (1819) でなければならぬであろう。漱石所蔵にかゝるキーツの詩集 *The Poetical Works of John Keats* (1899) の見返しに貼付された紙片には、この詩集に収録された作品の評価とおぼしき記号が記されている。

塚本 利明

◆「倫敦塔」の背景

◇「比較文学」/20/日本比較文学会/1977.12/p14-17

> 「倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であって、ボーシヤン塔の歴史は悲酸の歴史である」という。描くにさいして重要な材源になったのは、漱石山房蔵書目録に残っているところの、W. R. Dick 著 *A Short Sketch of the Beauchamp Tower— And also a Guide to the Inscriptions & Devices Left on the Walls thereof* である。表紙下部には“Sold by the Warders at the Tower—Price Sixpence”とある。漱石はこれをロンドン塔内で六ペンスで買ったのである。この冊子は“Preface”二頁、“Introduction”四頁および本文四十八頁からなる。漱石とこの小冊子とが明らかな対応を示すものを列挙してみよう。

塚本 利明

◆漱石のホイットマン論について

◇「専修大学人文科学研究所月報」/68/専修大学人文科学研究所/1979.09/p1-16

> 漱石がはじめて執筆した英米文学関係の論文「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』*Walt Whitman* の詩について」(明治二十五年) は、わが国における最も早いホイットマン紹介のひとつである。論文の最後の部分で、漱石は「幸に『ダウデン』の論文を覧ることを得て稿を草するの際裨益を受けたこと多し」と述べる。漱石が用いたテキストは、現在蔵書目録にあるアーネスト・リース Ernest Rhys (1859-1946) 編『ホイットマン詩集』*The Poems of Walt Whitman* (1886) であって、漱石はリースの「序文」をも参照したことが知られている。それらを参照しつつ、筆者なりの考察を進めたい。

塚本 利明

◆漱石とドラローシュ

◇「専修大学人文科学研究所月報」/81/専修大学人文科学研究所/1982.02/p1-20

> 「倫敦塔」のあとがきに、「二王子幽閉の場と、ジエーン所刑の場に就ては有名なるドラロツシの絵画が尠からず余の想像を助けて居る事を一言して聊か感謝の意を表する」という一節がある。私がこの問題を追究するには、二つの方法しかないように思われた。一般の美術史に手掛かりを見出せない以上、第二の方法に移って、漱石が読んだ—あるいは見た—ものの中になんらかの鍵を求めなければならない。漱石文庫の分類では、美術関係の書物は「5 美術」の項目に整理されており、これはナショナル・ギャラリーのカタログ類を含む三十七冊が載せられている。これらの書物を調査することは、楽しい仕事であった。

塚本 利明

◆ロンドンの地下鉄：漱石のロンドン塔訪問に触れつつ

◇「専修英米研究」/2/専修大学英語英米文学会/1984.03/p101-131

> 不案内な土地を歩くとき、まず頼りにするのは地図と案内書以外にはあるまい。漱石が、当時最も信頼されていた案内書—つまり *Baedeker's and its Environs* (1898)—を所有していたことは、すでに述べた。ところが、東北大学図書館所蔵のこの本では、巻末に折りこまれていたはずの詳細な地図が失われている。このことはたぶん、ロンドン滞在中に彼がくりかえし「地図を抜いて」いたために、それがぼろぼろに摩切れてしまったことを意味していると思われる。漱石が最も頼りにしていたのは、『ベデカ』の地図だったのである。そしてこの『ベデカ』には、ロンドン塔にいたる道順が、はっきりと示されている。

塚本 利明

◆漱石とスコットランド

◇「専修英米研究」/4/専修大学英語英米文学会/1986.03/p83-115

> 東北大学図書館に所蔵されている漱石文庫の一冊に、*Baedeker's Great Britain* (1898) がある。これはおそらく、渡英の前に漱石が購入したものであろうが、その460ページに折り込まれた *Railway Map of Scotland* を見ると、3ヶ所はかなりはっきりと、1ヶ所にやや小さく、インクで印がつけられている。それは *Ayr*, *Glasgow* および *Dunkeld* である。ピトロクリはこの地図には載っていないから、印もつけられていない。しかし、少なくとも漱石がインクで印をつけた地点には、なんらかの関心を抱いていたことは否定することができまい。

塚本 利明

◆はじめに

◇『漱石と英国：留学体験と創作との間』/塚本利明著/彩流社/1987.09/p1-7

> 漱石におけるイギリス体験の前史とも言うべきものを考える必要はないか。漱石は渡英直前に、当時最も信頼し得るとされていた旅行案内書を三冊購入した。それは、*Baedeker's Great Britain* (1897) *Baedeker's London and its Environs* (1898) および *Baedeker's Northern France* (1899) で、これらはいずれも東北大学附属図書館に残されている。未知の国を訪れるには、ある程度の予備知識を得ておくのが当然の心構えである。これらの案内書は、即物的な生活上の情報を与えてくれるばかりでなく、かなり高度の歴史的・文化的背景をも解説してくれるのだ。

塚本 利明

◆「薙露行」の基本構造：マロリー、テニソン、漱石

◇「専修英米研究」/9/専修大学英語英米文学会/1991.03/p32-59

>「幻影の盾」では、時間軸上の自由な移動が、はるかに重要な意味をもっている。「盾」そのものの材源がLacombe, Arms and Armour(1876)に載せられているくメジューサの盾>であることは岡三郎氏が指摘した通りだが、漱石所蔵本の図版ではこの盾には創がない。これは十六世紀の作であり、実戦には使用されていないからである。ところが漱石は、「盾には創がある」とし、「右の肩から左へ斜に切りつけた刀の痕が見える」とした。この創の由来を語るために、物語は盾の所有者中リアム「四世の祖」まで遡り、そしてかくして遡った盾の由来のなかに一種の予言が含まれる。

塚本 利明

◆漱石と「キリクランキーの狭間」：J. M. デイクソンを通して

◇「英語青年」/138(9)/研究社出版/1992.12/p458-461

>私見によれば、漱石がJ.H.デイクソンの招待に応じてスコットランド旅行を思い立ったそもそものきっかけは、文科大学入学直後の英詩の講義、より正確に言えば、当時の外国人教師James Main Dixon (1856-1933)の講義にあり、このことは、東北大学付属図書館所蔵の資料によって充分立証することができる。当面の問題を検証する手掛かりは、漱石文庫の一冊、J.M.Dixon編Simpler English Poems (Tokyo, Hakubunsha, 1890)への書き込みである。この詩集は、四六判101ページ、ミルトン以下19世紀末までの英米の詩作品68編(抜粋を含む)を載せた英詩の入門書で、これを教科書として使用した漱石が、ここに様々な書き込みをしているのである。

塚本 利明

◆あとがき

◇『漱石と英文学：「濛虚集」の比較文学的研究』/塚本利明著/彩流社/1999.04/p587-594

>私が心掛けたことは、どのような作品にせよ、最初は入手しやすい版で読むが、最終的にはできるだけ漱石自身が読んだ版、すなわち東北大学付属図書館に残されている漱石手沢本に眼を通すよう努める、ということであった。振り返ってみると、このやり方によって裨益されたことはまことに大きい。この意味では、最も重要な文献は東北大学付属図書館に残されている漱石文庫だということになる。本書を纏めるにあたっては、多くの方々のご指導とご協力をいただいたが、特に東北大学付属図書館には、再三にわたって貴重書「漱石文庫」の閲覧、撮影、掲載を許可していただいた。

恒松 郁生

◆漱石とロンドンの古本屋：今昔

◇「漱石研究」/8/翰林書房/1997.05/p215-221

>漱石の蔵書が東北大学図書館に所蔵されているのはご存知でしょう。私は個人的な蒐集癖で漱石蔵書と全く同じ本(同一発行年、同一シリーズ)のコレクションを二〇年近く探索続けており、いずれ記念館内に「漱石蔵書」のコレクションを再現し公開できればと考えております。漱石の作品や日記を眺めると、あちこちに「古本屋」とか「書籍」が出てきます。漱石が蔵書を処分したのであろうことは明らかです。作品の中で言及されている本が、東北大学の漱石文庫に含まれていないからと言って漱石が読んでいないとは言えません。木曜会の弟子もすれば漱石の本を借りており、それらの本が返却されていないのもあるからです。

出口 保夫

◆カーライル博物館

◇『ロンドンの夏目漱石』/出口保夫著/河出書房新社/1982.09/p179-198

>八月三日、漱石は池田菊苗を訪ね、その足でチェルシーにあるカーライルの家を見に行った。玄関を入ると居間とダイニング・ルームがあって、その居間に訪問者用の分厚い記帳簿が置いてある。この記帳簿を見ると、一九〇一年八月三日土曜日のところに、他の幾人かの名前とともに、日本人池田菊苗と夏目金之助の署名が認められる。この署名は従来、漱石のものではなく、池田が漱石の分まで書いたように考えられてきた。漱石文庫の中にある何冊かの洋書には、「K. Natsume」の署名がなされているが、これらの署名と、カーライル博物館のそれと照合して見ると、両者には明らかに類似点が認められる。

東北大学附属図書館  
調査研究室

◆紹介

◇『漱石文庫目録』(東北大学附属図書館所蔵特殊文庫目録シリーズ ; 1)/東北大学附属図書館編/東北大学附属図書館/1971.10/p2-3

>この目録はまだ完全というには距離があり、今後本館館員の努力によって積極的に進めなければならない。(1)漱石文庫として集注すべき関係図書を全館から探索して少くともそのビブリオグラフィーを作ること、(2)目録の記述を一層整備すること、(3)書物を読んだ時期を明らかにする1つの資料である「購入時の年月とK. NATSUMEのサイン」の調査と目録への登載(洋書の場合この数は非常に多い)など、仕事は多い。さらに(4)新発見の書入れの解読ないしはすべての書入れ、傍線部分の写真版の作成、(5)新発見の書入れを使用している漱石研究の基礎を培う学問的作業など、館員の負担すべきことである。

富山 太佳夫

◆漱石の読まなかった本：英文学の成立

◇『ポパイの影に：漱石/フォークナー/文化史』/富山太佳夫著/みすず書房/1996.01/p145-184

>アメリカでは英文学をどのように教えようとしていたのであろうか。アメリカの高校生や大学生用に作られた英文学の本は存在する。因みに、漱石文庫で調べてみると、彼の利用した教科書がやはりこの形式のものである。このような記述の形式自体は、今でもよく見かけるものであるが、やはり興味をひくのは時代の区分とそこであつかわれる作家の名前である。その時代区分の表と第八期の内容目次をこの本から引きだしてみると、次のようになる。アメリカの作家の占める割合が大きいことを別にすれば、文学、歴史、伝記、神学などの混淆型であって、イギリスの国内における考え方にほぼ対応すると考えていいだろう。



仲 秀和

◆夏目漱石の研究：「漱石文庫」瞥見と、『こゝろ』について

◇「私学研修」/139-140/私学研修福祉会/1995.12/p96-105

>現在、岩波書店から「原稿に基づいた本文」と銘うった漱石全集が刊行中であり、今まで収録されなかった「ノート」「講義録」、新発見の「評論」「談話」「書簡」「俳句」あるいは『「明暗」草稿』『「道草」草稿』なども加えられるということで、その実際の資料を調査したかったのである。「漱石文庫」をみると、たとえば留学中のノートのところでは、B5より少し小さめの半紙に漱石が細かい文字で必死にメモをとり考えている様子が目にうかぶようであり、また、日記は正式な当用日記は二冊のみ(一冊は留学日記)で後は手帖のようなものに、左から右へ、あるいは右から左へ書かれており、備忘録的なメモ、感想といった印象をうける。

中川 浩一

◆「デベカ」と『倫敦塔』

◇「ちくま」/191/筑摩書房/1987.02/p11-13

>東北大学附属図書館が、貴重図書の扱いで収蔵する「漱石山房蔵書」を、地下書庫に入って閲覧する機会に恵まれた。『デベカ旅行案内』ロンドン篇が、『倫敦塔』執筆に際し、参考図書になっているのではないかと考え、実物で検証しようと思ったのが、仙台にでむいた目的のひとつであった。おめあての図書は、表見返しにK. Natsumeのサイン入り、加えてThe Tower(一五二～一六二ページ)の個処に、無数のアンダーラインが施されていた。この『デベカ旅行案内』のコピーを手にして、ロンドン塔The Towerを訪ねてみると、事実を異なる叙述を漱石が行った個処を、いくつか発見できる。

中島 国彦

◆漱石・美術・ドラマ(上)：英訳『ラオコーン』への書込みから

◇「文學」/56(11)/岩波書店/1988.11/p82-99

>わたたくしは、早稲田大学図書館の所蔵本をかつて手にする機会を持った。今年の春、東北大学図書館で漱石蔵の『ラオコーン』英訳の調査をする機会を持った。そして、漱石の蔵書が、全て早大図書館所蔵本のそれと同一であったことを確認した。『漱石全集』での紹介は重要な書込みは網羅しているものの、全てではない。書込み以外に部分的にアンダーラインが引かれているのも注意される。『人類の教育』の部分には全く書込みやアンダーラインが見られないのに対し、『ラオコーン』と『ハンプルク演劇論』の二つの部分には同程度に書込みやアンダーラインが見られる。この二作品を、確かに続けて通読している。

中島 国彦

◆漱石・美術・ドラマ(下)：英訳『ラオコーン』への書込みから

◇「文學」/57(1)/岩波書店/1989.01/p112-122

>ロンドンの下宿で文学勉強のやり直しを始め、英書の横文字と格闘し始めてから数年、その何処かの時点で書込んだはずの英訳『ラオコーン』への書込みをもう一度見据える時、その演劇論・美術論がどういう形で漱石の想念を解放し、深めていったかの姿は、改めて注目せざるを得ないように思う。自己の矛盾をつきとめる前に病歿した牝牛、その矛盾の極点で自己破壊した藤村操—そうした姿を相対化しつつ、漱石はあの秘密に満ちた芸術的感興の世界の内実を見つめ、それを生み出すエネルギーの源泉と方法を、レッシング体験から見据えようとしたのではなかったか。

永嶋 昌子

◆漱石とロッセッティ

◇「實英文学」/55/実践英文学会/2003.01/p123-125

>『草枕』の国文学的意義は専門家に任せるとして、今回はこの小説を、試みに19世紀イギリスの詩人・画家、D.G.ロッセッティをもとに読み説いていくこととしたい。漱石が所蔵するロッセッティ資料は、実に大きな影響を漱石に与えていたと考えられる。漱石がイギリスで購入した書物の中に、“DANTE GABRIEL ROSSETT”(THE EASTERN ANNUAL ADVERTISER, 1902)という美術雑誌別冊に掲載された文献がある。彼はこの文章の一節に下線を施している。さらに注目すべきは、この波線部分は、現在東北大学附属図書館「漱石文庫」自筆資料の中にある、“Art for Art”と題したメモの冒頭に、波線部分そのままが抜き書きされているという点である。

中野 記偉

◆漱石・英文学・キリスト教：マルチナリアの一考察

◇「英米文学研究」/10/上智大学英文学会/1968.03/p5-8

>Leon DickinsonがA Guide To Literary Studyのうち小説の章で、物語を理解する一方法として「図表」化をすすめていたのを記憶している人が多いであろう。漱石がGeorge Gissing(1857-1903)の歴史小説Veranilda(London, Constable & Co. 1904)に書き込んでいた「図表」が念頭に去来し、かたがたGissingの描いた六世紀のローマの美姫、勇士の姿が二重、三重に折り重つた。本稿がとりあげるのは、実は漱石の「図表」とそれにつけた書き込みである。そこから漱石の英文学受容の一面をキリスト教に対してとつた彼の姿勢を考察しようと思う。

中野 記偉

◆夏目漱石におけるG・ギッシング体験：『門』に関連して

◇「比較文学」/15/日本比較文学会/1972.10/p1-13

>漱石がギッシングを読んでいた事実はもっと注目されてよい。漱石山房蔵書目録にはG・ギッシングが四冊みえている。The Unclassed. 1895, The Town Traveller.(年代記載なし), New Grub Street. 1901, Veranilda. 1904.がそれで出版社名は略したが、四冊とも異なったところから発行されているので、ギッシングが売れない作家として敬遠されていたのがわかる。やや意外と思われるのは、ギッシングの最も人気のある、実は随筆のThe Private Papers of Henry Ryecroft. 1903.の見あたらないことである。漱石がギッシングの衝撃力をどうひきいれて、それをどう漱石化して表出しているかを検討してみたい。

中野 記偉

◆漱石とギッシング：『草枕』をめぐる

◇「英語青年」/122(10)/研究社出版/1977.01/p473-474

>G.ギッシングが四十六歳を一期として生涯を終えたのは明治36年12月であった。蔵書目録にはその翌年の版のG.ギッシングが二冊、New Grub Street (初版は1891)とVeranilda (初版)、それに出版年不詳のTown Traveller (初版1898)とThe Unclassed (1895,初版1884)の計四冊が載っている。先年、現物を東北大学附属図書館でみる機会をえた。Veranildaの書き入れは判読可能なもののみとどめたのであって、漱石自身はもっと多く書きこんでいることがわかった。現地体験に裏打ちされたVeranildaの読書体験が『草枕』のsettingにまでも影響を及ぼしていると私は考える。

中野 記偉

◆漱石の正義：英語文学化したプラトニズムに関連して

◇「比較文学」/20/日本比較文学会/1977.12/p1-13

>世紀の変わり目に文庫本形式の古典双書が大流行する。これらの双書は平均一シリングの廉価本であった。漱石山房の蔵書には割合に全集が少ない。彼は素人的に大づかみに、しかしそれだけに西洋古典の核心を直観的に把握しようとする一人であった。そういう漱石には、プラトンはスコット・ライブラリ所収の二冊『理想国』『プラトン名篇抄』でこと足りたと思われる。蔵書目録によるかぎり彼のもっていたプラトンはこの二冊きりである。漱石が正義を追求した跡をたずね、英語文学化したプラトニズムとの関連に着目しつつ、『草枕』から『坊ちゃん』へ、そして『吾輩は猫である』にまで遡った。

中野 好夫

◆漱石寸感：東西文化の対決者として

◇「明治大正文学研究」/7/東京堂/1952.06/p17-22

>漱石の蔵書目録を見ると、ニーチェに関しては、わずかに「ツァラトストラ」の英譯本一冊を見出すにすぎない。しかし同書の欄外書き入れを見ると、實に丹念に、むしろニーチェと格闘的な意気込みで精讀して、一々こまかく英文で感想を書いていつている。最も書き入れ量の多い書物の一冊である。英語などで書き入れたのは、どう見てもまだ若い頃のことと相違ないから、「猫」の最後を書いたのが、明治三十九年前半期として、彼が「ツァラトストラ」を読んだのは、それよりもまだ相當に前のことではなかつたらうかと思える。この対決に身をもって、彼自身のうちに苦悩した最も早い日本人の一人だつたのである。

中原 章雄

◆漱石の『英国詩人の天地山川に対する観念』の意味

◇「立命館大学人文科学研究紀要」/18/立命館大学人文科学研究所/1968.05/p123-150

>漱石の蔵書目録を見てみよう。マーシュウ・アーノルド編のもの、あと一種類の(恐らく教科書風の)選集と“The White Doe of Rylstone”及び“Lyrical Ballads”の註釈本、それに三種類の散文の選集—それが蔵書目録にのっているウォーズワース関係の図書すべてである。これまた、この事実だけから何らかの結論を引き出すことは危険であるが、意外に蔵書が貧弱であるという印象を受けずには居られないであろう。このように漱石が日本の普通の英文学研究者がウォーズワースを読む以上に特にウォーズワースを愛読したとか、深く研究したとかいう証拠は『英国詩人』以外のところには何もないのである。

中原 章雄

◆『文学論』と「現代科学叢書」：留学生漱石の知的環境(一)

◇「立命館文学」/386・387・388・389・390/立命館大学人文学会/1977.10/p1231-1249

>一九〇一年九月二三日の日記には彼は次のように書いている。King's College 二至ル Ethics 及び Origin of Art ヲ買フ この origin of Art 即ち『芸術の起源』は言うまでもなくヒルンの著書である。この本で彼にとって有益であったのは、巻末の詳細な十五ページにもおよぶ「引用書目(AUTHORITIES QUOTED)」だつたと思われる。東北大学の漱石文庫本『芸術の起源』の「引用書目」のリストには、うち約五〇点に×印がつけられている。芸術論に関して古典的なものから最初の研究書までを網羅した包括的なリストが、漱石のその後の読書計画にこの上ない指針となつたであろうことは、疑う余地がない。

中原 章雄

◆シドニーの『18世紀のイギリスとイギリス人』と『文学評論』：『文学評論』第二編について(2)

◇「外国文学研究」/77/立命館大学外国語科連絡協議会/1987.07/p35-52

>本文中で漱石がこの著者と書物の名を挙げているのは、一節ただ一度だけであるために、漱石の「大変参考になった」という言葉にもかかわらず、シドニーの本が第二編ほぼ全面にわたって材源として果たした役割は、これまで十分に認識されなかつたように思われる。東北大学附属図書館の漱石文庫に収められているシドニーの『18世紀におけるシギリスとイギリス人』の二巻本には、ほとんど総てのページにわたって漱石により明らかに講義のノートのためと分かるような下線や傍線が施されており、いくつかのページの余白には短い要約的な書き入れが記されていて、いかに丁寧に漱石がこの本を読んだかが歴然としている。

中原 章雄

◆アディソン論の意義：漱石の『文学評論』を読む

◇「外国文学研究」/78/立命館大学外国語科連絡協議会/1987.11/p35-62

>漱石は、アディソンの歴史的位をサムエル・ジョンソンの「アディソン伝」からの引用に従って紹介している。「アディソン伝」は、ジョンソンの『イギリス詩人伝』全体のなかでも優れたものに属し、特にバランスのとれた記述で有名である。東北大学附属図書館の漱石文庫の『イギリス詩人伝』を見ると、『文学評論』を講義するさいに漱石が行つたと思われる書き入れが「アディソン伝」の随所に見られる。これも漱石文庫所蔵のアディソンの著作を見ると、その序文の伝記的記述を漱石が書き入れをしながら、丁寧に読んでいることが分かる。しかも、伝記的要素を積極的に活用しようとする傾向さえかなり見られるのである。

長峰 宏

◆漱石と鷗外(二)

◇「教育の研究」/17/宮崎大学教育研究所/1953.12/p69-76

>いま二人の留学の模様をその日記について見ると、鷗外は大学卒業以来の宿志がはらされた喜びをおさえることができず、意気さかな詩をつくっており航海はきわめて快適で、食欲も好奇心も旺盛である。これに反して漱石は洋行は別段それほど望んでいただけでなく、その日記のどこにも胸をおどらすような記事は見出されない。きわめて無愛想な投げやりな文章である。漱石のは言わば浴衣がけのぞんざいな文体で、片仮名と平仮名とがまじりあい、文語・国語・俗語がごちゃやになった全くの書きなぐりで、しかも文字がまちがっていたり、所々ぬけたりしている。心持は、その後ロンドン留学期間を通じて一貫して変わらないものである。

中村 寛夫  
秋山 豊

◆新『漱石全集』刊行にあたって、岩波書店編集部にく

◇「漱石研究」/1/翰林書房/1993.10/p104-130

>[小森]東北大学の漱石文庫の書き込みなども、かなり現実に再現していくというか、その、報告していくんでしょうか。[秋山]まだ、なかなかそこまでの見通しは持ちにくいのですが、当たるところは全部当たり直したいと思っています。[石原]文学論ノートなんかもあらたにやり直しということになるようですね。村岡さんの仕事は、あの読み難い蠅の頭ぐらいの文字を案によく解説していますけれども、糊付けされた束を下の紙から上の紙へと活字に起こすべきところを、逆に上から下に起こしているところが、かなりありますね。断片も、まだ活字化されていないものが、漱石文庫にたくさん眠っていますから。

難波 喜造

◆「草枕」と処女入水伝説

◇「日本文学」/30(1)/日本文学協会/1981.01/p84-88

>漱石の創作ノートに、「あきづけは、をばながうへに、おくつゆの、けぬべくもわは、おもゆるかも」の歌が「日置長枝娘子歌(万葉集八 四十一)」として、「見菟負処女墓歌一首并短歌(万葉九ノ四十九丁ヨリ)」同三十五ヨリの全文と並べてメモされていることは(「断片—明治三十九年—」)、つとに指摘されてきた。念のため「漱石山房蔵書目録」を当たってみたら、万葉集では『万葉集略解(目録附)橘千蔭著、寛政十二年名古屋東壁堂板、三十二冊』があるのみであった。それならよくわかる。「小竹田」を「ささだ」と訓じたのは賀茂真淵の『万葉考』と千蔭の『略解』である。

仁木 久恵

◆漱石の英詩 “Life's Dialoue”

◇「明海大学外国語学部論集」/13/明海大学外国語学部/2001.03/p61-74

>漱石が “Life's Dialogue” を書いたのはイギリスに留学してから半年以上経った頃のことと、漱石からこの詩を見せられたクレイグは数か所ほど訂正をしてから、この詩はブレイクに似ているが、incoherent (首尾一貫していない) と評したというのである。漱石がブレイクの詩を読み込んでいたことは確かである。“Life's Dialogue” を書いた3か月前(4月16日)に The Poetical Works of William Blake, Lyrical and Miscellaneous (1890) を購入した漱石は、そのうち何篇かの詩に “mystic” (神秘家) というコメントをつけた。そして、“Auguries of Innocence” の冒頭のスタンザには、「奇句」という添え書きを残している。

仁木 久恵

◆英文学者漱石と『ハムレット』

◇『漱石の留学とハムレット：比較文学の視点から』/仁木久恵著/リーベル出版/2001.04/p80-103

>『ハムレット』の評釈が始まったのは明治三十七年十二月五日。使ったテキストは、ロンドン留学中に指導を受けたクレイグやダウデンが監修した注釈シリーズ『アーデン版シェイクスピア』(The Arden Shakespeare)で、当時の一流の学者が分担執筆したものである。作品には詳細な序文がついており、語句の解釈や背景の説明もくわしい。テキストの余白の書き込みから、漱石が『ハムレット』のどんな点に興味をもったかを窺うことができる。この書き込みと「ハムレットの性格」(『断片』十八)は漱石の『ハムレット』理解を示すよい資料なので、その中から注目すべき点をいくつかあげてみることにしよう。

菲澤 嘉雄

◆ロンドンの夏目漱石：漱石研究の一つの盲点

◇「中央公論」/71(3)/中央公論社/1956.03/p244-251

>大蔵省の『金融事項参考書』によれば、明治三十三年の一圓の對ポンド相場は、平均ニシリング〇〇、三四九であった。十圓で約二十シリングすなわち一ポンドになる勘定だ。うんと安い下宿へ越して「下宿籠城讀書主義」に徹底しよう。こう固く決意した漱石は、一ヵ月後にはカンバーウェル・ニューロードのフロッデン・ロード六番地へ越していく。事實、漱石はこの下宿に籠城した四ヵ月ばかりのあいだに、日記に購入金額を記しているものだけでも百八十八圓の本を買っている。書名だけで購入金額を書入れてないものまで含めれば、恐らく二百五十圓、英貨にして二十五ポンド近くの本を買ったと推定される。

沼野 恭子

◆『虞美人草』と『ルージン』

◇「比較文学研究」/57/朝日出版社/1990.06/p172-179

>「露西亜の小説」を、狭くドストエフスキーの小説にのみ限って考える必要はないだろう。というのは、漱石所蔵の英訳ツルゲーネフ全集の中に、大正五年の断片の内容を思わせる漱石自身の批評が書き込まれているからである。それはC・ガーネット訳の『ルージン』の半ばあたりにある(一一一頁)書き込みである。「露西亜の小説」である『ルージン』を読んで、自分が書いたことと同じことが書いてあるのに驚いたわけである。彼が『ルージン』を読んだ時期は、『虞美人草』脱稿の明治四十年九月以降、翌年の四月までの間だったと推定することができる。



野上 素一

◆漱石とイタリア文学

◇「比較文学」/2/日本比較文学会/1959.09/p23-32

>ガブリエレ・ダヌツィオの「死の勝利」の見返しに文字がある。『快樂』（英訳ではThe child of pleasureとなっている）の批評を英文で書いている部分はさらに一層注目に値する。彼の蔵書目録を検討すると、ダンテの「神曲」はスカルタツィーニの監集した原書のもの一冊、テンプル・クラシックスの叢書で、地獄篇、浄罪篇、天堂篇の英訳一冊ずつ、ポッカチオの十日物語の英訳一冊、その外フォガツツァーロ、レオパルディ、タッソ、マキアヴェェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチなどの英訳もあり、辞典としては伊英・英伊を一冊もっている。イタリア文学にもかなりの関心をよせていたことが明白であると云えよう。

野上 豊一郎

◆漱石と STERNE

◇「英文学研究」/17(1)/日本英文学会/1937.02/p106-116

>漱石先生は小説家としての生活は最後の十年間であつたが、英語學者、英文學者としての生活は一中に三年間の海外留學期間を挟んで一前後十五年に亘つてゐた。此の十五年は殆ど間斷なき讀書生活であつたから、最後の十年間の創作生活に對して長い準備時代であつたと見ることができる。その蔵書目録が示すやうに、主として英文學の範圍内の物を讀んでゐられた。英文學の中でもどんな物を讀んでゐられたかといふと、各時代を通じ、各種類に亘つて讀んでゐられたやうであるが、どちらかという韻文よりは、散文の方をおもに讀んでゐられたやうである。散文の中でも殊に小説を多く讀んでゐられたやうである。

芳賀 徹

◆夏日漱石：絵画の領分

◇『絵画の領分：近代日本比較文化史研究』/芳賀徹著/朝日新聞社/1984.04/p353-518

>漱石旧蔵書中のFrederick Miller, Pictures in the Wallace Collection, London, 1902(『ウォーリス・コレクション所蔵絵画』)という解説書は、おそらく漱石がマンチェスター・スクエアに同美術館を訪ねたときに購入したものであつたらう。漱石はここで約二十点ほどのグルーズを、他の英仏十八世紀絵画の作品とともにたつぷりと鑑賞したのであつたと思われる。西洋美術史や美学についてもなみなみならぬ素養と見識をもっていたことは、その蔵書目録や、何冊かの美術書への自在で辛辣な書込みからもうかがわれる。

長谷川 公一

◆漱石の手紙・阿部先生の遺言状：阿部次郎記念館の開館

◇「宙」/6/東北大学出版会/1999.11/p5-7

>片平キャンパスの近く米ヶ袋三丁目四一〇二九に、十月二十三日、東北大学文学部の阿部次郎記念館が開館した。開館記念展を開催中だが、十二月九日漱石逝去当日の感慨が注目される大正五年の日記(ペン書き、黒革装)も展示されている。「天気陰寒、夏日先生死す(中略)、通夜、雪とまがふ月夜、死面。狩野先生の注意の眼を寒す」などとある。簡潔だが、臨場感があり、詩的でもある。ちなみに狩野先生は、「漱石文庫」とともに、東北大学総合図書館が誇る「狩野文庫」の狩野亮吉氏のこゝである。阿部先生の一高時代の校長でもあつた。「阿部次郎と漱石」などの企画展も予定している。

林 修三

◆漱石と推理小説

◇「ファイナンス：大蔵省広報」/2(1)/大蔵省/1966.04/p24-25

>「猫」の第一章の中頃に、迷亭君が、この間、ある雑誌を讀んだらこんな話が出ていたといつて、ある巧妙な詐欺のやり方を紹介する。近頃、外国の古い短編推理小説を集めた本を讀んでいたら、図らずも、この迷亭君の話にあたるものを見つけたのである。それは、英国のロバート・バーの「The Absentminded Coterie」(放心家組合)という短編である。近代的推理小説は、エドガー・アラン・ポオに端を発し、コーナン・ドイルのシャーロック・ホームズもので大隆盛をきたしたことは周知の事実である。漱石全集にのっている漱石の蔵書目録をみると、ポオについては、詩集と推理小説集の二冊がみえるが、ドイルのものはないようである。

林原 耕三

◆思ひ出すことども

◇「不死鳥」/31/南雲堂/1970.01/p2-3

>先生には英詩が数篇ある。その中で、ロンドンで、シェイクスピアの個人購読を受けてゐたクレイグ氏に示してその批評を仰いだ一篇がある。氏は一讀して、参考に数箇所加筆を試みた。漱石先生オリジナルの原稿も(それらのコピーも!)岩波にはなく、当時幼なかつた純一(長男)さんの手許にも残つてをらず、小宮さんの手を通じて今は東北大学の図書館にあるといふので、私は最近同大学の英文科教授村岡勇氏と司書の大原美治氏の労を請うて、そのゼロックス(?)のコピーを送つて貰つた。それによつてこの稿をしたためているのであるが、読者の便宜のため、その詩の全部を引用する。

原 千代海

◆漱石とイプセン(一)

◇「図書」/646/岩波書店/2003.02/p26-29

>「漱石全集」を繙くと、イプセンの名がさかんに現れる。にもかかわらずイプセンを単なる問題劇、社会劇の作家としてのみとらえてきた偏見のせいも、数ある漱石研究の中で漱石のイプセンの關係に論じたものはひとつもない。漱石山房の蔵書目録を一見すると、エドモンド・ゴスやウィリアム・アーチャーの英訳のイプセン戯曲が『社会の柱』『人形の家』以下ほとんど全部入っている。そしてそのうちの幾冊かには短い読後感の記入がある。また蔵書の中にはG・ブランデスの『十九世紀文学主潮』があり、そうすると、彼の『ヘンリック・イプセン』もマクミラン版の英訳で讀んでいたと思われる。

原 千代海

◆漱石とイブセン(三)

◇「図書」/648/岩波書店/2003.04/p28-31

> 漱石が『坑夫』において手に入れたのは「意識の流れ」という斬新な小説技法であった。ここに至ってようやく漱石もイブセンと同じ地点に立ったように思われる。談話筆記「愛読せる小説戯曲」の中で、漱石はマーテルリンクから得た智識としてイブセンを語っている。漱石山房の蔵書目録には『二重の庭園』というマーテルリンクの英訳のエッセイ集が入っており、漱石はその中の「近代劇」なる一章を読んで「意識」の問題に興味を持った。それが『坑夫』のモチーフになったのだろう。『坑夫』を書き上げた漱石は、半年もたたないうちに、次作『三四郎』を執筆している。そして今度は直接、それも大幅にイブセンを作品の中へ引っ張り出した。

原田 隆吉

◆漱石文庫について

◇「木道子：東北大学附属図書館報」/1(3)/東北大学附属図書館/1976.10/p1-2

> 数量的に注目される点は、①全蔵書の実に26.4%に記入がある。②洋書は34.8%、和漢書は4.4%となって、その相違に驚く。③洋書でも特に文学書37.0%が高く、その中で専門の英文学が35.0%、である。④その他特に高いのは他国文学47.3%、文学一般48.0%、哲学書の51.1%で、注目に値する。加えて、以上のような比率の高い分野は総点数も多い。漱石が英文学プロパーにとどまらず、他国文学、文学一般、哲学へと、困難な文学論や人生論の根本問題へと掘り下げて行ったあとをここに推量してもよいのではないだろうか。

原田 隆吉

◆東北大学附属図書館「漱石文庫」の成立

◇「図書館学研究報告」/9/東北大学附属図書館/1976.12/p265-255

> 漱石文庫が、東北大学附属図書館の蔵書となったのは、第2次大戦もたけなわの昭和19年(1944)2月ごろのことであった。片平丁の大学構内の中央講堂で、その蔵書の大学への受入を記念した、漱石講演会が開催された。聴衆は学生よりも市民——それもかなり教養の高そうな人々が多く、一杯であった。講師は法文学部の小宮豊隆教授、阿部次郎教授の2人と、わざわざ来仙した安倍能成一高校長であり、この順に壇に立った。それから何ヶ月か経過して図書館の大閲覧室の、メインカウンターに一番近い席に「漱石文庫図書目録」が置かれていた。

原田 隆吉

◆東北大学附属図書館「漱石文庫」のインスペクション

◇「図書館学研究報告」/13/東北大学附属図書館/1980.12/p388-360

> 漱石文庫の図書群と目録とのインスペクション(点検)の結果をまとめて、ここに発表することとした。点検の実際の場面において、もっとも大きな問題になったのは、本館に受入れられる以前の漱石山房蔵書と、本館に受入れられて後の漱石文庫との、具体的な出入誤差であった。前者は漱石没後(大正5年)、早くから散逸しないように十分な配慮をめぐらして、嗣子夏目純一氏が久しく保管されたもので、その目録は「漱石山房蔵書目録」として出来上っており、「漱石全集」に収載されている。本来東北大学「漱石文庫目録」とは相違があるはずはない。ところが両者の間には、意外にもかなりの相違がある。

針生 和子

◆漱石とマシュー・アーノルド覚え書

◇「文藝研究」/54/日本文芸研究会/1966.11/p61-69

> 漱石がアーノルドから受けた影響には、注目すべきものがあると思われる。「漱石文庫」にあるアーノルド関係の書物を、出版年代順にあげて解説しておこう。(1)Literature and Dogma. (2)On Translating Homer. (3)Culture and Anarchy. (4)H.Ellis. The New Spirit. (5)W.B.Worsfold. The Principles of criticism: An Introduction to The Study of Literature. (5)Poems of Wordsworth. Chosen and ed. By M.Arnold. (6)Selected Poems of Matthew Arnold. (7)W.J.Courthope. Life in Poetry: Law in Taste. (8)L.Magnus. Introduction to Poetry. (9)H.W.Paul. Matthew Arnold. (English men of letters).

針生 和子

◆漱石の「草枕」における非人情

◇「文化」/33(2)/東北大学文学部/1969.09/p187-216

> 現実界が意識界だという思想は、「吾輩は猫である」でも見られる。この十一章の覚え書と思われる明治三十八、九年頃の断片に、「自覚心」に照応すると思われる“self-consciousness”という用語が見える。○ Self-conscious の age は individualism を生ず。社会主義を生ず、○ Self-consciousness の結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり。したがって、「自覚心」は「意識」に関係があり、さらに“consciousness”に関わっている。ところで、東北大学附属図書館蔵の、漱石「文学論」の草稿と思われる未発表資料には、James. (W.), cons., consciousness, と書き記されたものが多数ある。

半藤 一利

◆英文学者の漢詩好き：漱石俳句探偵帖 第二十三回

◇「俳句研究」/65(11)/富士見書房/1998.11/p130-133

> 御存知のように漱石は、文部省の第一回留学生としてイギリスにまでいっている。また、蔵書を見ると、英米の作品はもちろん原書であるし、仏独ソそのほかの国の作家の作品もすべて英訳本で読んでいる。森鷗外や二葉亭四迷と違い、漱石訳の翻訳本は一冊もないものの、ご自身の小説や文学論や文芸評論にでてくる引用外国文献の漱石訳は、実に見事なものである。左様、いちばんいい例がある。『草枕』九章のなかで主人公の画工が、那美さんのもとめに応じ、メレディスの小説『ビーチャムの生涯』の第八章「アドリアの海の一夜」の一節を、即席の日本語訳で読んでできかせるところがある。

飛ヶ谷 美穂子

◆漱石文庫のメレディス：その基礎事項に関する覚書

◇「三田國文」/8/三田国文の会/1987.12/p74-64

> 漱石文庫として保管されている旧漱石山房蔵書に、漱石自身による数多くの書き込みのあることは、よく知られている。シェークスピアやニーチェへの書き込み等は、資料的価値を越えて、それ自体が研究の対象となりうるほどの内容を持つものである。メレディス(George Meredith)の作品の場合、漱石文庫所蔵の18巻のうち16巻に書き込みが見られるが、『全集』に記載のあるのは、その中の10巻のみで、それにも遺漏がある。本稿は、漱石文庫とその他周辺資料を基に、漱石のメレディス受容をめぐる基礎事項の整理を試みるものである。

飛ヶ谷 美穂子

◆喜劇と悲劇と：『リチャード・ヘヴァレルの試練』と『虞美人草』

◇「藝文研究」/52/慶應義塾大学芸文学会/1988.01/p186-204

> 『リチャード・フェヴァレルの試練—或る父子の物語—』(The Ordeal of Richard Feverel—A History of A Father and Son)は、メレディスが発表した初めての本格的長編小説である。本稿は、先学の麒尾に付して、両作品の比較を通し、漱石がメレディスから読み取っていたものの一端を跡づけようと試みるものである。漱石は1902年発行のConstable's Indian & Colonial Library版でこの作品を読んだ。東北大学漱石文庫蔵本には、鉛筆とインクによる書き込みが37ヶ所に互って見られ、漱石がこの作品を精読し、かつ楽しんだ事がしのばれる。

飛ヶ谷 美穂子

◆漱石文庫のメレディス(二)

◇「三田國文」/14/三田国文の会/1991.06/p56-50

> 本稿では、『シャグパットの毛剃り』(The Shaving of Shagpat, 1855)、『ヴィットリア』(Vittoria, 1866)、『ビーチャムの生涯』(Beauchamp's Career, 1875)、『喜劇論』(An Essay on Comedy, 1877)の4作品について、書き入れを紹介する。まず『シャグパットの毛剃り』と『ビーチャムの生涯』の2作は、それぞれ作品の一部が『草枕』に引用されている。『ヴィットリア』は、『坊っちゃん』の材源となった『サンドラ・ペロニ』の続編とも云うべき作品である。『喜劇論』は、『文学論』や『虞美人草』にその投影が感じられるほか、漱石の喜劇観・文学観の形成にも大きく与ったと思われる。

飛ヶ谷 美穂子

◆『三四郎』とメレディスのヒロインたち：美禰子の結婚をめぐる

◇「日本近代文学」/54/日本近代文学会/1996.05/p14-27

> 漱石文庫所蔵の図書購入メモ等周辺資料は、彼が明治三十八～九年頃—即ち作家となって最初の一、二年で集中的にメレディス作品の大半を読破していたことを物語っている。『三四郎』においては、総体的な印象から云えば、美禰子は那美や藤尾以上にメレディスのヒロインたちを髣髴させる。またこの作品のそこそこには、『草枕』や『虞美人草』に投影した『ビーチャムの生涯』と『クロスウェイズのダイアナ』の印象が、なおも尾を引いているように思われる。本稿では、まず『ビーチャムの生涯』を取り上げ、美禰子像に新しい光を投げようとするものである。

飛ヶ谷 美穂子

◆書き入れは語る

◇『漱石全集 第27巻 月報28』/ 岩波書店/1997.12/p1-4

> 私の場合漱石文庫に足を運んだそもそのきっかけは、ヘンリー・ジェームズの長編小説『黄金の盃』と『明暗』との比較研究を論文のテーマに考えており、それにはまず漱石手沢本The Golden Bowlを一目見ておきたいという、しごく単純なものだった。ごく若い時期の書き入れを見るのも、また別の意味で嬉しい。一高時代読んで『エリア随筆』Essays of Eliaの中に語注や下調べの跡をみつけると何だか嬉しくなるし、大学一年の時購入にした『仏蘭西文典』French Conversation-Grammarの題扉に、署名とともに「Lit. College/I.U.J.」(帝大文科大学)と誇らしげに記してあるのも微笑ましい。

飛ヶ谷 美穂子

◆「漱石文庫」逸聞考

◇「文學」/1(2)/岩波書店/2000.03/p107-117

> 東北大学図書館特殊文庫には、「漱石文庫」のほかにも、「土井晩翠文庫」「ケーベル文庫」「ヴァント文庫」などさまざまな学者文人の蔵書が収められているが、なかでも「漱石文庫」となるとひととき重きをなすのが、「狩野文庫」—すなわち漱石の学生時代以来の親友狩野亨吉の旧蔵書である。爾来、東北大学大学図書館には貴重な個人蔵書などを別置収蔵する「特殊文庫」のシステムが生まれた。「風が吹けば」式に言えば、狩野の並外れた蒐書趣味が旧友漱石の蔵書を仙台に呼びよせ戦火から救ったことになる。「漱石全集」および「岩波書店」の文字は、ともに狩野の筆に成るものである。

飛ヶ谷 美穂子

◆漱石の愛蔵書

◇「図書」/630/岩波書店/2001.10/p26-31

> 漱石文庫には「六ペンス」を名に冠した叢書が十数点残っている。そのなかにも一種奇異な印象を与える本が二冊ある。プルワー＝リットンの小説『朝な夕な』および『ポール・クリフォード』である。『朝な夕な』の扉には鉛筆で、かろうじて「May 5/88」と判読できる日付や、試験の成績表らしい文字と数字の列などがなぐり書きされ、さらにそれを塗りつぶすように無茶苦茶に線が引いてある。『ポール・クリフォード』の扉にも、鉛筆のいたざら書きに交じって、「30.3/88 Y.Yoneyama」というインク書きの署名が読みとれる。これらの本は、漱石の学生時代の親友で早世した天然居士こと米山保三郎の遺品だったのである。



飛ヶ谷 美穂子

◆漱石自筆図書購入ノート 翻刻

◇『漱石の源泉 創造への階梯』/飛ヶ谷美穂子著/慶応義塾大学出版会/2002.10/p25-45

>本稿は、東北大学附属図書館「漱石文庫」に保管されている漱石自筆資料のうち、「蔵書目録」として扱われている一冊のノートの翻刻(部分)である。このメモは、冒頭に「Catalogue of Books/From November 1901/K.Natsume」と記されているように、内容は漱石が英国留学中の明治34(1901)年11月からほぼ十年余にわたり、購入した書籍(おもに洋書)について、著者・タイトル・値段などをその都度記録したもので、蔵書の入手時期や読んだ時期までを推定するうえで、貴重な手がかりとなる。漱石文庫の自筆資料中「洋書目録19」としてまとめられた一連の紙葉(留学前半に購入した179点の図書購入メモ)に続く性質のものと考えられる。

平川 祐弘

◆地獄の門：鷗外、敏、漱石の文体

◇「比較文学研究」/19/朝日出版社/1971.07/p1-18

>漱石が持っていた『神曲』はLondon J.M.Dent & Co.から一九〇一年に出たTemple Classicsの英伊対訳本で、英訳はカーライルの弟のJ.A.Carlyleの手になるものであった。その本の二十七頁、地獄篇の第三歌の英文の頁に書入れがあった。読む人の恐怖心をかきたてるような要素が、漱石の訳文では(厳密に言えば誤訳であるが)命令形式に訳することによって示されたといえるだろう。『倫敦塔』を書く時巧みにこの句を挿入して利用したのである。その際訳文は修正された。漱石の日本語はダンテの詩に近い生命のリズムを感じさせる。

平川 祐弘

◆夏日漱石の『ツアラトウストラ』読書

◇『ニーチェとその周辺：氷上英廣教授還暦記念論文集』/氷上英廣教授還暦記念論文集刊行委員会編/朝日出版社/1972.05/p629-759

>漱石の『ツアラトウストラ』読書とその書入れを分析しつつ追体験するという試みは、漱石の心的世界をなまなましく現前させてくれた感があった。小宮豊隆教授が東北大学で『ツアラトウストラ』を講義した際に、なぜ東北大学図書館の漱石蔵書の書入れに留意しなかったのかななども思った。Nietzsche: Thus Spake Zarathustra, translated by A. Tille, London: T. Fisher Unwin. 1899というその本は、ほかの漱石の旧蔵書とともに現在、東北大学附属図書館にたいせつに保存されている。漱石は『ツアラトウストラ』から非常な一時には「異常な」といいたくほどの一刺戟を受けていたのである。

平川 祐弘

◆詩の相会うところ、言葉の相結ぶところ：漱石における俳諧とシェイクスピア

◇「すばる」/22/集英社/1975.12/p168-206

>西洋と東洋の間で激しく揺れた漱石の心理が露骨に示されているドキュメントは、漱石の英訳本『ツアラトウストラ』欄外余白に書入れた英文の感想である。その感想の一端は日本語に移されて『断片』にも記入され、最終的には芸術的に加工されて作品中に再三姿を現わした。漱石の「東洋への回帰」の自己主張はまず『吾輩は猫である』の最終章に現われ、ついで『草枕』の中で本格的な論となる。そしてその余波は『虞美人草』の文体にまで及ぶのである。西洋詩歌との対照裡に俳諧の功德が話題となるのも、そのような前後関係の中においてであるから、その経緯をいま順を追ってたどってみよう。

平川 祐弘

◆ハーンの『草ひばり』と漱石の『文鳥』

◇「人文学研究：福岡女学院大学人文学研究所紀要」/3/福岡女学院大学人文学研究所/2000.03/p125-153

>漱石は先輩ハーンの『草ひばり』を読んで、それを念頭において『文鳥』を書いたのではないだろうか。漱石は『猫』でも『文学評論』でも談話でも手紙でも、もちろん『三四郎』でも、ハーンにたびたび言及し、その英語の文章を何度かほめている。それなのにどうしたわけか「漱石山房蔵書目録」には、漱石が所有したハーンの書物としては、最晩年に求めたハーンの Interpretation of Literature しか残されていない。しかし両者の間にたとい事実的な関係がなかったとしても、すなわち影響関係の有無を研究の前提条件とするような比較文学研究は成立しないとしても、『草ひばり』と『文鳥』の二作の比較は、無意味ではなかったのではあるまいか。

福島 君子

◆「漱石と象徴」：その歴史的及び思想的背景について

◇「比較文学」/31/日本比較文学会/1989.03/p129-142

>本稿においては、象徴的手法がどのようなところから生まれてきたものであるかを、明治文壇との関係、及び思想的背景を明らかにすることによって考察してみたい。漱石は、シモンズ訳のPoems in Prose from Charles Baudelaire(明治三十八年版)や、ボードレール伝説も載ったハネカーのEgoists, a Books of Supermen(明治四十二年版)のいずれも初版を所蔵しており、ボードレール及び象徴主義に関心を持ち続けていたことがわかる。しかし漱石の象徴観に影響を及ぼしたのはそれだけではなく、ここに他方面の背景を検討してみよう。

福島 君子

◆漱石文学の対話性：『猫』・スターン・ドストエフスキー

◇「國士館士館大學教養論集」/50/國士館大学教養学会/2000.03/p71-86

>明治三十九年の「断片」に、「三ノ人物ヲ取ツテ相互ノ関係ヲ写ストキ此六個ノ分岐ヲ生ズ。之ヲ交錯シテ用ふるトキ無限ノ波瀾ヲ生ズ」という言があり、六種類が図示されている。この四つの説明に現れる“a circle of ~”にも円環の構造が見える。またこの「三の人物」を「彼我の境」で循環的に描けば「無限ノ波瀾」=対話性が生まれると言えよう。ここで注意すべきは『猫』の例のように、登場人物の対話性と読者との対話性がいつも外見に現れる構造を取るとは限らない。極端な場合は独白であっても、「彼我」が内在されていれば、多数の声が、内なる声が響きあうものとなる。

福田 真人  
太田 昭子

◆漱石と西洋美術：倫敦・明治三十五年前後

◇「比較文学研究」/42/朝日出版社/1982.11/p15-68

> 漱石にとって重要なことは、英国留学によって、西洋絵画のいわば精髓をその本場において実際に見た経験である。この小論では、漱石のロンドン留学における美術体験といったものを、出来る限り、実証的に跡付け検討してみたい。まず漱石の日記。手紙を手がかりに、彼のロンドン留学中の美術に関する行動を探り、蔵書の一部からそれを補充して、その行動との相関関係を見てみる。とりわけ王立絵画院で行なわれた特別展のカタログへの書込みをもとに、実際漱石が見たであろう絵画を探し出し、それに対する彼の簡単な評釈を検討しつつ、後年の創作活動との関わりにも言及することにする。

福原 麟太郎

◆漱石の蔵書目録

◇「英語研究」/50(5)/研究社出版/1961.05/p20-21

> 夏目漱石の所蔵本はいま東北大学図書館へ移っているということだが、その目録は、漱石全集の、私の持っている版でいうと、別冊(大正十四年七月)の中に入っている。それを見ているといろいろの連想や回想が起り、漱石のこと、英文学のことが頭にうかんでくる。この冊数全部読まなかったかも知れないと同時に、この以外を図書館などで読んだらうし、また自分の蔵書は友人やお弟子によく贈るものだから、愛読の書のないものもあるであろう。史書、思想書、科学、芸術、語学など、漱石を形作った教養の源を示す書物が蔵書目録にはあるわけで、目録を眺めてみるのも一興と思ひ、試みに書いてみた。

藤尾 健剛

◆漱石・クロージャー・マルクス

◇「日本文学・語学論攷」/奥津春雄編/翰林書房/1994.02/p137-161

> 夏目漱石のロンドン留学時代、特にその後半期は、猛勉強に打ち込んだ時期であった。影響の深淺はともかく、漱石が少なからぬ刺戟と啓発を受けたものに、John B. Crozier の著書があった。漱石所蔵の Civilization and Progress と The History of Intellectual Development の両書には、おびたしい量の書き入れやアンダー・ラインが残されており、『文明と進歩』に対しては、『文学論ノート』にも、多くの引用や言及がなされている。『文明と進歩』が読まれたのは、明治三十五年二月ないし三月頃であったと、極めて高い蓋然性に基づいて推測することができる。『知性発達史』が読まれたのも、同じ時期と考えるべきである。

藤尾 健剛

◆夏目漱石「キディングス・ノート」翻刻

◇「日本文学研究」/36/大東文化大学日本文学会/1997.02/p15-32

> 東北大学附属図書館漱石文庫には、岩波書店版全集に収録されていない自筆資料が所蔵されている。その一つに、「漱石文庫ノート断片 第1冊」と分類されているノート類がある。「ボサンケ・ノート」(7枚)、「キッド・ノート」(5枚)、「ギディングス・ノート」(8枚)、「スタウト・ノート」(2枚)、「リポー(感情)ノート」(13枚)、「ボールドウィン・ノート」(14枚)である。主眼は書物の内容それ自体を整理することに置かれている。ただし、「キディングス・ノート」は、『社会学入門』(The Elements of Sociology, 1898)の要約が六枚で、残りの二枚には読書から触発された漱石自身の見解が記されている。

藤尾 健剛

◆夏目漱石「ボールドウィン・ノート」：翻刻と解題

◇「文藝と批評」/8(5)/文芸と批評の会/1997.05/p72-52

> 現在刊行中の『漱石全集』には、旧全集未収録の資料も少なからず収められているが、六種類のノートは、今回も収録されないとのことである。そこで、本稿では、そのなかから「ボールドウィン・ノート」を選んで翻刻する。『精神発達の社会的倫理的解釈』(1897)に関するノート14枚である。これは、縦20.3cm、横16.4cmの紙に黒インクで書かれている。用紙には女性像をかたどったデザインのすかしが見える。特に表題があるわけではなく、左上角に「baldwin」「baldwin2」などと、小さく記されているだけである。内容の要約や抜粋が大部分であるが、むらのない記述がなされている。

藤尾 健剛

◆「集合意識」と「明治の精神」：漱石のボールドウィン受容

◇「漱石研究」/8/翰林書房/1997.05/p189-205

> ロンドン留学中、『文学論』の準備のために漱石が綴っていた書物の一冊に、J・M・ボールドウィンの『精神発達の社会的倫理的解釈』(一八九七)があった。東北大学附属図書館の漱石文庫に「ボールドウィン・ノート」と呼ばれる十四枚にわたるノートが残されている。そこには、『精神発達の社会的倫理的解釈』の要約が丹念に記されている。本稿では、『精神発達の社会的倫理的解釈』との関連に焦点を当てて、「集合意識」が漱石の文学・思想のなかでどのような軌道を描いているかを検討した。追跡の及んだのは『心』までで、それ以後のゆくえをたどることはできなかった。今後の課題としたい。

藤尾 健剛

◆トルストイからギョイヨーへ？：夏目漱石『文学論』成立の一背景

◇「大東文化大学紀要. 人文科学」/36/大東文化大学/1998.03/p1-20

> 『漱石全集』第二十一巻(平成9・6)に収録された「ノート」の「Imitation」や「Suggestion」の項目を見ると、ボールドウィンやル・ボンの著書の他にも、多くの研究書から「模倣」や「暗示」の概念を学んでいることが分かる。ここでは、「Suggestion」の項目で触れられているギョイヨー(Jean-Marie Guyau)の『教育と遺伝(Education and Heredity)』との関連に注目したい。新全集収録の「ノート」でこの本に言及されている箇所は十四カ所にのぼり、手沢本にも下線や書き込みが少なからず残されている。『教育と遺伝』は、一言でいえば、「暗示」の教育学的効用を説いた書物である。

古川 久

◆漱石と漢文学

◇「東京女子大学附属比較文化研究所紀要」/8/東京女子大学附属比較文化研究所/1959.10/p1-24  
 > 東北大学に保管されてある漱石蔵書中、明治四十年発行の『校補點註 禪門法語集』(山田孝道編)には、まるで真剣勝負を思はせるやうな激しい語調で随所に書き入れがしてあり、この頃の心境を思はせるものがある。『門』第十八回から第二十一回にわたる宗助参禅の描写は、これより約十五年の昔、明治二十七年暮から二十八年にかけて十日間程、漱石自ら鎌倉円覚寺の一塔頭である帰源院に過した経験が基礎となつてゐる。そしてこれは四十一年『三四郎』に先立つ『夢十夜』の第二夜にも、一度小品化した素材であつた。当時の禅に対する関心は二十七年九月四日附子規宛書簡に述べてゐることからも察せられる。

栢田 啓三郎

◆漱石が愛読したウィリアム・ジェームズ(上)

◇「図書」/249/岩波書店/1970.05/p39-43  
 > 漱石が読んだジェームズの著書は、『多元的宇宙』のほかでは、「蔵書目録」に記載されているThe Principles of Psychology. 2 vols. 1901. The Varieties of Religious Experience. 1902. の二冊だけであつたと思われるが、そのうち、所蔵の『心理学原論』(初版は一八九〇年)は一九〇一年の印刷本であるから、この年に出た第何刷かの本を、『宗教的経験の諸相』は出たばかりの初版本を、漱石はロンドンで買い求めて熟読したのであろう。とくに前者に含まれているいくつかの中心的な、重要な思想が、漱石の文芸理論において大きい役割を果たしていることは、よく知られているところである。

栢田 啓三郎

◆漱石が愛読したウィリアム・ジェームズ(下)

◇「図書」/250/岩波書店/1970.06/p36-41  
 > 『漱石全集』第十六巻所載の「蔵書の余白に記入されたる短評並に雑感」を見ると、『宗教的経験の諸相』に書き込みが読まれる。七ヶ所の書き込みは、およそ百冊の「短評及論文其他」の記入のなかでも決して量の多い方ではなく、むしろ少ない方に属しよう。けれども、この僅かな書き込みにも、よく注意してみると、漱石の宗教に対する関心のもち方とジェームズに対する共感の一端がうかがわれるのである。漱石の所蔵にかかるジェームズの書物三冊は、漱石を「育てた」という「書齋に積まれた」数多い書物のなかでも、漱石がとりわけ共感をもつていたばかりか緋いた愛読書であつたことは疑いあるまい。

増見 利清

◆漱石の『ハムレット』

◇「悲劇喜劇」/33(1)/早川書房/1980.01/p10-11  
 > 漱石が『ハムレット』について書きとめている文章を、全集から拾い出してみた。そのおもなものは「ハムレットの性格」と名付けられた一文で「明治三十四年の断片」におさめられている。漱石がシェイクスピアに深く傾倒していたことは、「文学論」や岩波版全集に整理されているアーデン版テキストへの書きこみから十分知ることができる。漱石のハムレット観に特に興味を覚えるのは、私がロンドンに滞在していた時のペンションが、漱石のロンドンの第一の下宿から通り一つへだてた歩いて二、三分の距離にあつたという個人的理由にもよるのだが、この下宿からクレイグ教授宅に通っていた漱石は、ここでこの断片をしたための可能性もあるのである。

松浦 暢

◆キーツ

◇『欧米作家と日本近代文学. 5 英米篇 2』(比較文学シリーズ)/福田光治, 剣持武彦, 小玉晃一編/教育出版センター/1975.06/p41-70  
 > 夏目漱石の場合は、キーツを客観的冷静に批判して、受容反発をみせている。総じてロマン主義的感情優位の文学よりも、合理的・理知的な十八世紀文学に興味をしめした漱石にしてみれば当然のことだつた。漱石は蔵書目録からすると、キーツをAldine Edition(一八九九)の詩集で読んだらしいが、その余白の短評には「滑稽ナリ、馬鹿々々シイ、不用ナリ、醜ナル例」の表現が多く「佳」は少ない。「子の愛読書」でステヴンソンは簡潔でクドクドしい処や女々しい処がないから好きだとのべているが、漱石の評価規準を暗示し、これがキーツにも適用されているように思われる。

松村 達雄

◆漱石と西洋文学

◇「国文学解釈と鑑賞」/33(13)/至文堂/1968.11/p18-24  
 > 作家となつてからの漱石となると、もはや西洋文学は必ずしも英文学に集中的に限定されてはいない。書簡、日記、断片等を通読し、また蔵書目録の書物の刊行年度などを点検してみて、作家となつてからの漱石は、折にふれて大陸文学にも親むようになっていることがわかる。漱石の蔵書目録を詳細に点検すると、英訳のフランス文学やロシア文学、その他の大陸文学の作品がかなり数多く見出される。大正四年の「断片」(七)に、ニーチェとドストエフスキーを比較した英文の書き込みがある。ニーチェのプロシア人ぎらい、愛国心の蔑視と比べて、ドストエフスキーの協同精神、同胞愛を優れりとする。

松村 昌家

◆夏目漱石とディケンズ

◇「Queries」/9/大阪市立大学大学院英文学研究会/1969.11/p41-47  
 > 漱石がどれだけのディケンズの作品に親しんでいたか、つまびらかではない。蔵書に入っているのは、『ピックウイック・ペイパース』、『マーティン・チャズルウィット』及び『二都物語』の三冊である。この中で『二都物語』には、いろいろな短評が書きこんである。そして、特別な関心をもっていた。しかし、「現時における小説及び文章に付て」の中でのサッカレとの比較をはじめ、諸所における言及からみても、このほかにも、少くとも初期の作品にはよく親しんでいたことは否定できない。最も注目すべきことは、明治三十九年六月『中学世界』にのせた「文学断片」におけるディケンズへの言及である。



松村 昌家

◆『倫敦塔』とドラローシュの絵画

◇「神戸女学院大学論集」/26(2)/神戸女学院大学研究所/1979.12/p25-34

>あるとき偶然にかねてから手に入れたいと思っていた書物に出くわした。黄色い表紙の小冊子に、瞬間的な魅力を感じて、手にとって表題をみると、“A Short Sketch of the Beauchamp Tower, Tower of London : and also a Guide to the Inscriptions and Devices Left on the Walls thereof.”とある。著者はW. R. Dick.この本が漱石の蔵書の中に含まれていることは、『漱石全集』第二巻に収められている『倫敦塔』の注解にも指摘はされている。しばらくしてから同じ問題に関する考証が、塚本利明氏によって、ほとんどなすつくされているのを知った。ここではディックの著書について、一言補足を加えておく。

松村 昌家

◆漱石日記「女皇ノ遺骸市内ヲ通過ス」の謎

◇「図書」/630/岩波書店/2000.10/p32-36

>漱石は葬儀見学より一週間前の一月二十六日の日記に、関連事項を書き記している。「女皇ノ遺骸市内ヲ通過ス」というものである。女王の遺骸は、二月一日まではオズボーン・ハウスに安置されていた。そして漱石は二十八日の日記に前日のありさまをふり返っている。英語混じりに書かれた漱石の一日おくれのこの日記は、彼の直接の見聞というよりも、二十八日発行の新聞記事などをよりどころとして書かれたものだと考えることはできないだろうか。だとすれば、「女皇ノ遺骸市内ヲ通過ス」も、ひょっとすると、翌二十七日の追悼礼拝に関する情報から生じた早合点、あるいは勘違いだった、という推定が成り立つのである。

松本 倫枝

◆漱石と「莊子」：則天去私への一考察

◇「実践女子大学文学部紀要」/13/実践女子大学：実践女子短期大学/1970.12/p111-116

>漱石の漢詩について、私はその用語の上から「莊子」との関連をみて来たのであるが、これらの漢詩には又多くに禪に關係のある語句が用いられている。漱石の蔵書の中にある多くの禪關係の図書の示すように、また既に論じられているように漱石の禪への傾斜は、漢詩の上にもあきらかにそのあとを示している。漱石山房蔵書目録の中には禪に關する本が多く、また「論語」「詩經」「文選」などはあるが老莊の書名は見あたらない。「莊子」の思想が禪にとり入れられ、また陽明学などにも流入しているとすれば、漱石と「莊子」との関連の中には、それらのものを経ている面もあることは当然考え得ることである。

丸谷 才一

◆あの有名な名前のない猫

◇「現代」/34(2)/講談社/2000.02/p196-235

>ジェローム・K・ジェロームといふ、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて活躍したイギリスのユーモア作家がある。彼の作品は人気があったし、日本でもよく英語の教材になった。漱石はこの作家が好きで、蔵書のなかにも四冊ほどあつて、うち一冊『ぶらぶら歩き三人男』(一九〇〇)には線が引いてあるページもある。この『ぶらぶら歩き三人男』の前篇とも言うべき一八八九年の『ボートの三人男』(漱石蔵書にはあるが線は引いていない)が『猫』にかなりの刺戟を与へてゐる、とわたしはかねがね思つてゐる(このことを言つた人がゐるかどうか、わたしは知らない)。

水谷 昭夫

◆「トーマス・ア・ケムピス」書き込み：漱石とキリスト教への一考察

◇「人文論究」/23(2)/関西学院大学人文学会/1973.02/p1-20

>漱石はT・ア・ケムピスを、何よりもむき出しの人間として気ままに読んでゐる。反撥し共鳴し、皮肉り、深く頭を下げ、沈黙する。漱石文芸におけるキリスト教受容の研究というものに、近年多くのすぐれた仕事がなされているが『The Imitation of Christ』の書きこみを通じて、この間の事情が考慮されてもいいように考える。漱石文庫にある書き込みであるが、インキその他の変色が目立ちはじめで、リコピーやゼロックスをお願いする事に気がひけてならない。にもかかわらずその調査が如何に大切であるかという事の一端が、明らかになればと考えた次第である。

水谷 昭夫

◆漱石のロンドン

◇「人文論究」/25(1)/関西学院大学人文学会/1975.06/p33-50

>歩く事に馴れた漱石にとって、ガワー・ストリートから倫敦塔まで、そう遠い道のりではない。「冬の初めとはいひながら物静かな日である」と漱石は書いている。ここでもう一度日記にかえる。Tower Bridge, London Bridge, Tower, Mounument を見るとある。当時見て歩いたものを順を追って並べたものか、橋をまずまとめて書いておいて、建物は建物とわけて書いたのかも知れない。ただ、前者であるなら、漱石は、タワー・ブリッジからロンドン・ブリッジを眺めたことになる。私は、タワー・ブリッジもロンドン・ブリッジも見えない橋を、漱石は渡ったにちがいないと考えた。

みなも ころう

◆『こころ』と『二都物語』

◇「大妻女子大学文学部紀要」/9/大妻女子大学/1977.03/p19-35

>漱石が『こころ』執筆の際に意識したと思われる、下敷きになった作品が指摘できるのではないかと考えている。私見によれば、それは、チャールズ・ディケンズの小説『二都物語』(A Tale of Two Cities)である。この稿では、その『二都物語』と『こころ』との関係を記述してみたい。漱石は、ディケンズの『二都物語』を読んだ感想、あるいはメモをその蔵書に書き込んでいる。どちらかといえば批判的な面が強いが、それだけに身を入れて読んでもいるわけで、いわば、同様のモチーフで漱石が筆を執るならばという、未だ姿をなさない小説像を暗黙のうちに前提としての行為と考えてもよいだろう。

宮崎 孝一

◆漱石におけるディケンズ

◇「英語青年」/125(12)/研究社出版/1980.03/p549-551

> 漱石のディケンズの作品に対する批評が比較的具体的になされているのは A tale of Two Citties (The Walter Scott Publishing Co. 版) に書き込まれた marginalia である。この所面白し。探偵の葬式はこんな目に逢ふが当然なり。探偵とは Roger Cly で、Darnay の裁判のとき彼に不利な証言をした男である。漱石はその作品の随所で、変質的なほどに「探偵」に対する反感を表明しているが、この書き込みもその気持の表れであろう。『二百十日』には「デッキンスの両都物語り」について問答するくだりがある。少し影響の跡が明瞭に認められると私が思うのは、『草枕』の那美さんに対する perfield 中の人物 Betsey Trotwood の場合である。

宮本 盛太郎

関 静雄

◆漱石はキッドをどう読んだか

◇『夏目漱石：思想の比較と未知の探究』(Minerva21世紀ライブラリー；57)/宮本盛太郎, 関静雄 著/ミネルヴァ書房/2000.02/p218-229

> 漱石のキッド観には相当きびしいものがある。『社会進化』と『西洋文明の原理』に書き込みをしながら読み『漱石全集』第二巻所載のノートでもしばしばキッドに言及している。このノートにはキッドと明記されていなくても、キッドの文章がある。漱石のキッド読書には、批判・賛同以外のもう一つの重要な側面がある。それは、キッドの二著がいわば西洋思想史百科事典の性格をもっていて、政治学・経済学の原典をほとんど読まなかった(社会学の原典は読んでいるが)漱石が、キッドの二著から知識として得たものが少なくなかったと思われることである。

村岡 勇

◆漱石と英文学

◇「文藝研究」/54/日本文芸研究会/1966.11/p33-42

> 漱石の大学予備門時代の成績を見て注意を惹かれることは数学の成績が他の学科の成績に比して圧倒的に優れていることである。大学時代に用いたノートに“Introduction to Philosophy”という題のノートがある。'scientific' に関連して、'What is a science?' という設問があり、この問いに対して 'arrangement of materials,' 'basis,' 'character,' 'means' の四つの面から答えている。数学が得意だった漱石には、科学がどういうものか、漠然とではあるが、既に分っていたに相違ないけれども、しかしこのような説明に出会ってはじめて、漱石は眼から鱗の落ちるような思いをしたのであろう。

村岡 勇

◆まえがき

◇『漱石資料：文学論ノート』/村岡勇編/岩波書店/1976.05/pv-vi

> 昭和37年7月、当時の東北大学附属図書館長、世良晃志郎教授から話があって、北住敏夫教授(国文学科)と私(英文学科)が未整理のままになっている漱石文庫所蔵の漱石資料を整理することになった。北住教授はその資料の中からひと綴りの漱石のノートを選ばれたが、間もなく整理し終えられた上、これを筆写、「人生論覚え書」という仮題をつけて、東北大学文学部出版の『文化』30巻、4号(昭和42年3月)で公表された(本書の一部となるべきだと考え、その本書への転載を教授にお願いしたところ、ご快諾を得たのでここに収載することができた)。

村松 昌家

◆日本近代文学と英文学：比較文学的視点から

◇『英文学を学ぶ人のために』/坂本完春/世界思想社/1987.04/p305-317

> 三四郎のありようを、メレディスのリチャード・フェヴァレルの場合と比較してみたい。池のほとりにおける三四郎と美禰子との出会いの描写には、メレディスの描いたリチャードとルーシとの出会いの情景が、明らかに影を落としているからである。漱石文庫蔵の『リチャード・フェヴァレルの試練』(一九〇二版)には、その情景が展開する第十四章の終わりの部分から次章にかけて、漱石の感動賞讃の跡をしるす多くの書き込みや下線・傍線がついている。だが、問題は、三四郎と美禰子との出会いのあとの成り行きである。ルビコン川を渡ったリチャードと三四郎との違いが、はっきり出てくるのである。

森 美穂子

◆『明暗』と The Golden Bowl

◇「英語青年」/121(5)/研究社出版/1975.08/p212-213

> The Golden Bowl (GBと略記)は、明治37年11月発表されたHenry James (HJと略記)の大作である。『文学論』第三編第一章及び第四編第三章にも、HJについて言及がある。漱石蔵書のGB(東北大漱石文庫蔵)の該当箇所には、「千余字」を出すための語数計算が走り書きされ、漱石の熱意と細心とをしのばせる。『明暗』がGBと様々な共通点を持つのは、興味深いことである。『思ひ出す事など 三』の記事や、蔵書中の4冊のHJの著書に、Notes on Novelistsが含まれることから見ても、漱石はこの同時代作家に対し、深い関心を抱き続けていたらしい。両作品を、その一部を引用しつつ比較してみよう。

森 美穂子

◆『明暗』と The Golden Bowl・再説

◇「英語青年」/122(2)/研究社出版/1976.05/p74-76

> 漱石が The Golden Bowl を読んだ一つの契機として、私は、明治33-35年の留学中のHJに関する見聞、それに Academy 誌1905年2月及び Athenaem 誌1905年3月のGBについての詳細な匿名批評を考えていた。蔵書目録には両誌とも1910年3月以降のナンバーが記されている。シャーロック・ホームズいわく、情況証拠というものは、同じほど確定的に全く異ったものを指すことがある。蔵書目録に残っている著書の冊数、蔵書への書込み云々はまさに情況証拠であって、文学研究の第一等資料は常に作品そのものである。両作品が似ているか否か、どこが似ていてどこが違うのか、再び両作品を比較してみよう。

森川 隆司

◆漱石の学生時代の英作文三点

◇「英学史研究」/21/日本英学史学会/1988.10/p185-204

> 漱石全集第12巻の“Japan and English in the Sixteenth Century”と題する文章の末尾には“to be continued”と記されていて、次号に続篇が掲載されることを予告している。ところが『ザ・ミュージアム』4号以下のどの号を捜しても続篇は出てこないのである。東北大学図書館で閲覧することを得た漱石の「学生時代の試験答案並びに作文」は7冊のアルバムに収められていた。“J. E. S. C.”が収納されていた最後のアルバムに手が届いたのは2日目の午後であった。写し得た三つの英作文を披露することにより、漱石研究の資料が三つふえたということになれば、筆者の喜びこれにすぐるものはない。

森谷 佐三郎

◆「虞美人草」の比較文学的考察

◇「英語青年」/106(7)/研究社出版/1960.07/p346-347

> 漱石の作品に対する Shakespeare の影響の可能性を示すものとして、Shakespeare が漱石の初期の一時代の大きな関心の的であったことは、大学における購読、蔵書の中の書き込みから明らかであり、また「虞美人草」の中に Hamlet や Antony and Cleopatra への直接言及が目立つ程あることは今更言うまでもない。Hamlet 関係では、甲野は Hamlet、亡父は亡王、継母は Gertrude (母)と Claudius (継父)の二役、糸子は Ophelia、宗近は Laetes (愛人の兄で行動家)と Horatio (友人)の二役、宗近老人は Polonius である。Antony and Cleopatra 関係では、藤尾 Cleopatra、小野 Antony、小夜子 Octavia、狐堂先生 Octavius の対応がある。

屋名池 誠

◆縦書き書きの日本語史 1：漱石の書き入れから

◇「図書」/627/岩波書店/2001.07/p48-52

> 杜の都仙台は東北大学の図書館に、夏目漱石の没後自宅に残された蔵書や自筆資料が一括して収まっている。一昨年の春、私がお訪したのは漱石文学の研究とは全く無縁の目的からだった。明治の日本語の書字方向にはどんなバラエティ、可能性の幅があったかを知りたかったのだ。文豪と断簡零墨も現在まで大切に保存されている漱石、英文学の研究者としても当時第一級存在で英語と日常的に接していた漱石—その自筆資料は書字方向の種々相を知るには格好の資料なのである。今回はその自筆資料の中からいくつか興味深い例を紹介し、日本語の書字方向の多様性とその変遷を考えてゆく手掛かりとしたい。

矢野 万里

◆日本におけるR.L.スティーヴンソン：主としてハーン、漱石の場合

◇「英学史研究」/4/日本英学史学会/1972.04/p39-48

> 「英文学形式論」の中で論述の一つとして取り上げられているのに、スティーヴンソンの「バントレーの領主」の一節があります。このスティーヴンソン愛好は、漱石の文章各所に散見されるところです。また、漱石の残した蔵書の余白に書き込まれている読後の感想や批評に、「ダイナマイター」(続新アラビア夜話、1885)1907版のマージナルノートに非常な賞賛が見出されます。「彼岸過迄」の敬太郎と「バントレーの領主」のマッケラーとの役割りに、著しい役割り上の一一致点を認めて間違いなければ、そのつながりは小説家漱石とスティーヴンソンの間にも延長されるとして間違いなしと感ぜられます。

山田 風太郎

◆漱石と「放心家組合」

◇「文藝春秋」/49(2)/文芸春秋/1971.02/p85-87

> 江戸川乱歩が選んだ古今の推理小説ベストテンの中に、ロバート・バーの「放心家組合」(あるいは「健忘症連盟」という作品がある。私は、この「放心家組合」を読んだとき、そのアイデアそのものにはそれほど感心しなかった。なぜかという、このアイデアは漱石の「猫」に出て来るからである。しかし、おそらく事実は逆だ。「放心家組合」を含むロバート・バーの短篇集「The triumph of Eugene Valmont」(ウジェーヌ・ヴァルモンの敏腕)が出版されたのは一九〇六年、漱石の「猫」の一節を含む第十一回が書かれたのは、同年すなわち明治三十九年である。漱石の蔵書目録にはこの書名はない。

湯本 智子

◆漱石文庫の整理にたずさわって (1)：蔵書中の挿入物について

◇「木道子：東北大学附属図書館報」/21(1)/東北大学附属図書館/1996.06/p8-11

> 3000冊の蔵書の中に挿入されていたさまざまな物は、静かに現状維持され続けてきた。おそらく、何年も前よりこれらの挿入物は漱石の門下生、岩波書店の編集者、漱石研究者等によって確認されていたのであろうが漱石の足跡を正確に留めようとする暗黙のルールにより、脈々と受け継がれてきた。／漱石自筆の断片、紙片類 21枚／名刺類5枚／丸善の納品書19枚／漱石以外の人物が書いたと思われる断片・手紙類4点／印刷物14点／押し花15枚／新聞紙／新聞紙を除いて、資料はすべて挿入蔵書書名、挿入頁を記録し保存の観点より他の自筆資料、身辺資料と共に別置することとした。

湯本 智子

◆漱石文庫の整理にたずさわって (2)：書簡について

◇「木道子：東北大学附属図書館報」/21(2)/東北大学附属図書館/1996.09/p5-9

> 漱石文庫の中に収蔵されている書簡は、5点である。1. 博士号辞退事件に関連する文部省よりの一連の公文書 3通 2. 正岡子規の関甲子郎宛書簡 封書1通と葉書1通 3. 漱石の手帳に挿入されていた小宮豊隆の漱石宛書簡 葉書4通 4. 雑辺資料中に収納されていた太田祐三郎の漱石宛書簡 葉書1通 5. 蔵書中に挿入されていた皆川正禧の漱石宛書簡 葉書1通(前号で紹介) しかし、漱石と親交のあった土井晩翠宛の漱石自筆の書簡2通が晩翠文庫の中に発見されている。ここでは、これまであまり知られていない正岡子規と本学の図書館長であった小宮豊隆の漱石宛の書簡を紹介したいと思う。



湯本 智子

◆漱石文庫の整理にたずさわって (3) : 自筆資料に見られる用紙と未翻刻断片について

◇「木這子：東北大学附属図書館報」/21(3)/東北大学附属図書館/1996.12/p5-10

＞ノート断片が書かれた用紙について/1.PARKINS & GOTTO'S IVORY LAIDというすかし文字がある紙/2.THE NEW NORTH MILL SUPERFINEというすかし文字と女性のすかし模様がある紙/3.会社のマークがなく罫線がすかしで入っている紙/4.BRITISH EMPIRE NOTEというすかし文字のある紙/5.葉紙のような薄い紙/6.F.R Co. 1903というすかし文字がある紙/7.K.B. 1904というすかし文字がある紙/8.Royal Vellumと王冠のマークのすかし模様がある紙/9.RIVERDALE 139 SUPERFINEというすかし文字のある紙/10.冊子体のノートを切った紙/11.西洋紙/12.カード形態の紙/13.灰色の紙/14.印刷物の裏

湯本 智子

◆漱石文庫の整理にたずさわって (4) : 蔵書目録をめぐって

◇「木這子：東北大学附属図書館報」/21(4)/東北大学附属図書館/1997.03/p9-13

＞死後漱石の蔵書約3000点は「漱石山房蔵書目録」(大正14年発行、岩波書店)として、公表された。この中には、外国雑誌12点が含まれるが、その中の数点には漱石が記事を主題毎に分類しようと試みた雑誌が何点かみられる。又、漱石研究者にとってバイブルともいえる山房目録に記載されていない資料が2点存在する。本稿では、これらの雑誌から2点、および「漱石山房蔵書目録」に記載されていない資料2点をとりあげ、それらの資料が保存されていた状況やそこから推量される事等を紹介してみたい。整理者としての立場より4回に渡って執筆した拙文を終わりたい。

尹 相仁

◆漱石の世紀末的感受性：水底幻想を中心にして

◇「新潮」/84(11)/新潮社/1987.11/p184-200

＞十九世紀の英文学を広く渉猟していた漱石は、当然ながら、E・A・ポーやスウィンバーン、テニスンらの詩に繰り広げられる幻想的な水の世界にたびたび接することができた(漱石の蔵書目録にはこの三人の作品集がそれぞれ入っている)。『文学論』の中で『ルネッサンス』の一節を英文で引用した後、評語を加えている。ところで、ペイターを丹念に読んでいた漱石がペイターの文体を論じる中で、ことさらにこの条を引き合いに出している点は注目を要する(漱石の蔵書目録には、一九〇一年版の『ルネッサンス』を含めて、二冊のペイターの本が含まれている)。

尹 相仁

◆群集のなかの漱石：ロンドン体験における都市の発見

◇「新潮」/86(6)/新潮社/1989.06/p206-216

＞漱石はロンドンに着いた当初自らが置かれた状況を振り返りながら、ドイツの精神病理学者M・ノルダウの有名な『墮落論』(一八九二—三)に触れているが、その文脈からして、洋行前にこの書物に接したことがうかがわれる。なるほど東北大学附属図書館所蔵の漱石文庫にはいっているノルダウの同書(英訳、一八九八年版)には、傍線や書き込みが数多く見えており、五六〇ページもあるこの分厚い書物を実に丹念に読み通した跡がくっきりと残っている。これを細かに調べてみると、『倫敦塔』の叙述が、同書の第一編第四章「病因」の中で大都市の群居生活を論じている箇所と基本的に一致していることがわかる。

尹 相仁

◆『夢十夜』第十夜の豚のモチーフについて：絵画体験と創作の間

◇「比較文学研究」/55/朝日出版社/1989.06/p113-120,112

＞第十夜の豚のイメージには、ロンドン留学中の漱石が見たと思われる「野猪の群れの絵」が直接の素因となっている可能性が大きくなってくる。一九〇〇年にイギリスのナショナル・ギャラリーから発行された所蔵品の総合カタログThe National Gallery ed. By Edward J. Pointer. 3vols. Cassell & Company, 1899-1900の第三巻British and Modern Schoolに載っている《ガダラの豚の奇跡》The Miracle of Gadarene Swine. 1883がそれである。但し東北大学図書館所蔵の漱石文庫にはいっているナショナル・ギャラリー発行のA Catalogue of the National Gallery of British Artには、この絵は載っていない。

尹 相仁

◆すまいの風景：『門』における空間の象徴的描法

◇「比較文学研究」/57/朝日出版社/1990.06/p159-171

＞漱石が所蔵しているメーテルランクの著作は全部で五冊で、劇作家としてはイプセンの九冊に次いで多い。『モンナ・ヴァンナ』『ペレアスとメリザンド』『室内』『タンタジルの死』など主な作品を収録している戯曲集が三冊、エッセイ集としては『蜜蜂の生活』『二重庭園』の二冊となっている。作品集以外にメーテルランクについて論じた評論や研究書などがある。マックス・ノルダウの『墮落論』Degenerationの第二部第六章「神秘主義の下手なまね」には、かなり詳しく論じられている。このほかにも、漱石蔵書目録から、A・シモンズの『象徴主義文学運動』とE・E・ヘイル『現代の劇作家』があげられる。

尹 相仁

◆漱石文学における「世紀末」

◇『世紀末と漱石』/尹相仁著/岩波書店/1994.02/p73-115

＞漱石は「世紀末」の用法をどこから学んだらうか。漱石手沢本R・A・スコット＝ジェームズの『モダニズムとロマンス』三二—三三ページの記述に、漱石が脇線を引いた箇所を私が掲げた理由は、ここに述べられている内容が『三四郎』における「世紀末」を語をめぐる記述と概ね一致していると認められるからである。脇線のほかに、「Decadents」の語には下線を引いている。このほかにも、彼が「世紀末」という語の用例を習得した経路としてはつぎの二つのケースがさらに想定できる。オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの画像』と、マックス・ノルダウの『墮落論』である。

和田 利男

◆漱石と陶淵明

◇「ももんが」/15(2)/乙骨書店/1971.02/p2-6

>数年前、銀座松坂屋で催された夏日漱石展で、淵明の「帰去来辞」前編を揮毫した漱石の書を見たことがある。総字数三三八字にのぼる原文であるから、ずぶん長尺の巻物になつてゐた。淵明に対する愛好の度の並々ならぬことを示すものであらう。因みに「漱石山房蔵書目録」に拠ると、淵明関係のものとしては、清の陶・の「靖節先生集」と、同じく「靖節先生年譜攷異」が挙げてある。「靖節」は淵明の諡である。なほ明治二十九年一月十七日付正岡子規宛の書簡に、「帰途米山より陶淵明全集を得て目下誦読中甚だ愉快なり」とあるが、その「全集」が「靖節先生集」を指してゐるのかどうかは明らかでない。

和田 利男

◆漱石と王維

◇「ももんが」/15(3)/乙骨書店/1971.03/p2-6

>南画を好んで画いた漱石が、王維の詩を愛誦したのは自然なことと言はなければならない。『草枕』一に見える東洋の詩歌論のところでは、王維は陶淵明と並んでいつも引合ひに出されてゐる。漱石は王維の詩境を深く愛好してゐたが、その作品の上に受けた影響はどうかといふと、淵明の場合ほどはつきりしたものは見出せない。「漱石山房蔵書目録」に見える王維関係の書籍は、『唐賢三昧集』などの多数の詩人の集は別として、『王孟詩集』の名が出てゐるだけである。孟とは王維と並び称せられる孟浩然のことであるが、漱石の全集中、この詩人に言及した文字は一つも見当らない。

和田 利男

◆漱石と杜甫

◇「ももんが」/15(4)/乙骨書店/1971.04/p2-6

>漱石が杜詩を愛好し、自作の漢詩にもその影響を受けてゐることは、容易にその証を指摘することができる。大正二年七月三日付橋口貞宛の漱石の書簡を見ると、杜甫の詩に関する次のやうな記述がある。病中は御患与の杜甫を読み苦悶を消し候杜詩を一通り眼を通したのは今回が始めてに候是も御好意の御蔭と深く喜び居候。杜甫はえらいものに候。「漱石山房蔵書目録」には『杜律集解』『杜詩鏡鑑』『杜詩偶評』『杜工部文集註解』等の書名が載つてゐるが、橋口氏から贈られた書物といふのも前三者の中のどれかであらう。とにかく、それが機縁となつて杜詩に親しむやうになつたものと思はれる。

和田 利男

◆漱石と高青邱

◇「ももんが」/16(1)/乙骨書店/1972.01/p2-6

>大正五年九月一日付の漱石の書簡の中に、明の詩人高青邱に言及したところがある。漱石の言つてゐる高青邱の詩といふのは、「青邱子歌」と題する長篇の古詩を指してゐるのだと思はれる。森鷗外もこの詩篇に心引かれた一人であつた。彼はこの「青邱子歌」を和訳して、明治二十三年十月、「国民之友」に発表してゐる。漱石が、鷗外のこの訳詩を読んでゐたかどうかは詳かではない。「漱石山房蔵書目録」を見ると、斎藤拙堂の選になる『高青邱詩醇』が載つてゐるが、「青邱子歌」はもちろんこの中にも収められてゐる。鷗外がさうであつたやうに、漱石が青邱の詩に親しんだのも若い頃からであつたらしい。

無署名

◆附属図書館

◇『東北大学五十年史 下』/東北大学編/東北大学/1960.01/p1675-1732

>戦時中の図書館は、いろいろの面で沈滞期の容相を呈したのは当然のことであるが、一面プラスとなつた面も少くない。洋書の輸入は殆ど杜絶の状態となり、一方国内出版物も印刷用紙などの統制で発行が制限されて、勢い図書館購入費に余裕が生じる結果となつた。ケーベル文庫・第二次狩野文庫・漱石文庫・和田文庫などが、昭和十七年から十九年にかけて、いずれも三月の年度末に購入されているのはこの間の事情を物語るものであらう。太平洋戦争の間にこれらの貴重な特殊文庫が購入されたということはまことに感慨深いものがある。

無署名

◆漱石文庫(東北大学附属図書館)

◇『東北の文庫と稀覯本』/河北新報社編集局学芸部編/無明舎出版/1987.06/p12-13

>かつて東京・早稲田南町の「漱石山房」にあった夏日漱石の旧蔵書が、そっくりそのまま東北大学の図書館に保管されている。納められたのは昭和十九年で、当時の同大附属図書館長はドイツ文学の小宮豊隆教授。この人抜きで文庫の成立を語ることはできない。漱石関係者はこの文庫を「漱石研究の重要資料」としているが、その一つとして挙げられるのが、漱石の蔵書への自筆記入。これについては附属図書館調査研究室長の原田隆吉さんが丹念に調べた。蔵書のほかでは、日記、ノートと別に学生時代の試験の答案や自ら謄写版で刷つた試験問題などがある。